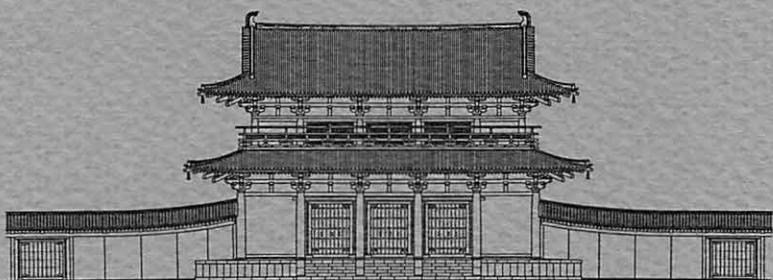


# 奈良國立文化財研究所年報

1992

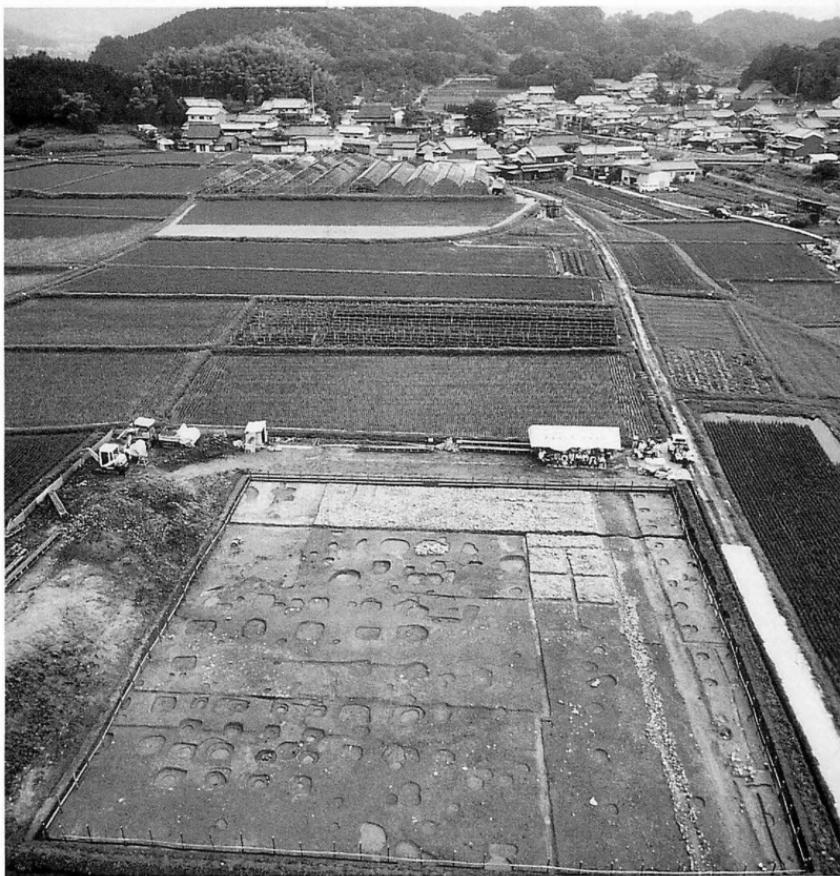


奈良國立文化財研究所

上 猿島池遺跡出土の工房関係遺物  
下 同遺跡出土の仏像鋳型(左)と海獸葡萄鏡鋳型(右) 撮影 井上直夫

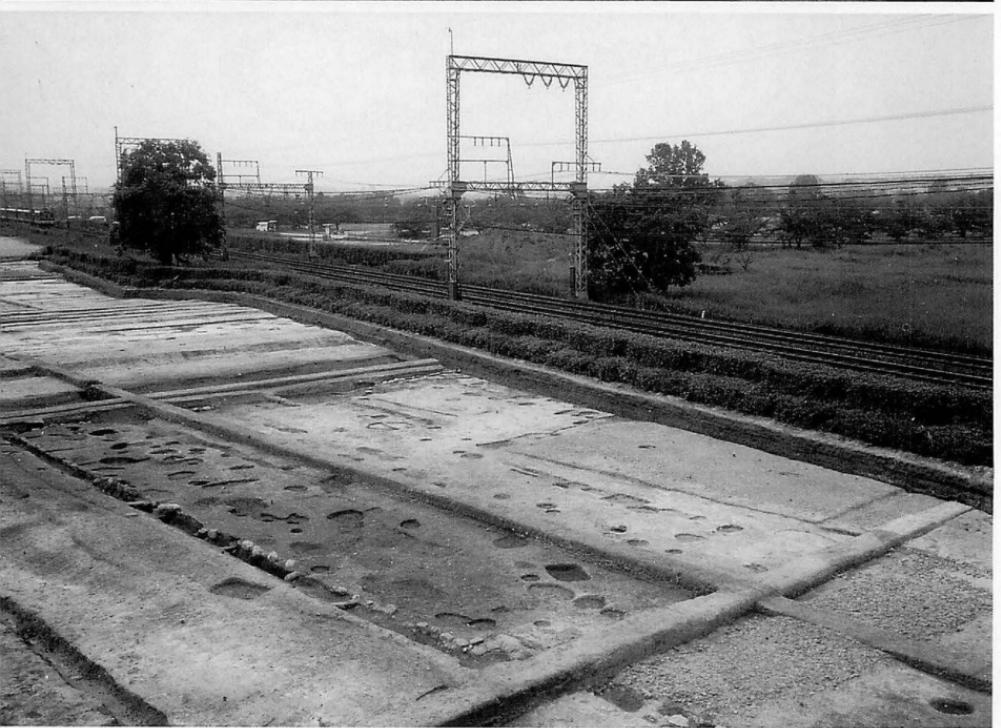
上 飛鳥池遺跡調査区全景(北西から)

下 坂田寺廻廊(第7次)調査区全景(東から) 撮影 井上直夫



上 石神遺跡(第10次)調査区全景(東から) 撮影 井上直夫

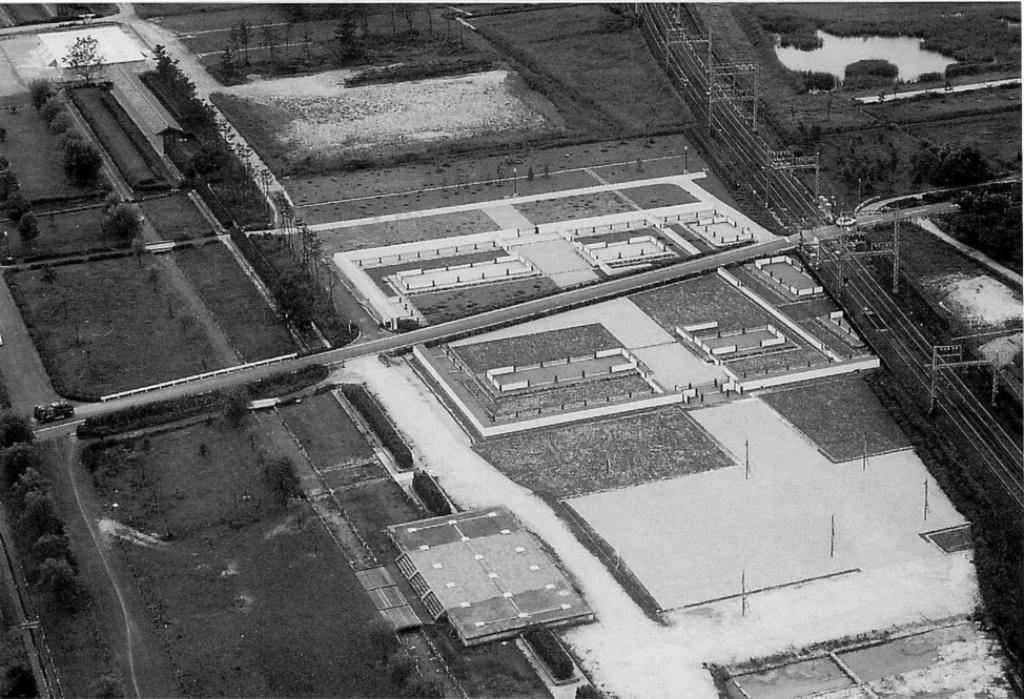
下 藤原京左京十一条三坊(雷丘北方遺跡 第66—1次)調査区全景(北から)



上 平城宮跡第213次調査区全景(北から) 撮影 牛嶋 茂

下 平城宮跡第222次調査区東半部(南東から) 撮影 佃 幹雄

上 西隆寺東北院(北から) 撮影 佃 幹雄  
下 法隆寺北方子院(東から) 撮影 牛嶋 茂



上 平城宮兵部省復原整備地区全景 撮影 佃 幹雄

下 秋田県近代化遺産調査 小坂鉱山康楽館

## 目 次

口絵 1 飛鳥池遺跡出土の遺物 (カラー)	4 平城宮跡第213次調査区 平城宮跡第222次調査区
2 飛鳥池遺跡調査区 坂田寺回廊跡	5 西隆寺食堂院跡 法隆寺子院跡
3 石神遺跡第10次調査区 雷丘北方遺跡第66-1次調査区	6 兵部省復原整備地区 秋田県近代化遺産調査

はじめに	1
飛鳥地域の発掘調査	2
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査	11
平城宮跡・平城京跡の発掘調査	18
神戸市の歴史的建造物調査(2)	38
秋田県近代化遺産総合調査	40
飛鳥藤原宮出土の木簡	42
興福寺所蔵聖教の紙背文書	44
平城宮式軒瓦の同範関係	48
平城宮出土の籌木	50
動物遺存体の調査(8)	51
遺跡の磁気探査(3)	52
愛媛県松野町の地形模型図化	54
飛鳥池遺跡出土遺物の材質	56
飛鳥地方出土石材の保存科学的調査	58
古代壁画の自然科学的調査と保存	59
平城宮跡・藤原宮跡の整備	60
飛鳥資料館の研究展示・特別展示	64
公開講演会要旨	65
中国との二つの交流	66
保存科学の国際活動	67
在外研究員報告	68
海外研修報告	69
海外活動報告	70
調査研究彙報	71
奈良国立文化財研究所要綱	72

奈良国立文化財研究所年報 1992

発行日 1993年3月15日 編集発行 奈良国立文化財研究所 担当 松本修自・本中 真 印刷 日本写真印刷㈱

表紙カット 平城宮朱雀門復原図

## はじめに

この年報は1991年度に当研究所が行った研究活動と事業のうち、主要なものを報告すると共に、予算・機構等の事務的概要をとりまとめ、当該年度における研究所のあゆみを紹介するものである。

研究活動の中心となる発掘調査は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が24件、8,580m<sup>2</sup>、平城宮跡発掘調査部が31件、15,723m<sup>2</sup>に及び、その中には相変わらず開発に伴う緊急調査が多く含まれている。飛鳥池遺跡・雷丘北方遺跡がその代表で、前者は飛鳥地域で初めて大規模な工房跡を見出し、7世紀末の手工業の実態を知ることができた。その成果を1992年秋の飛鳥資料館特別展示「飛鳥の工房」で発表している。雷丘北方遺跡は従来全く予想されなかつた位置に大規模な宮殿と思われる遺跡が発見されたもので、その主人公の特定を含め範囲確認や保存対策が今後の大きな課題となった。平城宮跡関係では第二次朝堂院東第四堂を調査し、これで第一堂から第四堂に至る南北棟建物については全容を解明することができた。また朝堂院前方の官衙についても式部省とその東方官衙を調査し、東方官衙の下層遺構が奈良時代前半期の式部省で、のちに兵部省と対称の位置に移ったことが明らかになった。

なおこうした発掘調査に伴う新発見でこの年度の特筆すべき成果としてトイレ遺構の解明がある。藤原京右京七条一坊から発掘されたトイレは、籌木の遺存だけでなく科学分析によって食物残渣、寄生虫の卵などを検出し、トイレ遺構調査法に新しい技術を確立した。土中からの寄生虫抽出例として我が国最初の報告である。早速にそれが応用され、平城京二条二坊の坊間路西側溝で不明とされていた遺構が水洗トイレであることも判明した。恐らくこの方法によって今後全国各地でトイレの存在が確認され、当時の食生活や生活環境を細かく知ることができるものと思われる。

そのほか鳥取県上淀廃寺出土の壁画保存などの開発的研究が進み、また飛鳥資料館では開館15周年記念特別展として、飛鳥とはゆかりの深い百濟から近年の出土品を借用して「飛鳥の源流」展を開催したのも意義深いものであった。また文化財保護にかかる研究協力の一環として、シベリヤ・パジリク古墳発掘に参加するなど、国際化が一層進展したのも特記すべきであろう。

今後とも多くの方々の暖かい御指導、御後援を賜りながら、当研究所の発展を期したい。

1993年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉

# 飛鳥地域の発掘調査

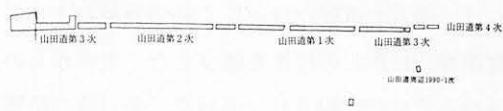
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1991年度に飛鳥地域において実施した石神遺跡・坂田寺・飛鳥池遺跡の調査概要を報告する（10頁の一覧参照）。

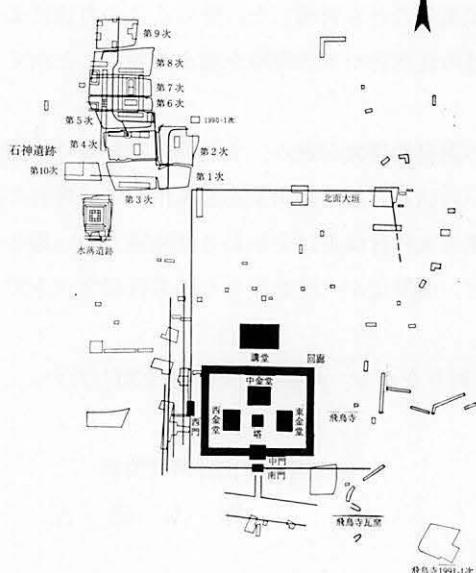
## 1. 石神遺跡第10次調査

**遺構** 今年度から旧飛鳥小学校の敷地（小字唐木）を調査する予定となった。今回の調査地は第3次調査区の西、史跡水落遺跡の北にあたる。検出した遺構は、大きくA期（7世紀中頃：齊明朝）、B期（7世紀後半：天武朝）、C期（7世紀末～8世紀初頭：藤原宮期）にわかれれる。

[A期] 飛鳥寺の北に東西大垣SA600が作られ、その北側に石神遺跡（齊明朝の饗宴施設）、南側に水落遺跡（齊六年<660>に中大兄皇子がつくった漏刻台＝水時計）が形成された時期。SA600は低い基壇をもつ掘立柱の一本柱壠で、第3次調査区で約45m分を検出していた。今回、調査区の東側でその西延長部の柱掘形を4箇検出した。このSA600の西端の柱穴から西へ約7.5mの間に柱穴はないが、その西側でSA600と方位を揃え、柱間寸法も同じ2.54m等間である東西壠SA1600を7間分検出した。SA600とSA1600は掘形の大きさや柱の径がわずかに異なるものの、一連の計画にもとづき造営された大垣とみられる。しかし、その間に柱穴はなく、この間は両遺跡を結ぶ通路として利用されたと考えられる。したがって、今回検出したA期の遺構は、1)東西大



垣の南に広がる水落遺跡に属す遺構、2)水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構、3)東西大垣の北に広がる石神遺跡に属す遺構、にわけられる。



飛鳥地域調査位置図（1:8,000）

1. 水落遺跡に属す遺構 SA1600の基壇南縁を限り西へ流れる石組溝SD1601と、その南に広がる石敷SX1630がある。SD1601は、底幅40～50cmの溝に復原できる。側石はほとんど失われているが、基壇南縁を画す玉石が溝の北の側石を兼ねた構造となろう。SX1630の石の敷き方は、石神遺跡側の石敷SX1590・1645・1655にくらべ丁寧で、石も全体に小型である。

2. 水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構 通路SX1620、水時計遺構から北へまっすぐ延びる木樋Eと小銅管を埋設した掘形SD277、その抜取り溝SD1595、おなじく北北西に延びる木樋Hを埋設した掘形SD1625とその抜取り溝SD297がある。

SX1620は、SA600の西の柱3間分を幅約7.5mの通路としたもの。木樋と小銅管を埋設した掘形SD277は約12m分を検出し、水時計中心部から50m以上延びていることを確認した。その抜取溝SD1595には大量の焼土が含まれており、SX1610やSA600が焼失した後に木樋などが抜き取られたことを示している。なお、水落遺跡の第5次調査区の所見では、外寸法で約30cmの幅をもつ木樋Eと、小銅管を包む10cm角の木樋は、心々距離で約50cmの間隔を保ち併設されているが、今回の観察結果では一方の抜取り痕跡しか認められず、どちらかが水落遺跡の第5次調査区と今回の調査区との間で東西いずれかの方向に曲がっていると推定される。いずれとも決しがたいが、断面観察の結果では、木樋Eが北へ延びている可能性が高い。

木樋Hを埋設した掘形SD1625は約17m分を検出し、木樋Gとの接続点から36m以上延びる。これもSX1610が焼失した後に木樋を抜き取っている。

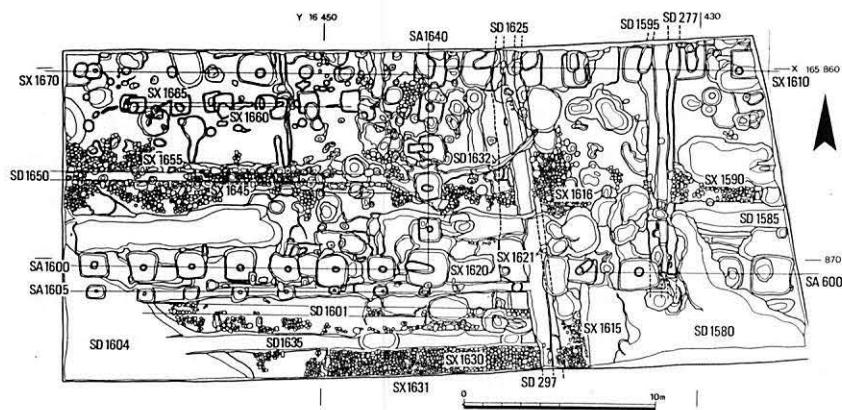
**3. 石神遺跡に属す遺構** 東西大垣 SA600・1600の北に広がる石敷1590・1645・1655、SA1600と柱列SX1610にとりつき通路SX1620の西を画す南北堀SA1640、SA1600の約5m北を西へ流れる東西石組溝SD1650、調査区の北辺に沿って検出した東西方向の柱列SX1610・1670・1655がある。

SX1590はかなり損なわれているが、SA600とSX1610の間は、全面にわたって石敷で舗装していたとみられる。SX1645・1655もSX1590と同じ大きさの川原石を敷きつめたもので、SD1650にむかって緩やかに傾斜し、SA1600とSX1670の間の雨水を排水する。

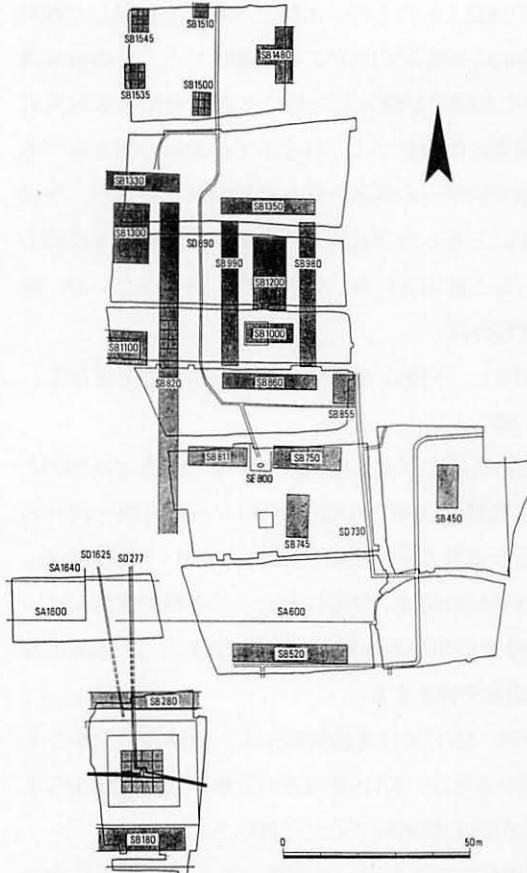
SA1640は5間分を検出し、柱間寸法は2.1m等間。SD1650は溝幅約40cmで、両側にひとかえほどの玉石を立て側石とする。東端の構造が不明であるが、SA1640付近の石敷の残存状況からすると、全体が浅くくぼみ、周囲の雨水を集めてSD1650に排水していたと推定される。

柱列SX1610・1670は、一連の東西棟建物の南側柱になるのか、東西堀になるのか調査区内の所見だけでは判断しがたい。しかし、SA1640を境に東と西では柱筋がわずかに揃わず、柱抜取り穴の形や柱間寸法も異なることから別の構造物であった可能性が高い。ただし、いずれの柱抜取り穴にも焼土が充満しており、同時に焼失した同時期の遺構と考えられる。SX1610の柱間寸法はほぼ2.6mで割りつけられるが、東から3間目が3.4mと広い。SX1670の柱間寸法は若干のばらつきがあるが、ほぼ2.3mである。

柱列SX1665は2間分を検出した。柱間寸法は東から約3.5m、約4.3mである。廃絶の時期はSX1670と同時期



石神遺跡第10次調査遺構図（1：400）



石神遺跡 A-3期主要遺構配置図（1：2,000）

付け加えられた可能性も考えられよう。その場合、SA1605はA期の遺構となり、これまでのB期の遺構配置については再考が必要となる。SX1660は、5間分（2.3m等間）を検出したのみであるが、あるいは東西棟建物の南側柱列となる可能性も残る。

[C期] B期の遺構がすべて取り壊され、小規模な建物や井戸が作られた時期。今回は、大量の土師器や須恵器を含む大小の土坑や斜行溝SD1632を検出したにとどまる。

**まとめ** 石神遺跡の南北の規模は東西大垣SA600から北へ160m以上におよぶことが知られていたが、今回、東西の規模が140m以上になることが明らかとなった。A-3期の遺構は、この中に5つほどの空間としてまとめられる。

SA600の北には、石敷きを中心とした空間がひろがる。井戸SE800から北へ延びる石組溝の東には、4棟の建物で囲まれた狭長な東区画がある。一方、石組溝の西にはより広大な西区画の存在が解明されつつある。さらに、この北には、石組溝の東に特異な平面形をもつ建物を中心とした区画があり、西には総柱建物が数棟建ち並んでいたようである。このうち、東区画はきわめてコンパクトにまとめられた配置をもち、重要な役割を果たした施設のひとつと推定される。一方、

と推定されるが、断ち割り調査の結果では、柱掘形が掘られた時期はSX1670よりわずかに遅れる。その基壇築成に伴い建てられた付属的な施設と考えられる。

[B期] A期の遺構が取り壊され、配置の異なる建物群が建設された時期。今回は、SA1600の南約1.2mにある東西堀SA1605を7間分と、柱列SX1660を検出した。SA1605は、柱間寸法と造営方位はSA1600と一致し、柱位置もほぼ正確に揃う。このSA1605は、第3次調査で検出した東西堀SA560の西延長部とみられるが、通路SX1620部分で柱穴は見いだされなかった。第3次調査区では、柱掘形はSA600の基壇上面から掘り込み、一部でSA600の柱掘形を壊し、基壇もかさ上げして南縁の化粧石も据えなおしているという所見から、A期の大垣の位置を南にずらし、B期もその位置をほぼ踏襲したものとみられてきた。しかし、柱間寸法と柱位置がSA1600と揃い、通路SX1620部分にこの堀が続かないことを重視すれば、SA1605はSA1600と一体の構造をもち、一時期遅れて

— 4 —

西区画では、2棟の四面廂建物が検出されており、東区画より大規模かつ中枢的な施設であった可能性が高い。今回検出した柱列 SX1610・1670は、この西区画の北を画す建物 SB1330に対応した南限施設となる可能性も考えられよう。その場合、西区画の南北の規模は110m近くに及び、東西の規模は42m以上となる。また、今回の調査では、石神遺跡と水落遺跡が、SA600で完全に隔てられた別の空間として機能していたのではなく、通路 SX1620によって一体の空間として利用され、水を利用した施設が西区画の中心部に延びていることも確認された。来年度以降の調査で、西区画の建物配置と、水を利用した施設の解明が期待される。

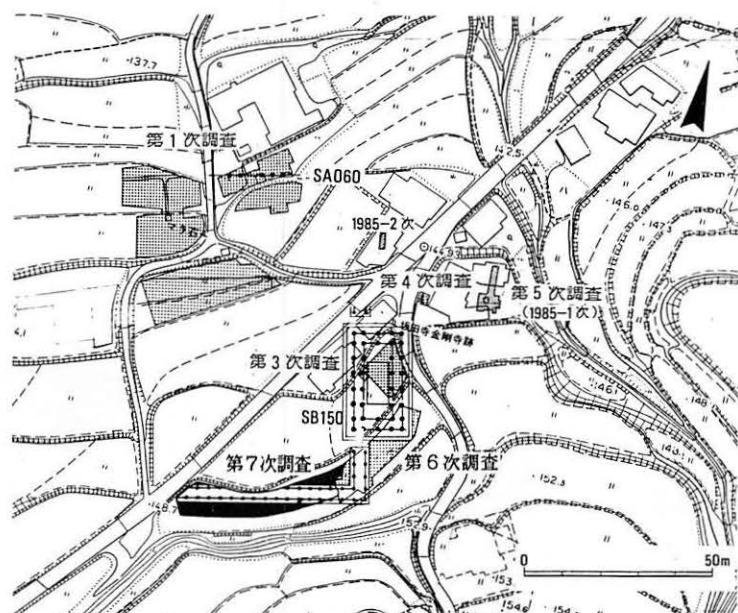
## 2. 坂田寺跡第7次調査

県の環境整備事業に伴う遺構確認調査の第2年次に当る。前回は、第3次調査で確認した西面する仏堂の南東隅と単廊の廻廊を検出し、両者が8世紀後半に造営された檜皮葺きの建物であることなどを明らかにした。今回検出した遺構には、南面廻廊とその内外の雨落溝、内庭の石敷のほか、石組施設・溝・炉や土砂崩れの跡などがある。

**南面廻廊 SC180** 廻廊は梁間1間で、柱間寸法は桁行・梁間とも3m(10尺)である。新たに15間分を検出し、昨年検出した2間を合わせると17間以上の規模になる。基壇は、花崗岩の岩盤を削って平坦面を形成し、両側の雨落溝を削り込むことで成形する。その上面に礎石を据え、さらに基壇土にあたる砂質土を薄く積む。廻廊の南側柱列には、各礎石間の中央に角柱列 SX190がある。柱は一辺20cm、深さ25cmの掘形を掘って据える。柱根が遺存した例では一辺12cm×7.5cmの断面長方形で、短辺を桁行方向に揃える。類例は山田寺にあるが、柱掘形は大型で柱間寸法にばらつきがある。この角柱列の機能については腰壁束の一種である可能性が高いが、今後類例を待って検討したい。

### 廻廊南雨落溝 SD181

SD181は岩盤を幅1.5～2.0m、深さ0.2～0.3mほど削り、溝の南外方は幅約0.5mほどの平坦面をもつだけで急傾斜で丘陵にいたる。雨落溝は、当初粘土層を溝底とし、石で護岸していた(SD181A)が、その後、溝は基壇縁石と護岸の石の据え付け掘形を含め掘り直され(SD181B)、10世紀後半代に埋没したとみられる。



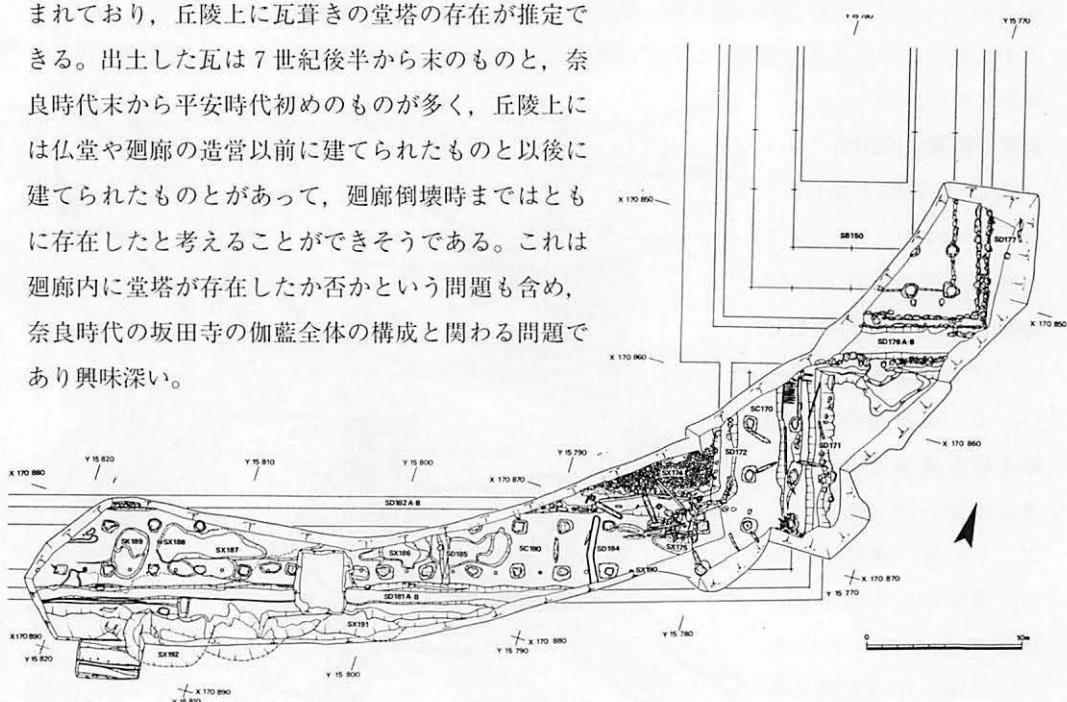
坂田寺調査位置図 (1 : 2,000)

**廻廊北雨落溝 SD182** SD182は調査区の東と西で検出したが、両者で様相が異なる。東では第6次調査区での所見と同じく、建築部材を含む黒灰色有機質土層の下で、幅1.6m、深さ0.3mの素掘り溝を検出した。西では当初幅0.8mの石組溝であったことを確認した。したがって廻廊の当初の基壇幅は5.4mと推定される。北雨落溝の内側は人頭大の川原石で舗装する (SX174)。

**その他の遺構** 石組施設 SX175、南北溝 SD184・185、土坑状のくぼみ SX186・187、炉跡 SX188、土砂崩れ跡 SX191・192がある。SX175は、第6次調査で既に検出しているが、廻廊の入隅から2間目の内側礎石列上に大型の石材を長方形に組んだものである。底は岩盤を削りだしたままで敷石などは無く、改修後の北雨落溝底とほぼ同じ高さである。

**遺物** 建築部材（柱・頭貫・虹梁・卷斗・檜皮）・瓦・土器・施釉陶器・鉄釘などがある。瓦以外は極めて少量で、建築部材を除けば、外側から流入した遺物がほとんどである。土器には土師器・須恵器・黒色土器があり、土師器では奈良時代前半から平安時代にかけての灯明皿が多い。施釉陶器には緑釉と、型押しの文様をもつ椀形の内外面に釉薬を施す唐三彩がある。

**まとめ** 今回の調査で、南面廻廊の規模が隅から17間以上であることが確認された。周辺の地形から廻廊は19間以上には延びないと考えられ、その東西幅は51m以上57m未満となる。廻廊の南北幅は58m程度と推定されており、廻廊で囲まれた空間は、ほぼ正方形に近く、その規模は一般的な国分寺とほぼ等しい。なお、廻廊南の土砂崩れによって形成された高まりには多量の瓦や基壇土と思われる山土のほか、土製小仏像、金箔を貼った漆製品の断片やガラス玉が含まれており、丘陵上に瓦葺きの堂塔の存在が推定できる。出土した瓦は7世紀後半から末のものと、奈良時代末から平安時代初めのものが多く、丘陵上には仏堂や廻廊の造営以前に建てられたものと以後に建てられたものとが混在する。廻廊倒壊時まではともに存在したと考えることができそうである。これは廻廊内に堂塔が存在したか否かという問題も含め、奈良時代の坂田寺の伽藍全体の構成と関わる問題であり興味深い。



坂田寺第6・7次調査遺構図 (1:500)

### 3. 飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991－1次調査）

飛鳥寺の南東に位置する飛鳥池の埋め立てに伴い、明日香村教育委員会と合同で実施した調査。検出した遺構は、掘立柱建物8棟、堀立柱塙4条、炉跡10基以上、石敷4、石組溝2条、井戸2基、素掘り溝、土坑などである。遺構は、平安時代、藤原宮期、7世紀中頃にわかれれる。

**平安時代の遺構** 谷（SD809）に沿った素掘り溝SD771がある。調査区南西辺では幅0.4m、深さ0.45mあり、谷筋に沿って北東に延びる。

**藤原宮期の遺構** 整地土の上面で建物、塙、炉跡、井戸、溝、土坑を検出した。これらは金属製品などの製作に関連する遺構であり、谷筋（SD809・810）に堆積した炭層と粗炭層から、金属製品（鉄・銅）・ガラス製品・木製品の製作に関わる遺物が大量に出土した。

掘立柱建物は、ほぼ方眼方位にそったSB748・754・757と、北で東にふれるSB767・785・805・808がある。SB748は柱間1.8m（6尺）。SB754は梁間、桁行とも2.4m（8尺）等間の南北棟であろう。SB757は東西の柱間2.4m（8尺）、南北の柱間3.0m（10尺）。この2棟は重複しており、SB757が古い。北で東にふれる建物は調査区の北半にある。北辺に位置するSB805は2間×3間の建物で、斜面を削って平坦面を作り、山側に2条の排水溝SD803とSD804を巡らす。梁間2.2m等間、桁行は総長6mを1.8m（6尺）2間と2.4m（8尺）に3分する。SB808はこのSB805北東妻に重複する建物。梁間総長は4.4mで同じ。桁行の柱間は1.8m（6尺）。2棟は側柱筋をほぼ揃える。新旧は不明。SB785はSB805の南東にあり、規模は2間×2間か。桁行2.7m（9尺）等間、梁間約3.9mである。南西の妻付近に炉跡SX788・791がある。SB781はその南西にある小規模な掘立柱建物で、梁間2.4m、桁行3.2mである。北西妻柱筋はSB805の側柱筋にほぼ揃うので、2棟は一体のものであろう。建物内部に炉跡SX774～776・787がある。これらの建物は内部やその近辺に鍛冶炉跡があるので工房と考えられる。調査区西辺にあるSB767は2間×3間で梁間1.8m（6尺）、桁行は2間が1.65m（5.5尺）、1間が0.9m（3尺）である。

掘立柱列SA748・751は調査区の南西部にあり、SA748は柱間1.8m（6尺）の2間、SA751は3.0m（10尺）である。近接して炉跡SX750があるので建物の一部か。塙SA753は大型の土坑SK770や炉跡群の南にあり、4間で柱間は3.0m（10尺）等間、柱掘形は長辺が1mをこえ大型である。柱筋はSA751やSB785の側柱筋とほぼ並ぶ。この塙の南には廃棄物の堆積層ともいえる炭層が広がるので、作業区域の南東を限る塙と考えられる。SA756・759は調査区の西端にあって互いにほぼ直交する2条の掘立柱塙である。SA756は柱間1.5m（5尺）で3間分を、SA759は柱間1.8m（6尺）で3間分を検出した。

鍛冶炉は直径35～40cm、深さ10cm前後の円形の炉跡が10基以上ある。これらは地面を掘り下げただけのものと、穴を掘ったあと内側に粘土を張りつけたものがある。SX788は6つの炉が重なり、古いものの内側に土を入れて粘土を貼り、かさ上げしながらつくり替えている。最下層のSX7886は東西約77cm、南北50cm以上ある。SX774～776は検出面では3基の炉が位置をずらしながら重複していたが、その下層にも少なくとも2基の炉跡があり、近接した狭い範囲で何度も炉をつくり

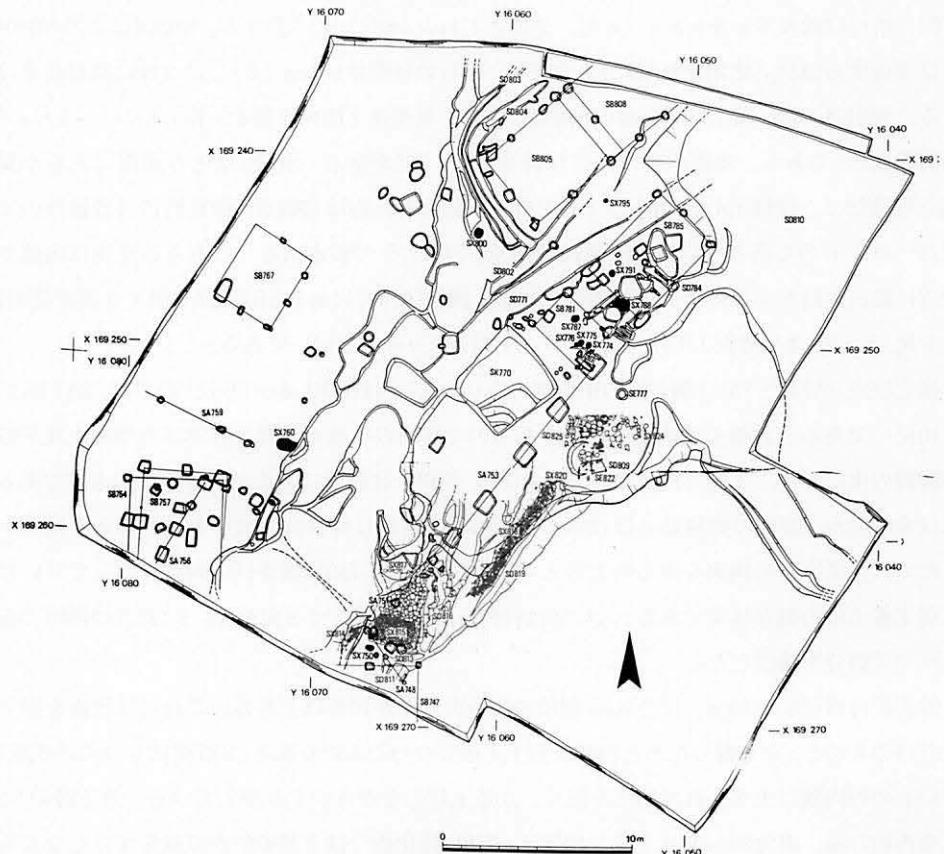
替えている。これらの炉跡を、先にのべた掘立柱建物 SB781と SB785が覆っていたと考えられる。SB805の南西にある SX800は直径約60cm あり、内部に厚さ10cm ほど炭が充満する。炭の中からは銅釘や銅切り屑・銅塊が出土した。このほか、調査区南端に小型の鍛冶炉 SX750があり、西部にやや大型の炉跡 SX760がある。SX760は幅約50cm、残存する長さ約 1 m であるが、他の鍛冶炉のように内部に炭の堆積はない。

井戸 SE777は曲物側板を枠とする。枠は一段のみで、掘形径60cm、曲物径45cmである。

建物 SB785や塀 SA753の南から東にかけては、多量の炭・灰を交えた遺物包含層があった。この層は、調査区南西から北東に延びる浅い谷 SD809と、南東から北西に延びるやや深い谷 SD810に堆積した産業廃棄物の堆積層であり、鉄・銅滓、鞴羽口、鋳型、埴堀、鉄製品、銅製品、銅切り屑、須恵器、土師器、瓦、木器、木簡、砥石などが出土した。

**7世紀中頃の遺構** 藤原宮期の遺構が形成された整地土層、あるいは同時期の炭層の下層で検出した。石敷遺構4箇所、井戸<sup>1</sup>基、石組溝2条などがある。

石敷 SX815は、南側約半分にコ字形に列石を巡らせ、その中には拳大の石を、北側には人頭大の石を敷きつめる。石敷の北辺には列石 SX817があり、コ字形列石の2辺とほぼ平行する。石敷



### 飛鳥池遺跡調査遺構図（1：400）

の南側の溝 SD813は素掘りで、これを挟んだ南側は一段高いテラスになる。東側の溝 SD816は、元来両側を石で護岸してあったようだ。SX815をはずれると護岸の痕跡はなく、素掘りの溝となる。SD813と SD816は SX815の南東隅でつながり、ここにさらに南上段にある素掘りの南北溝 SD811が注ぎ込む。SX814は SX815の西側で一段低い所にある小石を敷いた石敷。SX818は、SX815と北西の井戸まわりの SX823をつなぐように作られた舗道状の石敷で、南端が約 1 m高い。南東側は、岩盤を削り込んで急な斜面となる。この斜面と石敷面との間には素掘り溝 SD819がある。SD819は下で石組 SX820につながり、SX820は斜めに石敷 SX818を横切って石敷 SX823の西側にある石組溝 SD825につながる。SX823は、井戸 SE822周囲に設けられた石敷。南側の岩盤を削り込んで平坦面を作り、その南端に井戸 SE822を掘る。西側を石組溝 SD825が囲み、東側にも弧状に並ぶ石列 SX824が残るので、南側を除き周囲に石組溝を巡らせていました可能性が強い。

SE822は SX823の南端にある横板組の井戸である。一辺約80cm、深さ約1.6mで、横板は北3段、東と南は4段、西は5段が遺存する。最下段だけ内側に横桟をかませる。このほか、藤原宮期の建物 SB805の下層でこの時期の SD809の堆積層（灰色シルト層・灰緑色粘砂層）を掘り下げた。土器・瓦・木器・木筒が出土し、少量の輪の羽口や漆壺が含まれる。井戸 SE822からほぼ北北西に向かって谷地形が延びていたものと推定できる。

**遺物** 瓦塼類、木筒・木製品、金属・金属製品、土器・土製品、石・石製品がある。そのうち工房関係の遺物は木・金・土・石にまたがる多種多様な内容をもつ。

土器には土師器と須恵器のほかに少量の綠釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがある。灰緑色粘砂から出土した7世紀前半代のものと、炭層・粗炭層から出土した7世紀後半から8世紀初めの土器が多く、6世紀初めと平安時代の土器が少量ある。炭層を中心に出土した約800点以上の漆付着土器には、パレットとして使用した杯皿類と容器として使用した壺甕類がある。

土製品には、鋳造・鍛造・ガラスに関わる輪羽口、坩堝、とりべ、鋳型、炉壁のほかに土馬、円面硯、転用硯、土製円盤がある。輪羽口はおもに炭層から出土し、総数520点以上ある。ガラス坩堝は平城京内や石川県寺家遺跡など10遺跡に出土例があるが、いずれも点数は少なく、蓋は今回初めて出土した。ガラス関連の遺物にはほかに小玉の鋳型3点、原材料と思われる方鉛鉱や良質の石英塊がある。小玉の鋳型は円または楕円形の粘土板の一方の面に直径5mmの小孔を多数並べたもので、小孔の中央に1mm未満の細孔が貫通する。細孔にはガラスが残り、下面の細孔部分周辺は他よりも熱による変色が強い。類例は天理市布留遺跡、権原市四条大田中遺跡等7遺跡で出土しているが、坩堝とともに出土したのは今回が初めてである。とりべは椀形の厚手のものと、土師器のつくりと同様の薄手のものがあり、いずれも片口に作り銅湯玉やカラミが付着する。鋳型のほとんどは製品の種類が明らかでない破片であるが、仏像型と海獸葡萄鏡型が注目される。

石製品では大量の砥石のほか、石製鋳型などが少量ある。砥石は2.5cm大から50cm大までの多様な大きさのものが約990点ある。大型・中型の「据え砥」は少なく、三角形・角形・多角柱形などに使い込んだ小型の「持ち砥」が多い。

金属製品には銅と鉄があり、製品・未製品・屑など約200点のほかに原料や鉱滓がある。鉄製品には釘・鎌・刀子・鎌・鑿・はばきなどがあり、刀子や鎌の未製品が目立つ。銅製品では人形、ピンセット、円頭釘、針のほか魚子を打った板、金銅製の板、透かし彫りの切り抜き屑片、たがねで削りとったときに生じる螺旋形の屑など具体的な製作の工程が推測できる。

木器は粗炭層から多量に出土した。金属器工房で用いた様（ためし：注文見本）、漆工房用の道具、木工具のほか、祭祀具・遊戯具・服飾具・容器等がある。様には鎌・鎌・刀子・釘・門金具、座金具、壺金具がある。木筒は、炭層及び粗炭層から103点が出土した。

瓦搏類は整理箱にして60箱ほど出土した。内訳は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦、面戸瓦、熨斗瓦、鴟尾、搏、土管などであるが、いずれも飛鳥寺所用のものと考えられる。

**まとめ** 今回の調査で、飛鳥寺近くの谷地形を利用し、7世紀中頃（漆・金属）と藤原宮期に営まれた工房の存在が明らかとなった。宮期にはほぼ同じ場所で、金属（銅・鉄）・ガラス・木漆器が生産されていたことも判明し、鉄製品の製作に木製の様を使うこともこの時期に遡ることが知られた。この工房の性格については、原料などに評制下で税として集められた物品を使用する一方、「石川宮」や「大伯皇子宮」などの宮の物品も用いていることから、「官営工房」と断定するには至らなかった。しかし、飛鳥の宮都のごく近くで金属製品などの生産遺跡を発見できたことが最大の収穫であり、今後、飛鳥地域の土地利用や当時の金属器生産の実態を考える上で重要な資料を提供したといえよう。

(大脇 潔)

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AJF - S	藤原宮第66次	91. 8. 6~91. 9. 2	315m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJG - T・U	藤原宮第68次	91. 9. 6~92. 2. 6	1,460m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AMH - J	藤原宮第66-1次	91. 4. 1~91. 8. 3	1,200m <sup>2</sup>	左京十一条三坊南西坪（雷丘北方遺跡）
6AJF - Q	藤原宮第66-2次	91. 4. 4~91. 4. 5	30m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJF - Q	藤原宮第66-3次	91. 4. 4~91. 4. 11	85m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJF - Q	藤原宮第66-4次	91. 4. 8~91. 4. 11	70m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJQ - E	藤原宮第66-5次	91. 6. 17~91. 7. 5	204m <sup>2</sup>	右京二条二坊北西・南西坪
6AMR - R	藤原宮第66-6次	91. 7. 30~91. 8. 29	166m <sup>2</sup>	右京十条四坊南東坪
6AJH - P	藤原宮第66-7次	91. 8. 1~91. 8. 5	60m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJP - M	藤原宮第66-8次	91. 8. 23~91. 9. 5	192m <sup>2</sup>	右京二条一坊南東坪
6AJM - B	藤原宮第66-9次	91. 9. 17~91. 9. 21	40m <sup>2</sup>	宮南面大垣
6AJC - M	藤原宮第66-10次	91. 11. 11~91. 11. 14	75m <sup>2</sup>	左京六条三坊北西坪
6AJK - C	藤原宮第66-11次	91. 11. 19~91. 12. 16	221m <sup>2</sup>	宮西面大垣
6AJH - S	藤原宮第66-12次	92. 1. 8~92. 2. 19	350m <sup>2</sup>	右京七条一坊北西坪
6AMH - J・Q・R・S	藤原宮第66-13次	91. 12. 2~92. 4. 14	745m <sup>2</sup>	左京十一条三坊南西坪（雷丘北方遺跡）
6AJD - P	藤原宮第66-14次	92. 2. 5~92. 2. 6	14.5m <sup>2</sup>	宮南東隅
6AJG - T	藤原宮第66-15次	92. 2. 12~92. 4. 13	800m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJH - P	藤原宮第66-16次	92. 2. 24~92. 2. 25	70m <sup>2</sup>	宮西方官衛
6AJN - N	藤原宮第66-17次	92. 3. 23~92. 3. 31	60m <sup>2</sup>	左京二条三坊南西・南東坪
6AMD - U	石神遺跡第10次	91. 7. 8~91. 12. 17	670m <sup>2</sup>	飛鳥淨御原宮推定地
5BST - A	坂田寺第7次	91. 9. 2~91. 12. 17	330m <sup>2</sup>	南面廻廊
5BAS - W	飛鳥寺1991-1次	91. 4. 5~91. 8. 12	1,190m <sup>2</sup>	飛鳥池遺跡
6AMC - N	山田道第4次	91. 7. 11~91. 7. 31	209m <sup>2</sup>	山田道推定地
6BMY - C	本薬師寺1991-1次	92. 3. 10~92. 3. 27	22m <sup>2</sup>	金堂南・東辺

1991年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部調査地一覧

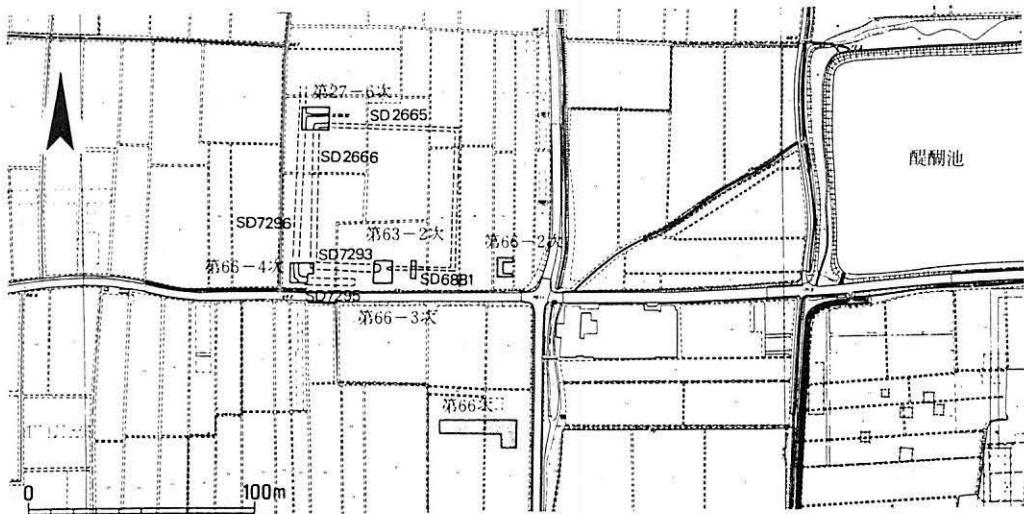
# 藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

## 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1991年度は藤原宮跡内で12件、京跡で8件の発掘調査を行った（10頁一覧参照）。これらのうち、京の半数近くは住宅建設等に伴う小規模な調査なので割愛し、主要な調査にしほって報告する。なお、宮東方官衙地区の第67次調査は本年度に開始したが、調査の主体は1992年度に持ち越したため、報告は次年報に送る。

### 1. 藤原宮跡

**西方官衙地区の調査** 第66-2・3・4次調査は、橿原市繩手町において相次いで行った、住宅新築および駐車場造成に伴う事前調査である。調査地は醍醐池の西方、西方官衙地区北部にあたるが、後世の削平が著しく、宮跡内としては宮期の遺構が比較的希薄なところである。調査の結果、藤原宮期の遺構はまったく検出できなかったが、14世紀頃のものと思われる二重の環濠を巡らせた正方形の区画が明らかになった。かつて第27-6次調査で西北隅部、また第63-2次調査で南辺の一部を検出していた濠による区画の、西南隅と南辺中央部を今回追加確認し、全体の規模を想定できるようになったのである。すなわち第66-4次調査区で二重の濠の西南隅を確認、濠内区画の南北長は約65m、第66-3次調査区で検出した内濠鞍部を中軸線として東に折り返すと東西も約65mとなる。外濠で囲まれた区画の外寸は76m、内・外濠間の幅は平均4.2m。この空閑地に土壘あるいは築地のような施設があったか否かは定かでない。両濠の埋土から14世紀を主体に若干13世紀代のものを混えた土器が出土した。区画が正方形で環濠が二重に巡るところは、通常の中世環濠集落のあり方とは様相を異にし、土豪層の居館のような施設を想定すべきであろうが、内部の実態が未だ不明なので判断は控える。



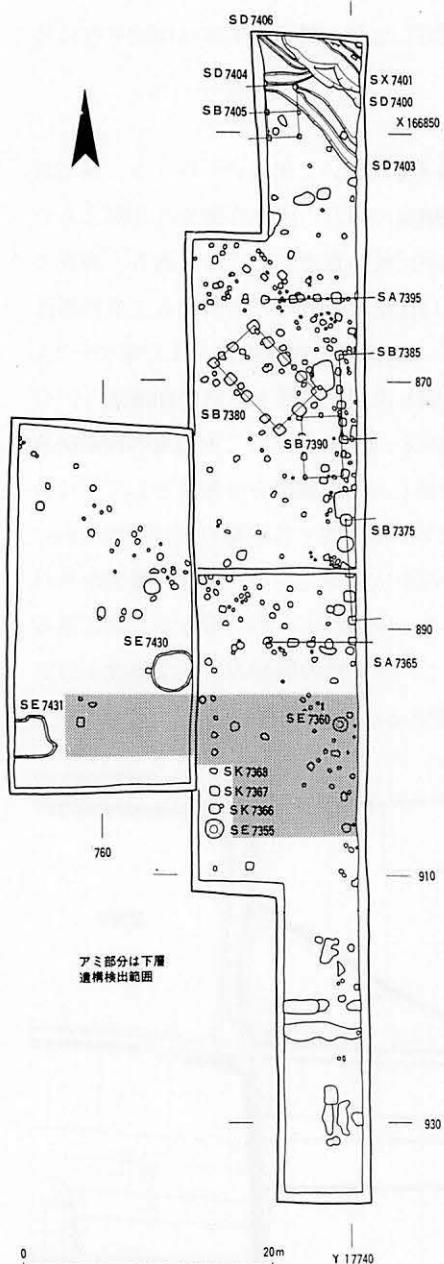
藤原宮跡第66-3・4 次調査環濠区画復原図

第68次調査は樺原市四分町で実施した、市営団地立て替えに伴う事前調査である。調査地は西方官衙地区南部にあたり、弥生時代の集落遺跡である四分遺跡が広がるところでもある。調査は東区・西区に分けて行ったが、まとめて報告する。

上層遺構には掘立柱建物・塀、井戸、土坑、溝などがあり、これらは古墳時代・7世紀前半代・

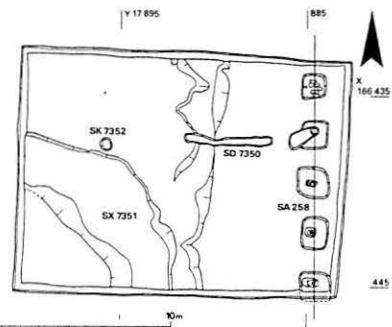
7世紀後半～藤原宮期に分けられる。古墳時代に属するのは井戸 SE7355・SE7360・SE7430と斜行する大溝 SD7400など。井戸はいずれも素掘りで、古墳時代後期の土器が出土した。溝 SD7400は幅5.5m以上、深さ1.8m。中央部には、流れに沿って机の天板を転用した板材や杭による木組の施設が設けられている。体積土上層から5世紀後半～6世紀の、下層から4世紀末～5世紀初頭の土器が出土した。7世紀前半代の遺構には掘立柱建物 SB7380がある。桁行4間（柱1.8m）、梁間2間（1.9m）で、北で西に45度振れる。この振れは溝 SD7400や東隣接地の第59次調査で検出した弥生時代後期の水田遺構の方位と一致し、地形に制約された土地利用が長期間続いたことを示している。7世紀後半から藤原宮期にかけての遺構には掘立柱建物4棟・塀2条、井戸1基、土坑多数のほか、一辺0.6m前後の柱穴があるが建物としてはまとめられない。建物 SB7375と SB7385は西側柱筋を揃えて建つ南北棟で、柱間寸法は2.1mと1.4mのそれぞれ等間。南北に東西塀 SA7365・7395を伴う。SB7405はそれらの西北方にある総柱建物で、南北2間（柱間2.0m）、東西1間以上（2.4m）の規模である。井戸 SE7431は、抜取穴から出土した井戸枠から、本来は横板組の井戸とみられる。掘形は上幅で一辺約3m、深さ1.7m、2段に掘り込まれており、底部から藤原宮期の土師器杯・甕や須恵器平瓶などがまとめて出土した。

東西に長くあけた下層用の調査区において、緑灰色粘土（地山）面で多数の柱穴・土坑・溝を検出した。いずれも弥生時代中期に属する。中には直径が30cmを超えるヤマグワやケヤキの柱根を残す柱穴もあるが、建物としてはまとめない。なお、今回調査区の範囲内では水田の遺構は確認できなかった。



藤原宮跡第68次調査遺構図（1：600）

**西面・南面大垣の調査** 橿原市繩手町における第66-11次調査は住宅新築、同飛驒町の第66-9次調査は下水道埋設工事に伴う事前調査である。66-11次調査では西面大垣 - SA258の柱穴を5個検出、柱の直径は30cm、柱間は2.6mである。大垣の西3mあたりから地山が西へ向かって大きく下降、その上に木質物・瓦器を含む堆積層を確認した。これは西外濠そのものではないが、中世までその幅を広げて周辺の水を集める基幹水路として機能していたことを示す。



藤原宮跡第66-11次調査遺構図（1：400）

66-9次調査は幅0.8m、南北長49mという狭い範囲の調査であったが、南面大垣SA2900の柱穴2個と内濠・外濠の一部を検出した。

## 2. 藤原京跡

**左京十二条三坊の調査（雷丘北方遺跡第1・2次調査）** 雷丘北方遺跡第1次調査は、藤原宮第66-1次調査として、高市郡明日香大字雷でおこなった。県道新設によって移転する民家住宅の新築に伴う事前調査である。調査地は雷丘の北北西約200m、低い丘陵の西に広がる緩やかな斜面上の水田である。西方約100mには飛鳥川が西北流し、その氾濫原を示す地形が調査地の西端部まで及んでいる。藤原京の条坊では左京十二条三坊西南坪にあたる。第1次調査の結果、7世紀後半から奈良時代にかけての大規模な四面庇付東西棟建物とその西方に廊状に並ぶ2条の南北柱穴列を検出、四面庇建物は西南坪の中軸線にほぼ合致し、この建物を中心に回廊が巡る空間が想定された。建物の構造・規模や廊を伴う形態などから見て、官衙あるいは宮の可能性があり、きわめて重要な遺跡であるとの認識から、県道敷設予定地とその隣接地を対象として、遺跡の範囲確認を目的として行ったのが第2次調査（藤原宮第66-13次）である。その結果、廊と考えた遺構は17間×2間の身舎の東西に庇が付く長大な南北棟建物で、しかも南北に2棟が並ぶこと、外周には掘立柱の堀と溝を巡らせていることなどが判明、遺跡の規模は少なくとも南北2坪にわたることが確実となった。

全体の地形は西北方へ緩く傾斜しており、古代の遺構はこの傾斜地に厚さ0.5~1mに及ぶ大規模な整地を行ってから造られている。検出した主な遺構は、出土遺物から見て、天武朝末期に造営され、藤原宮期を経て、奈良時代前半まで持続したと考えられる。そして建物・溝に造り替えがあることから、A・Bの2時期に分けることができる。

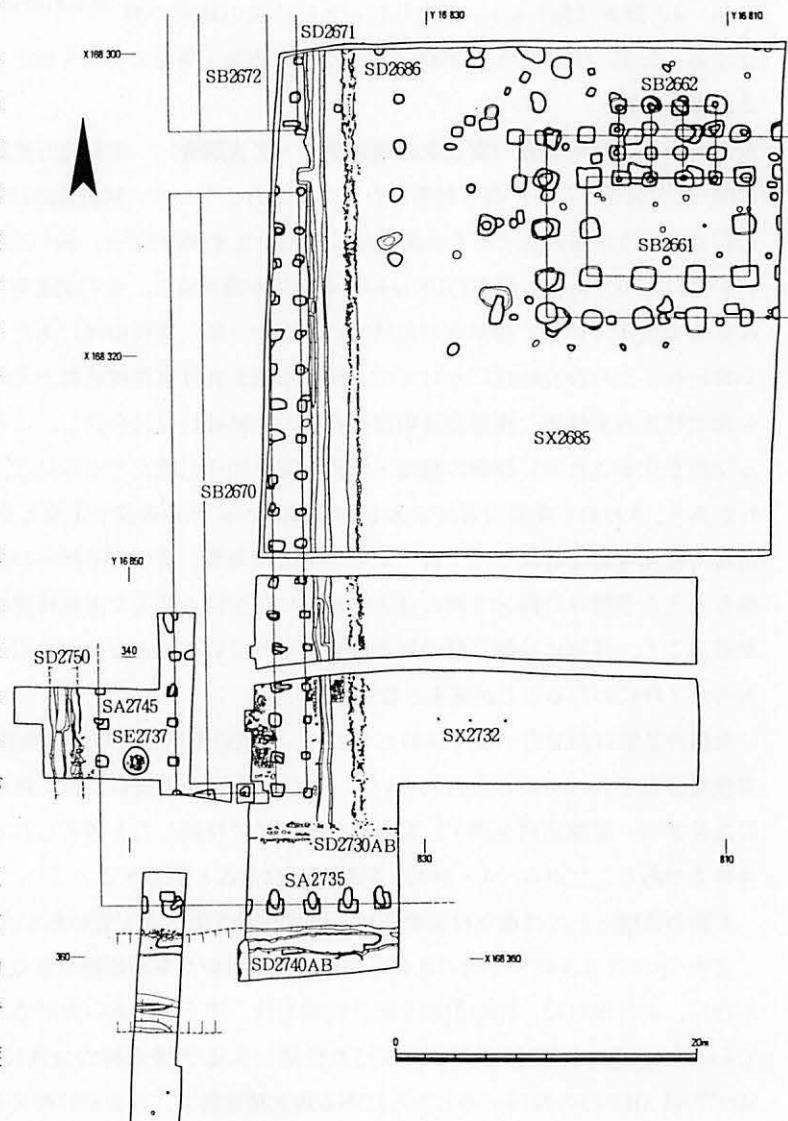
A期の遺構としては掘立柱建物3棟、掘立柱堀2条、溝4条がある。

建物SB2661は3間×2間の身舎の四面に庇が付いた東西建物である。柱間寸法は身舎の桁行が12尺、梁行が11尺、庇の出が9尺。柱掘形は一辺2mに近い方形で、柱はすべて抜き取られていた。北庇に柱筋を揃えて西6尺の位置にある2個の柱穴は階段用の柱であろう。建物SB2670はSB2661の西16mのところにある南北棟建物で、身舎が17間×2間、その東西に庇が付く。柱間寸法は身舎が8尺等間、庇の出が7尺。建物内部に玉石敷SX2731が施されている。石

敷は東庇の柱筋から2.5m東まで確認でき、建物内だけでなく周囲まで舗装されていたようだ。石敷面は建物中心部が高く、隅がやや低い。壁のない吹抜けの建物であろうか。建物 SB2572はSB2670の北3.9m隔てて柱筋を揃えて建つ南北棟建物である。東南の隅を検出したに過ぎないが、SB2670と同規模と想定できよう。溝 SD2671は建物 SB2670・2672のすぐ東を並行する南北溝で、両建物に共通する東雨落溝。幅1m前後、深さ約0.3mで、底面に黄褐色粘土を貼っており、元は石組溝であった可能性が強い。溝 SD2730Aは建物 SB2670の南約2mにある東西石組溝で、SD2671が接続する。B期に造り替えがある。

塀 SA2735・2745は建物 SB2670の南約7.5mと西約5.0mにある掘立柱の塀である。両者は鍵の手に接続して区画の西南隅を形成する。柱間は共に8尺等間。東西塀 SA2735の柱掘形は一辺1.2mほどの方形で、深さ約1m、北川からの抜取りの痕が明瞭なのに対して、南北塀 SA2745の柱掘形は一辺1mと若干小型。柱根が一ヶ所残つており、径約30cm、長さ約50cmで礎板上に立つ。溝 SD2740は南の区画塀 SA2735のすぐ南にある幅約5m、深さ0.5mほどの東西溝で、北岸には約1m間隔で丸太を打ち込んだしがらみの護岸がある。B期に北岸を造り替え幅を広げた。西の区画塀の外側にあるのが南北溝 SD2750で、幅約2.6m、深さ0.4mほどである。東岸を雑に石で護岸する。

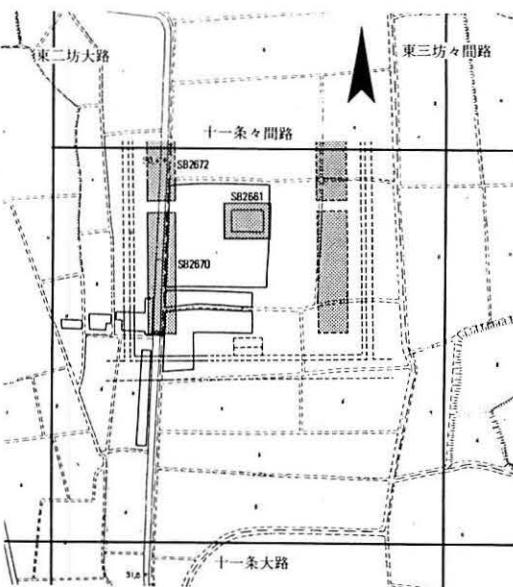
B期になると、中心



雷丘北方遺跡第1・2次調査遺構図（1:500）

建物 SB2661を廃して新たに SB2662が建ち、SB2670 の東の溝 SD2671が埋め立てられて SD2686が造られ、SD2730などが改修される。また、建物 SB2662以南の一面に大粒の礫を敷きつめる。建物 SB2662は3間×3間の縦柱建物で、柱間寸法が東西7尺、南北5.5尺の東西棟である。柱掘形は1.0~1.3mの方形で、A期のSB2661の柱掘形を切る。柱はすべて抜き取られていた。SB2661と中軸線が一致する。

出土遺物には土器、瓦、木簡、木製品、石製品などがあり、その多くは外周の溝と礫敷上面から出土したものである。時期的には藤原宮期を中心に7世紀後半のものが一定量を占め、奈良時代前半の土器が少量混じる。



雷丘北方遺跡復原図（1：2,500）

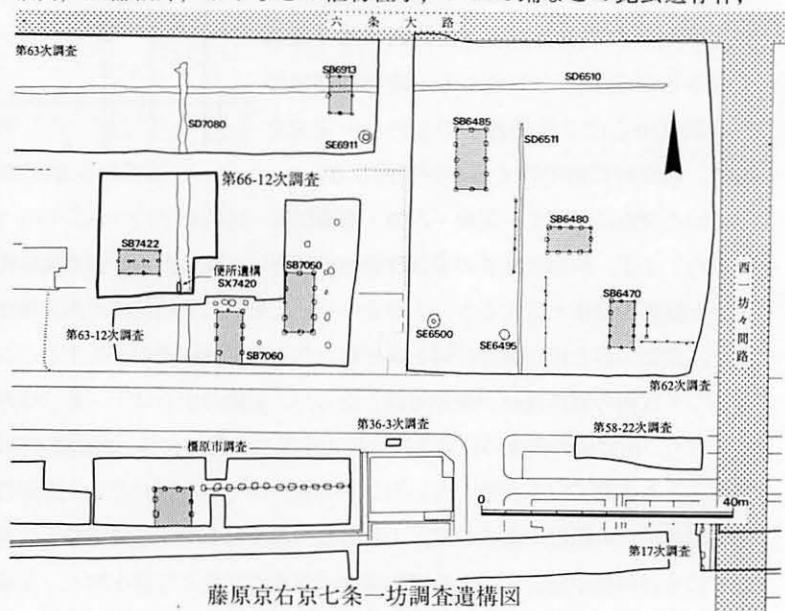
2回の調査によって、規模・占地・遺構配置・時期などについてその一端を明らかにすることができた。まず、四面庇付きの東西棟建物の西方に2棟の長大な南北棟建物が並ぶことから、これを正殿と脇殿の関係と捉えると、正殿を中心とし東側にも同規模の南北棟建物の存在が想定できる。また、建物の西と南に掘立柱塀と溝が組み合った区画施設が存在するところから、正殿中軸線を折り返して区画の東西規模が推定可能となった。正殿の中心は十二条三坊西南坪の中心線にはほぼ一致しており、南脇殿の南妻の位置もほぼ坪の南北二分線に合う。北脇殿が西北坪へ渡ることは確実で、少なくとも南北二坪を占地していたことも明らかである。ただし、南辺の区画施設から十二条大路までは約55mの距離があるので、これらは南限ではなく中心建物群を区画するものであろう。遺構配置にも計画性が窺える。北脇殿の南妻は正殿の北庇と柱筋を揃え、正殿の中軸線から脇殿の中軸線までの距離は100尺、同じく南の東西塀までが150尺、西の南北塀までが130尺なのである。さらにもう、正殿は四面庇付きで柱間寸法が大きく、また柱掘形もきわめて大型である。藤原京内で今までに判明している、一坪占地の邸宅跡である右京七条一坊西南坪の正殿（柱間桁行9尺、梁行7尺、掘形の大きさ1.1~1.7m）と比較すると、その大きさは際だっている。また、脇殿も東西両庇付きで、南脇殿の17間に匹敵する長大な建物は京内では知られていない。

しかしながら、この遺跡の性格についてはなお不明な点が多い。寺院・貴族の邸宅・官衙・宮などが候補として挙げられようが、建物の形態・規模、出土遺物などから前二者には無理がある。先に推定した建物配置について、北脇殿を南と同規模とし、正殿の北に後殿の存在を想定してみると、宮殿の典型とされる飛鳥稻淵宮殿遺跡のそれと極めて類似した形態となり、宮として性格づけることも不可能ではない。しかし、現段階では調査面積もごく一部に過ぎず、その性格解明には今後の継続的な調査を待ちたい。

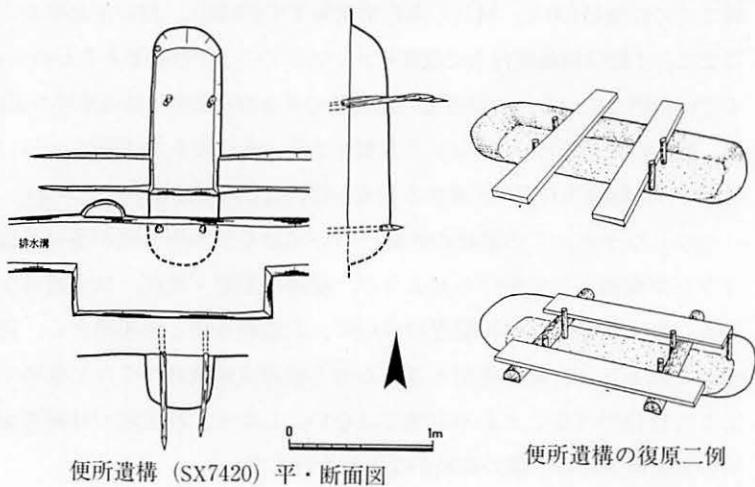
**右京七条一坊の調査** 第66-12次調査は樺原市高殿町における宅地造成工事の事前調査である。調査地は藤原宮の南面西門のすぐ東南にあたり、従前おこなった周辺の調査（第17・19・62・63次）の成果を合わせると、小規模な建物が井戸や堀を伴って点在し、戸籍に関連した木簡の内容や硯（転用硯）の出土が比較的多いなどの特徴が認められ、ここには何らかの公的な機関が存在した可能性が強い。

今回の調査で特記すべきは便所遺構 SX7420の発見である。これは発掘区の東南隅で検出した長さ1.6m、幅0.5mの長楕円形の平面を呈する素掘りの土坑で、長軸を南北方向に置く。深さは現状で0.4mをとどめるのみだが、周辺の柱穴等の遺存状況から推し量ると、本来1m前後の深さであった。土坑内には東西30cm、南北85cmの間隔で4本の木杭が打ち込まれていた。土坑内の堆積土からは、木や木簡、土器細片、ウリなどの植物種子、ハエの蛹などの昆虫遺存体、魚骨などの食物残渣、寄生虫の卵などが出土した。同定された寄生虫卵には、回虫・鞭虫・肝吸虫・横川吸虫がある。昆虫や種子、寄生虫卵など便所に特有な遺存体の抽出に採用した各種の科学的分析方法は、今後同種の遺構が発掘された場合に取るべき指針となろう。また、当時の人々の食生活や衛生状況、生活環境などを復原する手がかりともなる。

なお、本調査の成果のうち便所遺構に関しては単独の冊子『藤原京跡の便所遺構—右京七条一坊西北坪—』（奈良国立文化財研究所 1992年5月）として刊行済みである。



藤原京右京七条一坊調査遺構図



便所遺構 (SX7420) 平・断面図

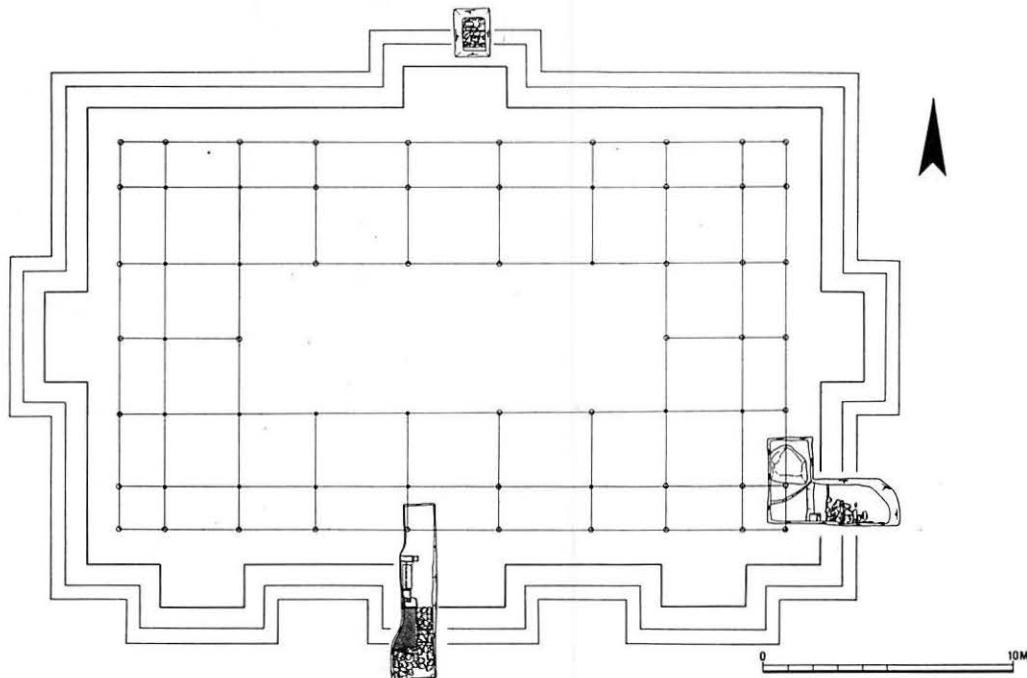
便所遺構の復原二例

**本薬師寺金堂跡の調査（右京八条三坊）** 1992年度から実施する予定の、寺域や伽藍規模等を解明するための本格調査に先だって行った予備調査である。金堂跡南辺中央部および東南隅に近い東辺で各一箇所トレンチを入れた。発掘面積は小さかったが、基壇・階段の地覆石、雨落溝、その外方の玉石敷などを検出、遺構の遺存状況が望外に良好であることを確認、1990年の金堂基壇北辺の調査成果とあわせ、以下の想定が可能となった。

金堂基壇は東西29.5m、南北18.2mに復原でき、平城薬師寺と同規模。また、東西両塔心を結ぶ線と金堂心との距離は29.7m（100尺）で、これも平城薬師寺に等しい。基壇築成にあたって掘込み地業を行わないことも共通する。ただし階段前の犬走り幅は90cmあり、平城の40cmに比してかなり大きな数値を示す。裳階の存在を示す遺構は確認できなかったが、小型の軒瓦が出土し、その存在は推定できよう。平安時代初期の軒瓦が出土し、その頃まで建物が存続したようだ。中央階段正面の地覆石が抜き取られたのは14世紀後半頃である。 (山本忠尚)

藤原・平城両京の薬師寺金堂基壇の対比（※は復原した数値）

基壇規模	東西長	南北長	高さ	出	犬走幅	雨落溝幅	地覆石
藤原京	※29.5m	※18.2m	1.5m	3.2m	90cm	56cm	40×120cm
平城京	29.4m	18.3m	1.4m	3.2m	85cm (側柱)	50cm	36×120cm
階段周辺	階段幅	階段出	犬走り幅	溝幅	地覆石	耳石ナ空	
藤原京	※4.2m	1.74m	90cm	55cm	38×101cm	15×20cm	
平城京	4.2m	1.65m	40cm	40cm	36×100cm	15~20cm	



本薬師寺金堂跡の調査遺構図（1：300）

# 平城宮跡・平城京跡の発掘調査

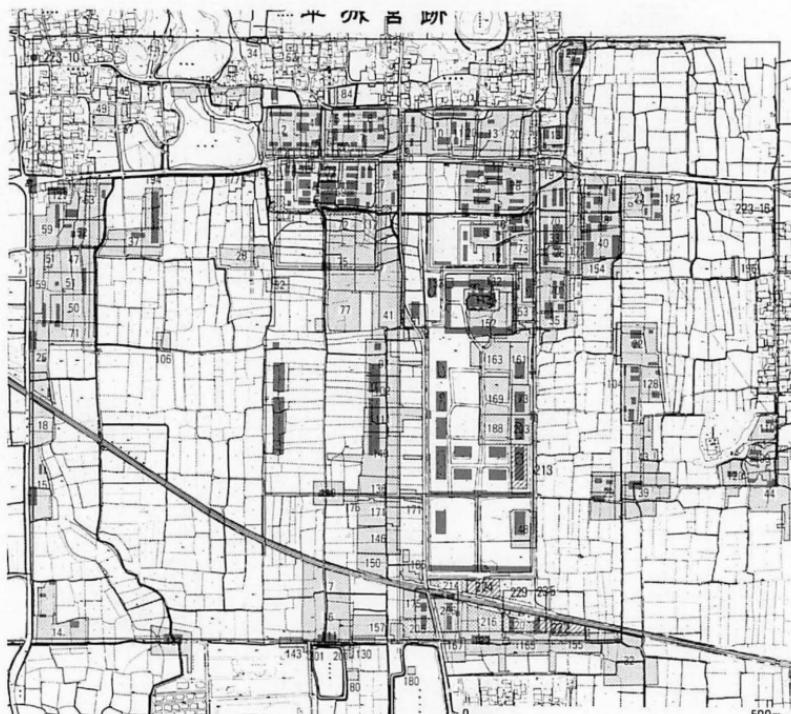
## 平城宮跡発掘調査部

1991年度に平城宮跡発掘調査部は、平城宮跡内で第二次朝堂院東第四堂、式部省・式部省東官衛、壬生門北方、北面大垣、西面大垣、東面大垣（2件）の7件、平城京城で22件（頭塔を含む）、法隆寺で2件の発掘調査を実施した。以下、主要な調査の概要を報告する。

### 1. 平城宮跡の調査

#### 第二次朝堂院東第四堂の調査（第213次）

第二次朝堂院については、1984年度の第163次調査以来、継続的にその東半部の調査を実施してきた。これまでに東第一堂～東第三堂の調査を終えており、上層の礎石建物の下層に、掘立柱の前身建物が存在することが判明している。今回の調査によって、東第四堂の下層にも前身建物の存在を確認し、上層の朝堂とあわせてその規模と構造を明らかにすることができた。

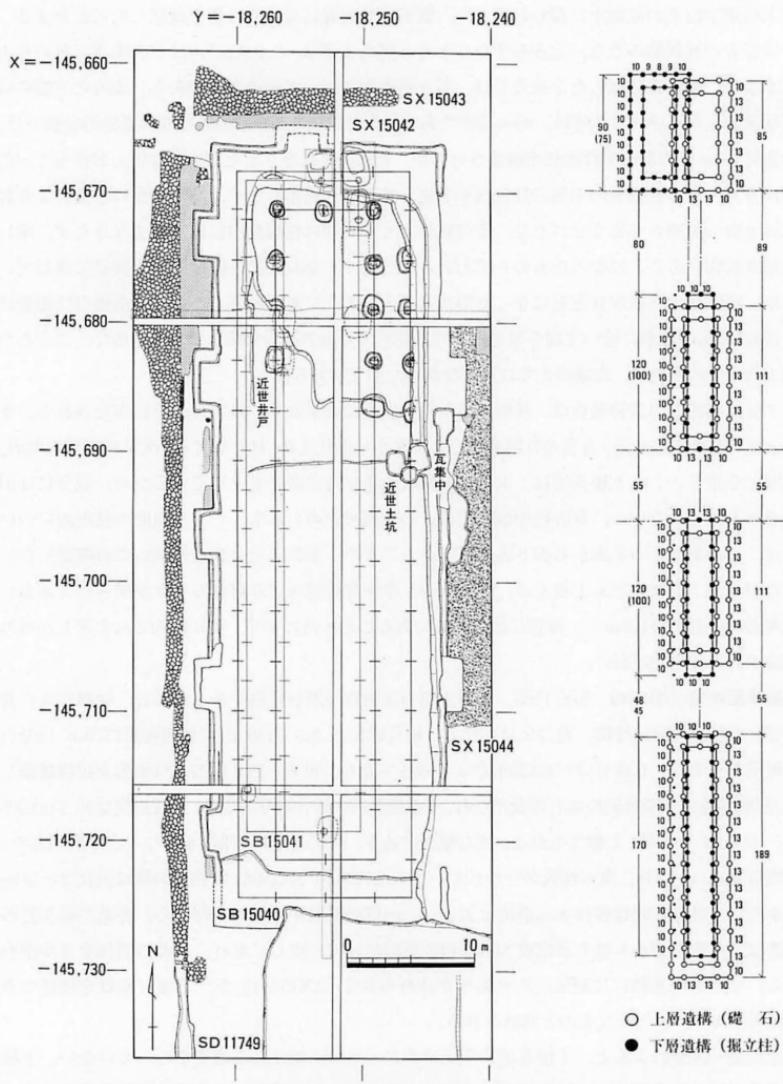


**下層東第四堂 SB15041** 桁行17間、梁間3間の西廂の掘立柱建物である。柱間は桁行、梁間ともに10尺等間で、桁行総長50.3m（170尺）、梁間総長8.9m（30尺）の規模を有する。柱穴は全て上層東第四堂の基壇土に覆われており、断ち割り調査によって11個を確認したにとどまる。身舎部分の柱掘形のうち、北から少なくとも6間めまでは、2.0×1.5mほどの南北に長い長方形をなし、平面を確認した3柱穴では、各々の南端に偏って柱抜取穴がある。抜取穴下部の収束状況から復元される柱径は、40cm程度である。またこれらの掘形の北寄りの部分の底面では、一辺約1.3mの方形の先行掘形が確認されたが、それには柱を立てた痕跡がない。おそらく、当初は方形に近い柱掘形の中央に柱位置を予定して工事を開始したが、なんらかの事情により柱位置を南へ移動させることになり、その結果として当初の柱掘形内に柱が収まりきらず、南に掘形を拡張することになったものと思われる。それでもなお、柱位置は掘形の南端に偏しているが、柱掘形の形状が長方形になった事情は以上のように解される。ただし、南妻の柱掘形は一辺約1.5mの方形に近い平面を呈しており、先行する別の掘形は確認できないので、こうした施工途中での変更は、南端部までは及ばなかったようである。

下層東第四堂の造営過程は、基壇の断ち割り調査の成果から、以下のように復元される。まず全体に整地をした後、身舎の柱掘形をその上面から掘り込み、柱を立てる。次に柱掘形を埋め、基壇土を積む。この下層基壇は、上層東第四堂の造営時に削平を受けているため、完全には旧状をとどめていないが、身舎柱の抜取穴はその上面で認められる。一方、西廂の柱掘形については、この基壇土の上面から掘り込まれていることを、東第三堂の調査に続いて再確認した。したがって、少なくとも工程上は、廂部分の工事が身舎部分より遅れることが明らかである。柱掘形の一辺が約1.0mと、身舎に比べ小型であることとあわせて、後に付加された差しきけの土廂である可能性が高い。

**上層東第四堂 SB15040** 桁行15間、梁間4間の四面廂の礎石建物である。桁行、梁間とともに身舎部分の柱間は13尺等間、廂の出は10尺で、桁行総長55.9m（189尺）、梁間総長13.6m（46尺）の規模を有する。北寄りの1/3は基壇がよく残っており、根石を残す礎石据付掘形を13個確認した。基壇周囲には、内外二重の礎敷が行われている（SX15042・SX15043）。内側の礎は直径2～3cmと小粒で、外側の礎は直径8cm前後と大きい。内側の礎敷が工程上先行する。礎敷の継ぎ目の位置は、東第一堂から続く盲暗渠SD11749の東肩にはほぼ一致しており、両者の関係をうかがわせる。なお基壇東側には凝灰岩片の集中が認められる（SX15044）が、下部に礎敷を確認できる箇所があり、二次的なものと判断される。

断ち割り調査によると、上層基壇の築成にあたっては、掘り込み地業を行っていない。下層第四堂の柱を抜き取り、下層基壇を一部削った後、その上に厚さ10cm前後の積み土を重ねて、上層基壇を成形する。本来の基壇高は、西側の礎敷面から約1.6mと推定される。

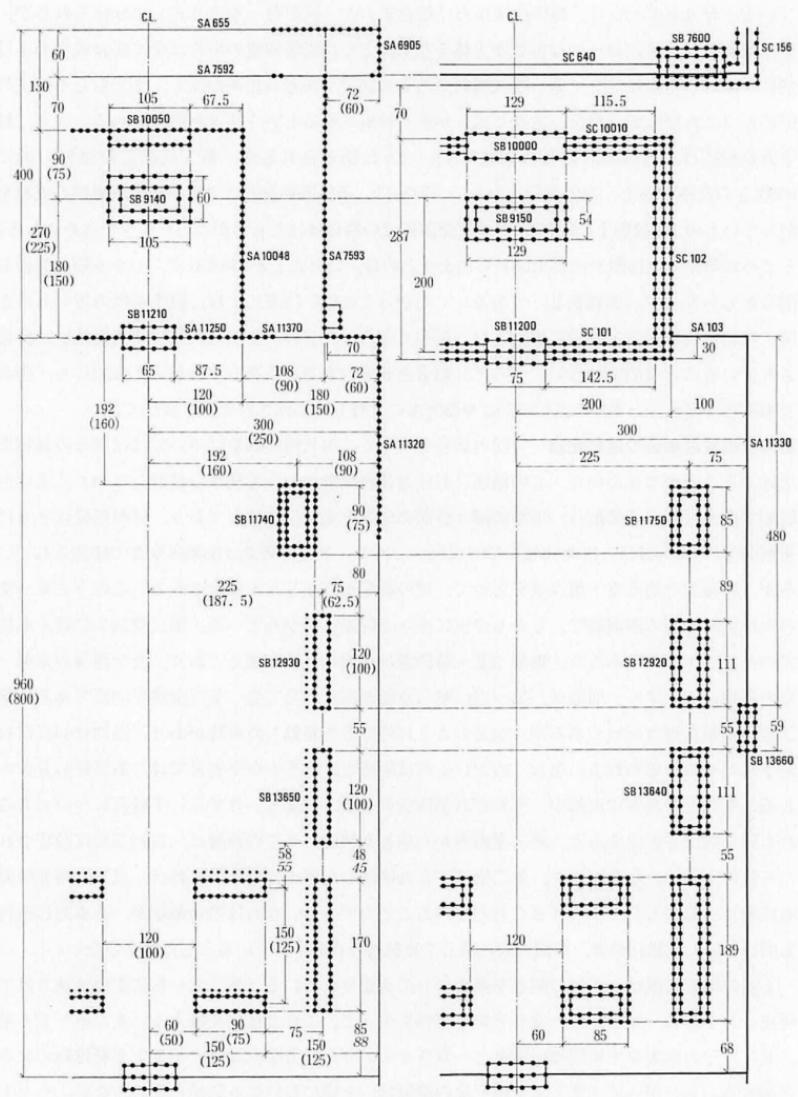


第二次朝堂院東第四堂の調査（第213次）遺構図（1：450）と朝堂配置図

上層東第四堂が瓦葺であったことは疑いなく、軒瓦は6225C-6663Cの組み合わせが用いられている。軒丸瓦6225Cは、製作技法から「接合式」と「成形台一本造り式」に分けられるが、第二次朝堂院地区においては前者が主体をなし、とくに東第四堂の場合は全て接合式である可能性が高い。それに対して第二次大極殿や内裏地区では後者の比率が高く、またむしろ同文の6225A（これは全て成形台一本造り式）が多く使用されるという状況が認められる。一方、軒平瓦6663Cは、範の彫り直しの前後でCa・Cbに細分されるが、第二次朝堂院は相対的に6663Caの比率が高く、範傷進行も少ない。同時に、恭仁遷都以前に主流をなす曲線顎の先端を削らないもの（曲線顎I）が多く、とくに東第四堂の場合はほとんどがこのタイプで占められる。ところが第二次大極殿や内裏地区から出土するのは、ほとんどが6663Cbで、しかも顎の先端を削る新しいタイプ（曲線顎II）である。したがって6663Cに関しては、製作年代の古いものが第二次朝堂院地区に主体的に供給され、新しく作られたものが第二次大極殿や内裏地区に供給されていることは間違いない。よって、前者と組み合わされる接合式の軒丸瓦6225Cも、後者と組み合う成形台一本造り式の6225Cや6225Aに先行して製作された可能性が大きい。

**第二次朝堂院地区の建物配置** 今回の調査をもって、南北棟の朝堂についてはほぼその様相を把握することができたので、この地区における建物配置について簡単に整理しておく。まず上層朝堂院を区画する築地は、下層の掘立柱塀の位置を完全に踏襲しており、区画規模はともに東西600尺（500大尺）、南北960尺（800大尺）である。下層の朝堂は東第四堂まで確認されているが、未確認の第五堂・第六堂を含めて、12の朝堂が存在したと推定される。このうち第一堂のみは梁間5間の四面廊で、しかも中央に寄った位置におかれている。第二堂以下に対する格式の差を示すものであろう。東第二堂～第四堂は南北に柱筋を揃えており、身舎西端が東第一堂の東端に一致する。間隔は、第一堂～第二堂間が80尺、第二堂～第三堂間が55尺である。第三堂～第四堂間は48尺であるが、前述のように柱位置を移動した痕跡があり、当初は45尺に設定されたものと思われる。なお、古図によれば同様な土塁をもつ平安宮では、第五堂の身舎の北端と第六堂の身舎の南端が、それぞれ第四堂の北妻、南妻と一致する。平城宮についてもこれと同じ状況を想定すると、第三堂南妻から第五堂棟通りまでの距離は、当初55尺に設定された可能性が高い。したがって、第二堂以下とは隔絶した第一堂を除外すれば、以下の南北の間隔設定は、原則として55尺にとられたとみることができる。なお位置の基準が、基本的に桁行方向については建物の妻、梁間方向については棟通りにおかれていることは間違いない。

上層の朝堂位置は、下層の朝堂を基準にして決定されている。第二堂～第四堂の棟通りは下層建物と正確に一致し、第一堂もその特殊性を失って、これと柱筋を揃える。また第一堂と第二堂は、その南妻を下層建物の南妻と一致させており、一方第三堂は、北妻を下層建物の北妻と揃える。したがって、第二堂と第三堂の間隔は、上層においても55尺と変わらない。ただ上層朝堂院では、この55尺という間隔設定を第三堂～第四堂間にも適用しており、その結果、上層第四堂の北妻は下層との間にわずかなずれを生じている。



下層遺構

上層遺構

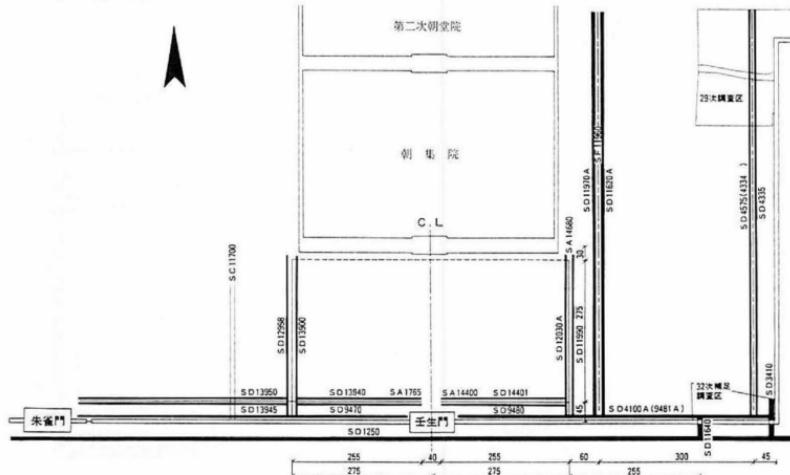
第二次大極殿院・朝堂院の建物配置の復原 単位小尺、( ) 大尺

## 式部省・式部省東官衙の調査（第222次）

第二次朝堂院地区南方の官衙については、1987年度の第175次調査以来、継続して発掘調査を行っており、兵部省および式部省の実態が判明しつつある。今回の調査は式部省の東端部とその東方で実施したもので、奈良時代後半の式部省および式部省東官衙の様相を明らかにするとともに、後者の下層に奈良時代前半の式部省関連官衙の存在を確認した。また壬生門の内側に、平城宮造営当初に遡る大規模な掘立柱の区画が存在することが明らかとなった。

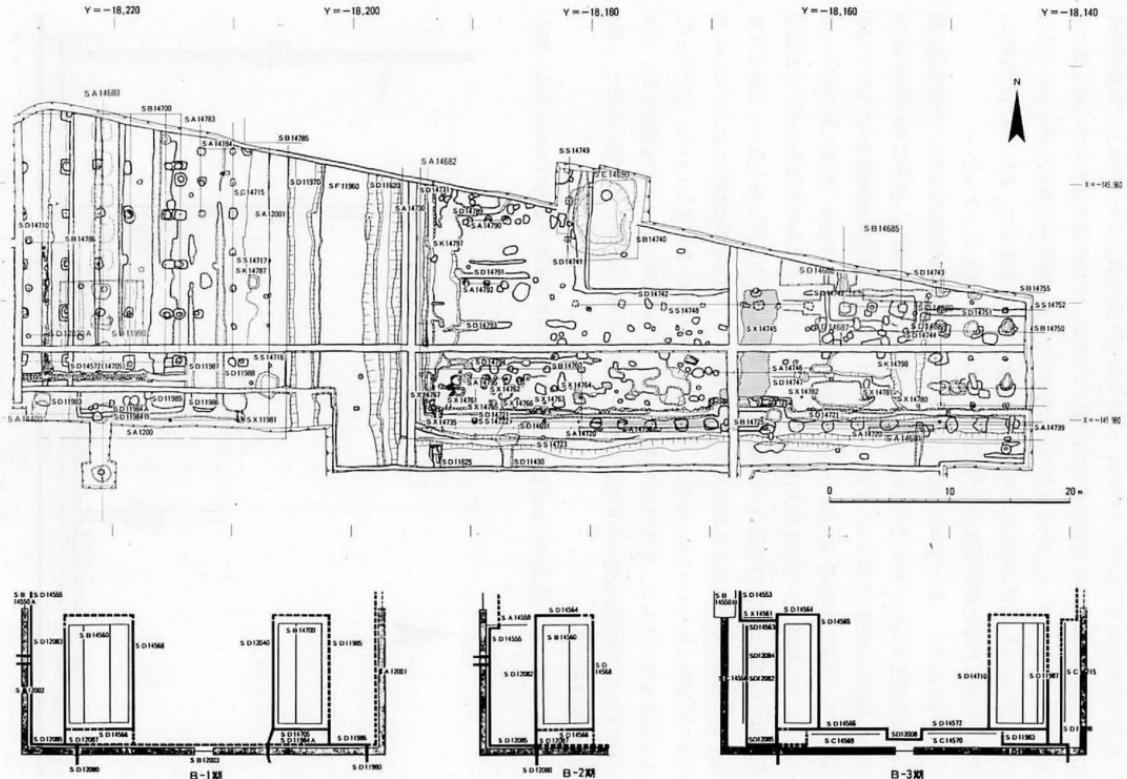
**A期（奈良時代前半）** 壬生門西のSA1765と対応する掘立柱東西塀 SA14400と、その東端に接続する掘立柱南北塀 SA14680が設けられる。前者は1間分（柱間12尺），後者はSA14400の北側で9間分、南側で2間分（柱間9尺）を検出した。SA14680は、壬生門の中軸線から275大尺（330尺）東にあり、両側に雨落溝 SD11990・SD12030Aを伴う。SA14400は、南面大垣の心から45大尺（54尺）北に位置し、今回は削平により残っていないが、同様の雨落溝を伴うことが以前に確認されている。なおSA14680は、式部省東第二堂の棟通りの位置にあたるが、これと壬生門をはさんで対称の位置にある兵部省西第二堂の下層では、掘立柱塀は検出されていないものの、両側の雨落溝に相当する2本の南北溝（SD12998・SD13900）を確認している。したがって、その中央に塀を想定すると、壬生門の内側に、これらの掘立柱塀で囲まれた東西194.7m（550大尺=660尺）の大規模な区画の存在を復元することができる。内部状況の究明を含めて、今後の重要な検討課題である。

この区画の東方には、奈良時代を通じて存続したとみられる南北道路 SF11960がある。路心



宮東南部区画復元図（奈良時代前半） 単位大尺

- 24 -



式部省・式部省東官衙の調査（第222次）遺構図（1：500）と式部省変遷図

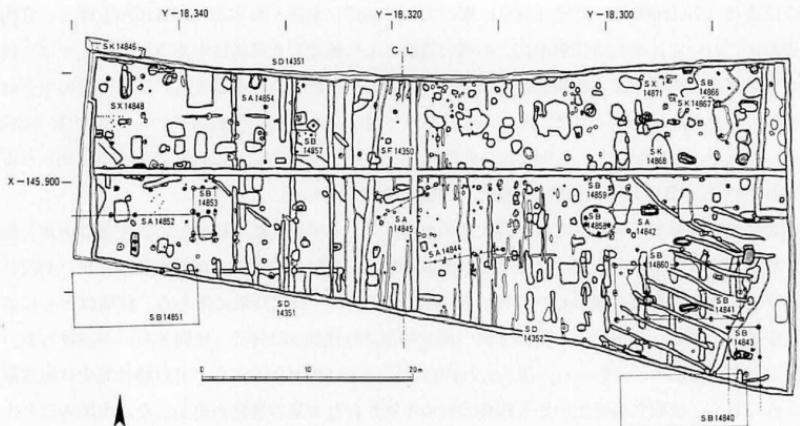
の位置は、SA14680の60大尺（72尺）東にあり、両側に側溝 SD11620・SD11970を伴う。宮南辺地区において、奈良時代前半にこの種の道路として機能した可能性があるものとしては、ほかに東面大垣内側の2本の南北溝 SD4575・SD4335を挙げることができる。この両溝の中点は東面大垣心から45大尺（54尺）西にあり、それとSF11960心との距離は107.0m（300大尺=360尺）である。したがって、壬生門北の東西550大尺の区画の東方に、これらの道路で区画される東西300大尺の官衙域を計画的に設置した可能性が想定される。

式部省東官衙の下層にある奈良時代前半の官衙は、その西南部を確認したにすぎないが、掘立柱塀によって南面と西面を区画する。南面の塀 SA14681は、南面大垣心の北40大尺（48尺）の位置にあり、西面の塀 SA14682は、SA14680の75大尺（90尺）東にあたる。柱間はともに8尺を基本とする。内部には、梁間2間の南北棟掘立柱建物 SB14685（柱間8尺）が設けられ、その西方に掘形の一辺約5m、深さ2.2mの大型の井戸 SE14690がある。井戸枠は完全に抜き取られており、抜取穴の埋土中から約4800点の木筒を含む大量の遺物が出土した。木筒のほとんどは削り屑であるが、考課にかかるものが多く含まれており、この地が奈良時代前半においても式部省関連の官衙であったことを示している。主なものを以下に挙げる。

- |  |                 |                            |
|--|-----------------|----------------------------|
| (1) 天平元年八月五 091                          | (2) 小心謹卓執当幹 091 | (3) □故二品吉備内親王宮 091<br>〔位号〕 |
| (4) □□阿倍朝臣広庭位分資□ 〔六号〕<br>(286)・25・16 065 |                 | (5) □考日一千五百九十 091          |
| (6) 掃部司選文二卷 75・17・4 032                  | (7) 一品舎人親 091   | (8) 五中上 善六 091             |

**B期**（奈良時代中頃～後半） 上層の式部省および式部省東官衙が造営される。いずれも築地で区画しており、ともに南面築地心は宮南面大垣心の北45尺に位置する。式部省については、今回東第二堂 SB14700・東面築地 SA12001を確認し、南半部の状況が明らかになった。一方式部省東官衙では、南面築地 SA14720とそれにひらく南面西門 SB14725、東面築地 SA14730を検出し、内部には基壇をもつ礎石建物や掘立柱建物のほか、鋳銅工房が存在することが判明した。これまでの調査成果に基づいて、ともに1～3の小期に分けることができるが、厳密な両者の対応関係は不明である。式部省の東西第二堂は、桁行5間（70尺、14尺等間）、梁間2間（18尺、9尺等間）の礎石建ち・床張りの身舎部分と掘立柱の土蔵からなり、複雑な変遷をたどる。

B-1期は、式部省西門 SB14550が棟門で、築地には廊が伴わない。西第二堂は東西二面廂、東第二堂は西廂（廂の出10尺）がつくと推定される。式部省東官衙では、南面西門の北に東西棟礎石建物 SB14740が建ち、間を石敷の歩道 SX14745で結ぶ。B-2期は、式部省西第二堂の西廂をはずして、西面築地との間に掘立柱塀 SA14559を設ける。式部省東官衙の南縁部には、鋳銅工房が営まれる。南面西門をはさんでほぼ東西対称の位置に炉や焼け穴が配置され、西南隅には4×1間の東西棟掘立柱建物 SB14760が建つ。B-3期は、式部省西門が礎石建ちの八脚門となり、築地の内側に片廂の廊（築地心からの出は12尺）を付設する。西第二堂の東廂、東第二堂の西廂を取り払い、後者は東廂（廂の出10尺、のち14尺に改造）に付け替える。式部省東官衙では、SB14740と鋳造工房を廃して整地を行い、掘立柱建物 SB14750・SB14755を建てる。



壬生門北方の調査（第224次）遺構図（1：550）

### 壬生門北方の調査（第224次）

第二次朝堂院地区の前面、兵部省と式部省の中間地域の調査である。兵部省は東門、式部省は西門が他の門に比べて大きく、壬生門から北へ続く宮内道路が重視されたことを示している。今回は、第216次調査に統いてこの宮内道路を確認し、掘立柱の仮設建物とそれに伴う塀のほか、儀式用の旗竿とみられる多数の独立柱穴を検出した。また平城宮の遺構とは別に、弥生時代の竪穴住居や土坑を検出している。宮内道路SF14350は、SD14351・SD14352を東西の側溝としており、側溝心々間距離は約23mである。これをはさんで東側にSB14840・SB14841、西側にSB14851が対称の位置に設けられる。いずれも桁行4間（10尺等間）、梁間2間（8尺等間）の東西棟の仮設建物で、北側に柱筋を揃える東西塀SA14842・SA14852を伴う。小規模な南北棟掘立柱建物SB14843・SB14853は、これらとは時期を異にする仮設建物である。弥生時代の遺構は、平城宮造営時の整地土の下から検出した。竪穴住居は5棟(SB14857～SB14860・SB14866)あり、覆土中に弥生前期の土器を含む。SB14860が比較的大型であるのを除いて小型である。奈良盆地北部における前期段階の集落をはじめて確認した点で注目される。

### 東面大垣の調査（第223-16次）

法華寺旧境内の西側、東面大垣のわずかに内側にあたる位置で、南北約140mにわたって調査を実施した。調査区の幅が1.1～1.3mと狭いため、遺構相互の関係はつかみがたいが、建物や塀を構成するものを含む掘立柱柱穴30数個のほか、石組遺構、土坑を検出した。土坑からは幅88.6cm（3尺）、厚さ29.2cm（1尺）の凝灰岩製の唐居敷が出土している。径40cmほどの柱の当たりとなる半円形の縁形をもち、方立と扉の軸受金具のための方形の枘穴をあける。礎石建ちの門において使用されたものとみられ、付近に宮東面中門の存在が想定される。（小沢 肇）

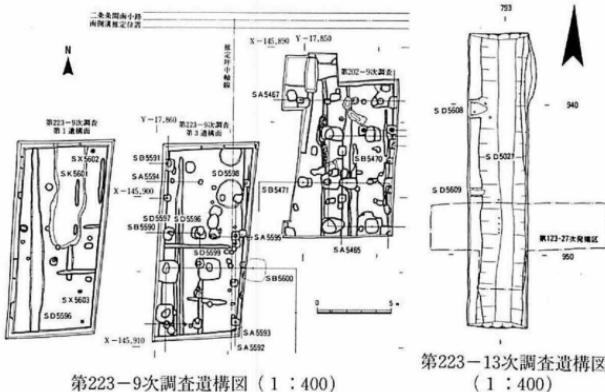
## 2. 平城京跡の調査

**平城宮北方遺跡の調査（第223-2次）** 住宅増築に伴う事前調査。平城宮北西隅から約90m東の北方にあたる地点である。奈良時代の東西溝、中世の南北溝などを検出した。東西溝は幅約1.5m、深さ0.3~0.4mで、軒平瓦6664C（I期）などが出土した。この溝は宮北面大垣SA2300やその前身掘立柱塀SA2330の北24mに位置し、右京北辺二坊二・三坪の調査（第112-7次）で検出した東西溝SD250A・Bの東延長上にある。その性格の解明は今後の課題である。

**東院南方遺跡の調査（第223-9次）** 駐車場造成に伴う事前調査。藤原麻呂邸跡と推定している東院南方遺跡左京二条二坊五坪の北端にあたる。床土直下以下で奈良時代の遺構面を計三面検出した。奈良時代初頭に遡る遺構には、北西部の南廂付東西棟建物SB5591、東端の南北塀SA5593、西端の南北溝SD5597がある。SA5593は坪の東西中軸線にほぼ合致するが、坪を東西に分割する施設ではなく、宅地内の区画施設と考えられる。その後、厚さ20cm前後の大がかりな整地が行われ、調査区南部に大型の建物SB5600が建てられる。SD5599はその北雨落溝である。SB5600の掘形は一辺1.5mにも及び、角材の礎盤が使用されていた。推定される柱の直径も30cmに近い。また、坪の東西中軸線上に位置するので、この時期に少なくとも坪の東西が一体として利用されていたことは確実で、1坪またはそれ以上の占地であろう。同じ坪の第198次調査B区や第204次調査で確認されたような大規模な区画の改編が考えられる。奈良時代後半に入るとSB5600が廃絶し、南西部の建物SB5590、北西部の東西塀SA5594が建てられ、奈良時代初頭に近い宅地利用のあり方を示すようになる。SA5592、SD5598も同時期であろう。

**東二坊々間路西側溝の調査（第223-13次）** 店舗建設に伴う事前調査。東院南方遺跡の左京二条二坊五坪の東辺を限る東二坊々間路西側溝SD5021を19m分検出した。第198次調査B区、第202-13次調査で検出したものの北延長部分で、第123-27次調査区と一部重複する。SD5021は、幅3m深さ0.7mで、西岸には護岸の杭5本が残る。土層は上中下三層の堆積土、及びその上の埋土の計四層に分かれ

る。遺物には木簡49点、緑釉駿斗瓦と三彩平瓦の破片がある。年代を示すものには、下層出土の里制及び郷里制下の木簡、上層出土の宝龟4(ヶ)年の木簡がある。他にSD5021に邸宅内から流入する二条の溝SD5608・5609を検出した。



**右京一条二坊八坪の調査（第223-19次）** 事務所ビル建設に伴う事前調査。調査区の南西部約三分の一には秋篠川旧流路が広がる。その他の遺構は全て古墳時代（布留式）に属するもので、奈良時代にかかる遺構は検出されなかった。遺物は土坑からの布留式土器が主体で、短頸壺や長頸壺の完形品を含む。

**田村第推定地の調査（第223-20次）** ビル建設に伴う事前調査。調査地は、藤原仲麻呂の邸宅田村第の故地と推定されている左京四条二坊東半分の九一十六坪の八つの坪のうち、北東隅の十六坪の南端中央部にあたる。遺構は調査区東部と北西部に集中し、坪の南辺中央部は遺構が疎である。SA5656・SB5660などのA期（奈良時代初期）、10尺等間規模の建物 SB5651・SB5661（SB5664はその建て替え）が坪の東西に建つB期（奈良時代前期）、SB5652・SB5662・SA5663などのC期（奈良時代中期）、SX5671の整地が行われ、SB5654・5655・5665（SB5666・5667・5668はその建て替え）などが建てられるD期（奈良時代後期）、井戸 SE5673が存続し、SX5675、SD5676・SD5677などがあるE期（平安時代前期）、大略以上に区分できる。

A期は最低3区画以上に坪を分割して利用していたが、B・C期には最低一坪以上の占地となる。さらに、C期からD期への過程で四条条間北小路側溝が坪内の整地 SX5671と一緒にして埋め立てられ、しかもこのあと側溝が再度掘削された形跡はないから、D期以降は最低十六・十五の2坪を一体とした利用が続いたことがわかる。従来奈良時代後期に十坪と十五坪が一括した利用下にあったことが知られており（奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊発掘調査報告—田村第推定地の調査』）、今回の成果と合わせると、十・十五・十六の3坪の一括利用が判明したことになる。ただ、L字型の土地利用は考えにくいから、奈良時代後半を通じて、九・十・十五・十六の4坪が一括して利用されていた可能性は極めて高いといえよう。

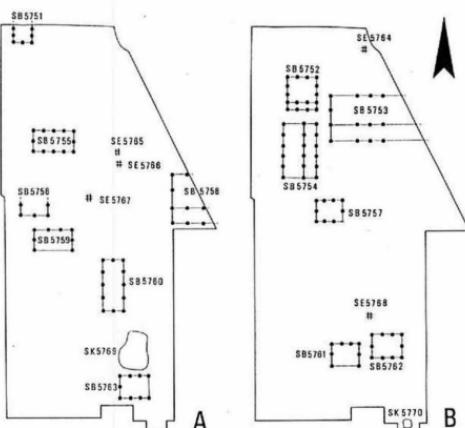
今回の調査でもここが藤原仲麻呂の田村第であった確証は得られなかったが、十五坪の大規模な礎石建物が奈良時代末まで存続するのに対応して、4坪以上の占地が奈良時代末まで続く可能性が高くなった。奈良時代末まで基本的には継続した宅地利用が行われているわけで、仲麻呂の死後田村旧宮、田村後宮、さらに右大臣藤原惟公の田村第として利用されていく田村第のその後のあり方とも合致する。

第223-20次調査遺構図（1：400）

**左京三条一坊七坪の調査（第231次）** 美術館建設に伴う事前調査。坪の中央南よりにあたる地域である。調査地は倉庫や工場として使用されていたため、機械装置や倉庫上屋の基礎による搅乱が著しい。

遺構はほぼ2時期に区分できる。A期の遺構としては、SB5751・5755・5756・5758・5759・5760、井戸 SE5765・5766・5767、土坑 SK5769などがある。調査区東端で確認した南廂付掘立柱建物 SB5758が中心建物で、柱間は10尺等間、掘形の一辺は1mを越える。桁行は5間ないし7間であろう。SB5760はその西脇殿に相当する建物で、桁行5間梁行2間。SB5755とSB5759は、両妻を揃えて南北に並ぶ。SE5766は、方形縦板組井戸で、南側縦板と横桟の一部が残る。井戸 SE5767は井戸枠をほとんど抜き取られ、縦板1枚がかろうじて残るのみである。SE5765はこれを改修したものである。SK5769は平面不整形の浅い土坑で、猿投古窯と推定される貼花文と透かしをもつ火舍状土器片、三彩片、大型の須恵器甕数個体分、「厨」「田」「加」などの墨書き土器の他、大量の土器が出土した。B期の遺構としては、掘立柱建物 SB5752・5753・5754・5757・5761・5762、井戸 SE5764・5768などがある。調査区北東部で検出した南廂付建物 SB5753が中心建物。桁行は7間であろう。SB5752・5754・5757は柱筋を揃えて建ち、SB5752・5754はSB5753の西脇殿に相当する。井戸 SE5764は円形縦板組で中央に曲物を据える。曲物内から墨痕不明瞭ながら031型式の木簡1点が出土した。SE5768は小型で、横板組の井戸枠を持ち、横板の外側に縦板を立てかける。底中央には曲物2段を据える。SK5770は平面長方形の土坑で、墨書き土器「飯」を含む大量の土器が出土した。

今回の調査地は、宮南辺の一等地でしかも坪の中央部にも拘らず、建物の数も少なく、規模も小さく、また建て替えも頻繁ではない。奈良時代初頭に遡る遺物はほとんどなく、A期の遺構も奈良時代中葉のものと考えられる。以上のような点からみて、周辺で確認されているような上級貴族の邸宅とするには疑問が大きい。一方、2時期いずれもが東西棟の主殿と南北棟の脇殿風の建物で構成されている点は官衙的な機能を想定するに有利である。平安京の当該坪には大学寮が所在する。平城京の大学寮については、今回の調査区を含む左京三条一坊七・八坪説と、右京三条一坊七・八坪説とがある。遺構や遺物からは今回の調査地が大学寮である積極的な根拠に乏しいが、その可能性も含めて当該地の性格を検討する必要があろう。



第231次調査遺構変遷図

### 3. 寺院の調査

#### 西大寺の調査

第223-1次 住宅建築に伴う事前調査。右京一条三坊十六坪（西大寺旧境内）北端から一条北大路路面上に相当するが、大路南側溝や西大寺の北限の築地などの痕跡は検出できなかった。調査区を南北に貫流する SD5615 の機能や性格は今後の課題である。

第223-11次 西大寺駐車場における木造多層塔建設設計画に伴う事前調査。調査区のほぼ全域に池が広がっており、江戸時代末期以降の北岸の堤及び西岸を検出した。南岸、東岸に関する手がかりは得られず、全体の規模や上限は不明。北岸は四王堂との間に現存する小池まで延びていた可能性があり、池は何度かの埋立により次第に規模を縮小したのであろう。埋土からは大量の瓦（平安時代以降が大半）と少量の瓦器が出土した。この他に池の導水施設があり、節を抜いた青竹を松の一木のジョイントでつなぐ。池の造成に伴うものであろう。

#### 薬師寺の調査

宝積院の調査（第223-3次） 庫裏建設に伴う事前調査。薬師寺北門を入ってすぐ東のこの地域は、奈良時代の菟院の跡と考えられているが、奈良時代にかかる遺構は土坑 SK18のみである。炭・灰を多く含む大土坑 SK11~14・17・22・23は11世紀のもので、恒常に火を焚く施設が近辺に所在し、生産に関わる区域ないし厨房的な区域として利用されていたことがわかる。11世紀末から12世紀初頭になると整地が行われ、池 SG20が造成される。深さは0.4~0.6m、水は南西から引き南東に抜いているが、北西の溝 SD24からも水が注いでいた。処々に石を置き、出島を設けるなど、単なる溜池ではなく鑑賞用の池と考えられ、北側の子院の形成に伴うものであろう。この子院は、埋土上層の焼土層からみて12世紀末頃に焼失し、池自体もこの頃廃絶したらしい。

中世の遺物包含層、及び池の埋土からは多量の土師器、瓦器、瓦などが出土した。土器では、平安時代末の薬師寺の土器の組成を示す貴重な資料が得られ、薬師寺に土器を供給する複数の生産工人群の存在が推定される。瓦では、平安時代後期の編年を細分できる重要な資料を得た。

第223-3次調査遺構図（1：300）

西面大垣の調査（第223-17次） 店舗建設に伴う事前調査。第123-18次調査、第118-27次調査で検出した基底部地山削り出しの薬師寺西面大垣の延長線上にあたる。北面大垣との交点想定位置の北区、その南の南区の二ヶ所を調査した。南区の地表には、西面大垣を踏襲する可能性のある比高約1.5mほどの土壇上の高まりがあったが、調査の結果これは地山の高まりであることが判明した。その西で検出した南北溝は幅約4m深さ約1.5mを測り、北区北端まで延びて東に折れる。溝内の遺物は16~17世紀のものが中心である。南北溝は從来確認しているものの延長上にありしかも東に折れるので、奈良時代当初の大垣西の溝（西二坊大路東側溝）を踏襲している可能性が高いが、西面大垣本体は全て削平されたものと判断する。

#### 海龍王寺旧境内の調査（第223-18次）

住宅建築に伴う事前調査。旧境内北部、現本堂すなわち旧中金堂の真北にあたる。東西棟建物基壇の一部とその外装凝灰岩の残欠などを検出した。基壇は、地山を削り出して造成されており、残存高さは約20cm、発掘区の東端及び西半北側で大きく削平されているが、15mに及ぶ発掘区の東西全域に及び、さらに発掘区の東西に広がる。発掘区の中央やや北東寄りに、基壇北側の化粧材と推定される凝灰岩の残欠が1.7mの長さにわたって原位置を保ち、ここが基壇の北端部分であることがわかる。位置は現本堂の北側から約30mにあたる。なお、柱位置を示す明確な遺構はなく、建物そのものの手がかりはない。

これまで中金堂北方では、石敷の存在、及び  
推定東僧坊以外には遺構は確認されていない  
が、延文元年5月の「南都海龍王寺寺中伽藍坊  
室之絵図」には、中金堂の北に講堂、さらにそ  
の北に入母屋造基壇建の食堂と覺しき堂舎が描  
かれている。14世紀と推定される「海龍王寺尼  
別受指図」においても建物の位置関係は基本的  
には同じで、講堂と中金堂はさほど間隔をあけ  
ずに建てられている。従って、今回検出した基  
壇は、食堂の基壇である可能性が高い。

第223-17次調査（北区）遺構図（1:400）

第223-18次調査位置図（左）遺構図（右、1:200）

## 西隆寺の調査

第227次調査 奈良市都市計画道路建設に伴う事前調査。西隆寺の北面築地から北一条大路にかかる地域である。調査区北半は秋篠川の氾濫と削平により遺構は失われていたが、南半では比較的良好に西隆寺関係の遺構を検出できた。SA600は西隆寺の北面築地、SD429はその南雨落溝。築地本体や添え柱などは検出できなかったが、雨落溝の状況などから、東面同様北面も築地で区画されていたと考えられる。SX608は礎石据え付け穴で、ここに門があった可能性もある。なお、SD429には橋 SX605がかかる。SA610は掘立柱東西塀。5間分を確認。西隆寺造営以前の宅地の北限を限るものであろう。また、第210次調査区から延びる2間×2間の東西棟建物SB425の北西端を確認した。なお、北半の旧秋篠川流路には、奈良時代の瓦が大量に投棄されており、かなり早い段階からここに流路が存在したことを示す。

第228次調査 奈良市都市計画道路建設  
に伴う事前調査。西隆寺の北東隅、第227  
次調査区の南西に続く地域。全域にわたっ  
て古墳時代の遺物包含層が広がる。無数  
の小ピットの他、池状遺構 SG530、建物  
SB511など顕著なものがあり、この付近に  
は古墳時代の集落が営まれていたことが  
わかる。奈良時代に入って右京一条二坊

九坪の敷地となると、SB515, SB517、統いて大規模な南北棟掘立柱建物 SB510が建てられる。SB510は桁行7間柱間8尺、梁間2間柱間10尺で、東に廂を持つ。廂の出は11尺。柱掘形は一辺1m近い。西側柱から西へ12尺のところに柱筋を揃えて凝灰岩2ヶ所とその抜き取り穴1ヶ所を検出し、縁束の可能性が考えられる。井戸SE492もこの時期のもので、掘形は一辺約3mの正方形、井戸枠は一辺約1.2mの方形横板組だが、保存状態が悪く、詳しい構造は不明。奈良時代後期に入ると、この地域は西隆寺造営とともにその一院として区画され、SB485, SB490A, SB495, SB505, SA501, SA506, SB525などが建てられる。SB505は推定桁行7間、梁間2間、柱間はともに7尺の東西棟掘立柱建物。その後さらに整備が進み、SC480, SB490B, SB500, SB521, SE491などが設けられる。SB500は第219次調査で検出したものの西半部。7間×4間の大規模な南北二面廂付東西棟礎石建物で、柱間はともに9尺。この時期には桁行7間の2棟の大規模な建物 SB500, SB490 (SB490BはSB490Aを礎石建ちに建て替えたもの) が中軸を揃えて南北に並び、仏堂の可能性が考えられる。西隆寺の子院であろう。SB521は南北棟礎石建物で根石が多数残る。梁間2間柱間7尺、桁行3間以上柱間5.5尺。この一画はSE491の廃絶する10世紀頃まで存続する。

第223-21次調査 奈良市都市計画道路建設に伴う事前調査。西隆寺北面回廊の北東にあたり、第228次調査区の南西に続く地域である。北端で検出した池状遺構は、第228次調査のSG530の続きで、人為的な貯水施設であろう。古墳の周濠の可能性もある。奈良時代の瓦や土器の出土により、奈良時代までの存続が確認された。SB536は古墳時代の掘立柱建物。SB546は、西隆寺造営以前、右京一条二坊九坪の宅地の建物の東妻部分である。西隆寺造営に伴い、SG530が埋め立てられ、門SB540が開く築地堀、及びこれから東に延びる堀SA535が建てられる。門SB540は南北方向一对の掘立柱で構成され、ともに柱根が残り、

石と瓦が礎盤として用いられていた。南の柱穴では、柱の下に西隆寺創建軒瓦6235-Cを上向きに詰め込んでおり、この門が西隆寺主要伽藍整備後に建てられたことがわかる。SA535は8尺等間、西から3番めの柱穴には柱根が残り、その脇には木製暗渠SX533が埋め込まれていた。北側の蛇行溝SD532と南側の土坑状遺構SX534をつなぐものか。池の上層を埋め立てる段階で、まず暗渠、ついで柱根が据え付けられており、その時間差はわずかで一連の作業である。回廊外のこの地域は、主要伽藍竣工後に第二次整備の対象とされた地域であったのであろう。

第223-21次調査遺構図（1:400）

### 頭塔の調査（第232次）

奈良県教育委員会による復原整備に伴う調査。第181・199次調査で明らかになった頭塔の構造・規模・変遷などによって奈良県が策定した復原整備基本計画に基づき、石積の解体及び断割を行った（範囲は下図参照）。石積の解体は、基壇及び7段の石積と各テラスの石敷のうち、原位置を保っていないもの、石の積み上げに際し不安定なもの、などについて、実測、写真及びビデオ撮影を行いながら実施した。その結果、頭塔には積石背後の裏込めの栗石がなく、石の下や裏側、目地などは全て土であること、基本的には石を据えるための根石や飼い石を用いていないことなどが判明した。

断割は最上段の心柱痕跡の東から基壇前面の石敷面に至る長さ18m 幅80cmの東西トレンチを設け、土及び石積の構築法、改修の痕跡などを調べた。その結果以下の諸点が判明した。積土は版築によっている。掘込地業は行っていない。版築一層の厚さは平均的には10cm前後で、非常に堅く搗き固められており、明瞭に剥離する搗き固め仕上げ面を多数確認できた。特に第一段から第三段では強固な地盤を築くため途中に瓦や石の敷き込みが顕著にみられる。なお、第六段以上はそれ以下に比べ層も厚く積み方も比較的粗い。版築の土は色調や礫の混入度などから大きく四種に区分できる。主体は、この地域の地山に近似する疊混じり赤褐色砂質土で、これに暗灰色、黄褐色、暗黄褐色の三層の粘質土が互層をなす。第五段から第四段付近にかけての暗灰色粘質土は黒色に近く特に際立っていた。石積と版築は基壇を除いて同時に行われている。すなわち下から順に石を積みながらその裏を版築する工法がとられている。基壇の石積には石の据え付け掘形があり、埋土から14世紀以降の羽釜の破片と、13世紀前後の灯明皿が出土し、少なくとも東面基壇石積は14世紀以降に改修された形跡がある。

第232次調査断面土層図（1：125）

## 法隆寺の調査

若草伽藍跡の調査（第225次） 法隆寺の子院観音院の改築に伴う事前調査で、橿原考古学研究所と共同で実施した。調査地は、若草伽藍塔心礎の北東約50mの位置で、若草伽藍東回廊のすぐ外側と考えられている地域であるが（奈良国立文化財研究所『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』），調査の結果若草伽藍の遺構は認められなかった。地形からみても削平は考えられない。なお、始良—Tn(AT) 火山灰層の検出により、若草伽藍の乗る尾根の北側の高い部分を削り、低い部分に盛土を行う整地の状況の手がかりが得られた。

一方、中世以降の遺構は極めて稠密で、掘立柱の柱穴約100基、井戸3基、溝10数条、大小の土坑100基以上の他、江戸時代の子院の床下収納施設とみられる方形石組土坑 SX6311、室町時代の池状遺構 SX6312と南北方向の瓦組暗渠 SX6313などを検出した。柱列 SA6300～6307には本来建物を構成したものが含まれる可能性がある。溝も性格を特定しがたいが、南東部で検出した屈折する素掘溝 SD6320は室町時代後期の遺構で、その規模（幅1.8～2.2m、深さ0.5～0.6m）からみて、子院の区画を構成する溝と考えられる。

北方子院跡の調査（第226次） 法隆寺百濟觀音堂建設に伴う事前調査で、橿原考古学研究所と共同で実施した。調査地は西院伽藍北東部、食堂のすぐ北に位置する。この地域は、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『資財帳』と略記）の太衆院の一画と考えられ、また法隆寺に伝存する寛政九年の絵図などから、後に喜多院、弥勒院、知足院の3つの子院の敷地となったことが知られている。

西院伽藍に関わる建物としては、西院伽藍中軸線の振れに近い振れを示す掘立柱建物 SB6510・6540がある。SB6510は桁行4間以上、柱間3.6m（12尺）で、北妻は未検出ながら梁間総長約9.0m（30尺）の大規模な南北棟建物。SB6540は桁行4間、梁間2間、柱間はともに2.1m（7尺）の小規模東西棟建物。ただいずれも『資財帳』にはみえず、西院伽藍創建から天平ま

法隆寺調査位置図（1：8000）

第225次調査遺構図（1：500）

での間、ないし『資財帳』の建物廃絶後の時期、いずれとも決めがたい。

子院に関わる遺構としては、区画施設などを検出した。SA6501は弥勒院及びその北の喜多院の東を限る築地塀、SD6700は弥勒院と知足院の境界を流れると考えられる溝である。築地塀や柵などの区画施設の有無は不明であるが、SA6501とSD6550の間が弥勒院の間口となろう。一方、SA6650は弥勒院北限、喜多院との境を限る塀で、現存する南限築地塀との間が弥勒院の奥行となろう。発掘調査で明らかになった弥勒院の敷地の規模は、1873年（明治6）年の「無住ニ付御届」とある記録に「一 境内 間口 拾六間五尺七寸 奥行 二十一間七尺」とあるのとほぼ合致する。SB6502はSA6501に聞く桁行7尺の棟門で、喜多院東面の門。「棟門明間 八尺瓦葺 梁行六尺二寸 桁行壱丈七寸」とある絵図記載の規模とは一致せず、寛政九年以前のこの門の前身建物と考えられよう。

他の遺構としては、井戸7基、土坑2基、石室2基などがある。このうち、井戸SE6560は一辺70cmほどの正方形平面の井戸で、上部1.7mは瓦片の丁寧な小口積み、その下約70cmは径20~30cmの自然石の野面積みで、その下に板材を縦に組んで横桟で止めている。江戸時代前期の瓦が多く出土している。SK6530は大規模な土坑で、深さは最大で約70cm、大量の瓦片、土器片が出土した。年代は、瓦が飛鳥時代から11世紀、土器が11世紀末から12世紀前期に限られ、11世紀末から12世紀前期頃に埋められたと考えられる。SK6680は弥勒院の西端、喜多院との境界近くに掘られた長軸約6.3m、短軸約3.0m、深さ約0.8mの隅丸長方形の土坑で、弥勒院に関わるものと考えられる。唐津焼の陶器、伊万里焼の磁器の他、「如法経堂瓦明応元年／勧進始テ明

応三年／成就スルナリ」と篆書きされた丸瓦が出土した。井戸や石室の他、多数検出した小ピットも多くは子院に関わるものと考えられるが、年代確定には至っていない。

(渡辺晃宏)

## 「地表基準線方式」による遺跡の実測

当研究所では遺跡の実測方式として、遺方を組んで基準線となる水糸を張る方法を採用してきたが、種々の問題があり、第213次調査では、遺構面に基準線となる水糸を直接はわせる方式（「地表基準線方式」と仮称する。）を採用した。その方法は以下のとおりである。1)座標東西または南北方向に、基準線間隔で基準杭を設定する。2)トータルステーションを用いて直角の振り出しを行い、測距しながら基準線交点にあたる地表面にクギを打つ。3)東西及び南北方向の基準線上に並ぶクギを水糸で結び、地表面に水糸によるグリッドを作る。

さらに第229次調査ではトータルステーションの座標値表示機能を最大限に生かした、その改良方式を用いた。1)基準点（または座標値の確定した空撮用標定点）にトータルステーションを据えて座標値と方向角を入力する。2)東西または南北方向いずれか一方の所定の基準線の座標値を満足させるようにポールプリズムとコンベックスを使用してクギを打つ。3)所定の基準線に打ったクギ同士を結んでいき、地表面に水糸によるグリッドを作る。  
（小野健吉）

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AAV	平城宮 第213次	91.10.1~91.12.25	2200m <sup>2</sup>	第二次朝堂院東第四堂
6AAI	平城宮 第222次	91.3.20~91.8.6	2200m <sup>2</sup>	式部省・式部省東官衙
6AAX・6AAY	平城宮 第224次	91.7.1~91.10.25	1600m <sup>2</sup>	壬生門北方
6AAA	平城宮 第223~7次	91.7.11~91.7.12	22m <sup>2</sup>	北面大垣内側
6ADA	平城宮 第223~10次	91.4~91.9.6	10m <sup>2</sup>	西面大垣
6ALD	平城宮 第223~16次	91.11.11~91.11.19	146m <sup>2</sup>	東面大垣内側
6ALE	平城宮 第223~22次	92.1.27~92.1.28	24m <sup>2</sup>	東面大垣内側
6BSR・6AGR	平城京 第227次	91.7.1~91.7.31	500m <sup>2</sup>	西隆寺旧境内
6BSR	平城京 第228次	91.10.18~91.11.7	700m <sup>2</sup>	西隆寺旧境内
6AFJ	平城京 第231次	92.1.8~92.3.31	2600m <sup>2</sup>	左京三条一坊七坪
6BZT	平城京 第232次	92.2.15~92.4.15	15m <sup>2</sup>	頭塔
6BSD	平城京 第223~1次	91.4.9~91.4.15	110m <sup>2</sup>	西大寺旧境内
6ASA	平城京 第223~2次	91.4.23~91.4.28	30m <sup>2</sup>	平城宮北方
6BYS	平城京 第223~3次	91.5.23~91.6.29	200m <sup>2</sup>	藥師寺宝積院
6AGR	平城京 第223~4次	91.6.13~91.6.14	56m <sup>2</sup>	右京北辺二坊
6AGF	平城京 第223~5次	91.6.18	7m <sup>2</sup>	右京三条一坊十坪
6ASA	平城京 第223~6次	91.7.1~91.7.3	48m <sup>2</sup>	平城宮北方
6ASA	平城京 第223~8次	91.7.29~91.7.30	15m <sup>2</sup>	平城宮北方
6AFF	平城京 第223~9次	91.8.6~91.9.5	80m <sup>2</sup>	東院南方遺跡
6BSD	平城京 第223~11次	91.9.17~91.10.7	472m <sup>2</sup>	西大寺境内
6ASB	平城京 第223~12次	91.10.3	3m <sup>2</sup>	平城宮北方
6AFF	平城京 第223~13次	91.10.7~91.10.16	80m <sup>2</sup>	左京二条二坊
6AAN	平城京 第223~14次	91.10.22~91.10.23	8m <sup>2</sup>	市庭古墳東辺
6ASA	平城京 第223~15次	91.11.7	6m <sup>2</sup>	平城宮北方
6BYS	平城京 第223~17次	91.11.20~91.12.5	270m <sup>2</sup>	藥師寺西面大垣
6BKA	平城京 第223~18次	91.12.6~91.12.20	60m <sup>2</sup>	海龍王寺旧境内
6AGA	平城京 第223~19次	91.12.9~91.12.18	200m <sup>2</sup>	右京一条二坊八坪
6AFM	平城京 第223~20次	92.1.10~92.2.20	425m <sup>2</sup>	田村第推定地
6BSR	平城京 第223~21次	92.1.6~92.2.6	236m <sup>2</sup>	西隆寺旧境内
6BHU	法隆寺 第225次	91.4.2~91.6.28	600m <sup>2</sup>	法隆寺境内
6BHR	法隆寺 第226次	91.6.11~92.5.6	2800m <sup>2</sup>	法隆寺境内

1991年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

## 神戸市の歴史的建造物調査（2）

### 建造物研究室

建造物研究室では平成二年度に神戸市の依頼により、市内北区・西区に現存する文化財未指定建造物について悉皆調査を実施した。これを承けて三年度は、茅葺民家および寺社建築のうちの主要な建造物について詳細な調査を行うこととした。具体的には昨年度の調査対象から各時代の代表的な遺構（民家83棟、寺社30件49棟）を選択し、調書作成、復原調査、現状平面図・断面図・架構図作成、写真撮影を行った。併せて全国的にも稀な遺存状況にある茅葺民家群の保存・活用の施策を検討するための集落調査を神戸芸術工科大学に依頼し、実施した。

#### 1. 茅葺民家

**建立年代** 建立年代の確実なものは東本勲家（元禄四）・東本純一家（宝曆七）・爪生栄之介家（安永七）の三棟しかない。前二者は小屋だけが当初であり、爪生家のみがほぼ当初の姿をとどめている。その他では元禄十四年の祈祷札を持つ前中家が17世紀極末に入るかと想定されるにすぎないが、前中家も後世の改造が著しい。18世紀に入るものは10棟を数えるが、これも小屋だけ古いものがあって、小屋を残して軸部をすっかり取り替える方式が意外に深く根付いていたことを示している。ただ何故小屋だけを残さねばならなかったのか疑問として残る。

**平面** 調査地区は平入と妻入（摺丹型）の混在地帯であり、今回の調査も平入が57棟、妻入が26棟となった。両者の分布域は、播磨と摺津の国境で分かれ、摺丹型は摺津側にしか存在しない。平入は二間取が4棟、前座敷三間取が1棟（但し19世紀前期）あるものの、他は四室から六室の定型的な平面である。一方妻入は①通常の摺丹型で、縁の奥行きが一間あるもの、②縁の奥行きが半間から四尺しかないもの、の二群に分類することができる。このことは重要文化財に指定されている摺丹型民家においても認められているところで、今回の調査対象では有野の7棟（同町内の摺丹型調査数8棟）、大沢の3棟（同8棟）、長尾の1棟（同4棟）が②に属する。特に有野町に②の類型の占める比率が大きいこと、②の類型の小屋組は棟束のみの小屋組が多いという点が注目される。①の類型で棟束のみの小屋組は溝下家のみで、大半は叉首組である。このことは①の類型の殆どが19世紀の新しいことにもよるが、安永七年の爪生家も叉首組であることからすると、②の平面と棟のみの小屋組は密接な関係を持っていたと見てよい。

**主屋のクド・流し** 民家で最も改造の大きいのは土間部分で、特にクドや流しの廻りであるが、近世末ないしは近世末の形態を存続していた明治期の遺構が少数見出せる。近世末の例では流し背面の壁には無双窓を設け、水溜を流し下の背面側に設け、縦横各三尺程度の木組の小さな戸棚を柱に打ち付けている。明治に入ると流しの右端に上水溜を設け、窓が障子になり、流しの上に棚を設けて整備はされているが、流しそのものは板で作り、中央部を一段低くして近世と変りがない。なお西区では主屋背面ないし側面に角屋で竈屋を設ける例が目立つ。

**束組の類型** 調査対象の内、束組の小屋組のものは27棟で、これらの小屋組の構造は大きく、

①オダチトライ組系：①-1 オダチトライ組 ①-2 オダチトライ叉首併用、②東立系：②-1 東のみ ②-2 東叉首併用の四類型に分けられる。これらはある意味での構造的発展の段階を示すと考えられる。ただどの型式をとるかは平面との関連もあり、またその構造的解釈も小屋構造だけでは説明は容易にはしがたく、他の要素を勘案して理解する必要がある。

## 2. 寺社

**中世遺構** 新善寺本堂・宗賢神社本殿の二棟の中世遺構を見出した。前者は本格的な茅葺三間堂で、内部は一室、背面に後戸を設け、架構は一切見せない簡素な建物で、反り増しのある明らかに中世と認められる部材が多く残り、棟木銘から主要部分が天正以前に遡ることが確認できる。後者は意匠から見てさほど古く遡るものではないが、16世紀後期の建築と推定される。

**中世仏堂形式の本堂と修正会** 調査した近世の仏堂8棟の内、石峯寺・性海寺・近江寺の本堂は内部を内陣・礼堂に分ける中世仏堂形式の平面構成で、性海寺が架構を一切見せない内部空間を造るのに対し、他は架構を見せて中世以来の伝統を引いている。近江・性海両寺では背面隅に炉を切って、籠りの部屋としているのも興味が引かれる。この隅部屋に両寺共修正会の鬼の所作の手順を書いた板札や鬼の持物が置かれて、修正会に使われてきたことが知られる。

**有馬温泉と寺院** 有馬温泉には温泉神社のある落葉山々麓に温泉寺・極楽寺・念佛寺が集中し、温泉の信仰の中心として機能してきた。現在の温泉寺本堂は天明二年、極楽寺本堂は天明元年、念佛寺本堂が正徳二年の建立で、変化の激しい温泉地にあって、近世の宗教施設がまとまって残っているのは稀有なことである。また中世には宗教者が温泉を管理していたが、天正年間の湯山（有馬温泉）代官三人の内の一人の由緒を継ぐ善福寺本堂も方丈形式の上質な遺構である。

**農村舞台と能舞台** 神社境内に農村舞台や能舞台を設ける例が少なくない。農村舞台は山田・淡河に各3棟、押部谷に1棟、計7棟が現存し、近世にはもっと多かったらしい。能舞台を持つ神社は山田・櫛谷に各1棟、平野に2棟が知られる。農村舞台と能舞台の分布を見ると、旧明石郡域に能舞台が、美嚢郡域には農村舞台が多く、分布域が大凡分かれ。享保年間成立の明石記に記された能舞台はいずれも近世以前の郷・莊に関わる神社にあったとされている（『新修神戸市史 歴史編Ⅲ』）。ただし北区は中世以来猿樂の本拠地であった丹波や揖津に近いところで、中世末から近世にかけて福王流が淡河の地に根を張っていたことが、淡河の百済家に同流の伝書が所蔵されていることから知られる。こうしたことからすると北区に能舞台が殆ど見られないことは奇異に感ぜられる。近世になって歌舞伎の流行と共に能舞台が農村舞台に変化していくとも想定されるが、この点についてはなお検討が必要であろう。

**神社意匠の特性** 北区西区の神社本殿では軒唐破風付として割合派手な意匠を用いるものが多い。特に素盞鳴尊神社本殿と八多神社本殿では身舎は二手先、庇は出組として組物を複雑とするだけでなく、庇組物の背面側の手先に雲の彫刻を施した花肘木を置き桁鼻にも繰形を付ける手の込みようで、この地域の社殿の一つの代表格に挙げられる。六条八幡神社本殿は大斗に繰形を付けて絵様肘木を多用した特異な意匠の社殿として注目される。

（山岸常人）

# 秋田県の近代化遺産総合調査

建造物研究室

秋田県近代化遺産の総合調査は、平成2年度から始まった。対象物件を網羅的にひろいあげる第1次調査からスタートし、第2次調査ではリストアップされた約1,300件の物件のうち約3分の1を選定して、沿革や現状に関するやや詳しい調査を実施した。平成3年度は前年度までの成果をうけて、とくに重要と思われる物件を57ヶ所111件選びだし、より詳細な調査をおこなった。第3次調査の対象物件は、産業関係(41ヶ所85件)・交通関係(14ヶ所24件)・土木関係(2ヶ所2件)に分かれる。

**産業に関わる遺産** 農業、林業、養蚕・製糸・織物業、鉱業(鉱山・油田)、水力発電、酒造・醸造業などの諸産業にかかる遺産を調査した。ここでは、秋田県の近代化を推進する担い手として、とくに重要な役割をはたしてきた鉱山と油田についてのべておく。

秋田の鉱山は、佐竹藩の財源として近世から稼動しており、とりわけ阿仁銅山と院内銀山が全国的にその名を知られていた。維新後まもなく、小坂にC・A・ネットー、大葛にR・カライル、阿仁にA・メッツゲル、院内にC・バンサ等の外国人が招聘され、鉱山技術の近代化が胎動はじめる。その後、明治33年の小坂鉱山における自燃製練法の確立を契機として、鉱山の近代化は大きく前進したが、戦後、鉱石枯渇により閉鉱・休山があいつぎ、現在では、わずかに小坂で銅の製練業務が存続しているにすぎない。こうした斜陽化にともない、統々と関連施設は撤去されてきたが、それでもなお多くの遺構が残り、鉱山全盛期の面影を伝えている。

とりわけ小坂鉱山には、45件もの関連施設が現存する。そのなかには小坂鉱山事務所(明治38年)や康楽館(同43年／県指定文化財)などの宏壮華麗な洋風木造建築、旧延銅場(同38年)や電練場(同42年)などの煉瓦造物、さらに旧鋳造仕上場(同37年)や元山淨水場濾過室(同38年)などの木骨煉瓦壁の建造物がふくまれる。このほか、院内銀山の動力源として明治33年に竣工し、現在なお近在に電力を供給しつづける権山発電所は、秋田県最古の発電所遺構であり、特異な石造近代建築として注目に値する。

一方、油田も、やはり明治の初めから、B・S・ライマンやE・ナウマンが、院内・旭川・濁川・黒川などの油田を調査し、良好な油層を確認していたが、経営にみあう機械操業が可能になったのは、大正末年からである。しかし、近年、油層の枯渇から次々に油田は閉鎖され、現在なお採油を続けているのは院内・黒川・豊川の3地区のみとなった。

これらの油田では、いずれもロータリー式の機械掘りをおこなっている。仁賀保町の院内油田を例にとると、大正12年以来394の油井坑がほられたが、現在稼動中の井戸は89坑で、9ヶ所のポンピング・パワー(PP)が健在である。PPとは、複数の油井を掘削するための動力源を意味し、30~50馬力のモーターが据えつけられている。このモーターによって生じる継回転運動を、材バンドという直径約5mの鉄製リングによって横回転運動に変換し、さらに材バンドの下に

とりつけたエキセントリックによって、水平方向の往復運動を生じさせる。このエキセントリックに10本あまりのブーリング・ロットをひっかけ、そこにワイヤーロープをつないで、水平往復運動を油井に伝達し、採集ポンプの位置でこの水平方向の力を垂直方向の往復運動に変換して、油とガスをくみあげるのである。きわめて素朴な採油手法ながら、近代産業技術の足跡を示す生き証人として、貴重な遺産の一つといえよう。

**交通・土木に関わる遺産** 地上交通（道路橋梁・鉄橋・トンネル・駅舎・機関車庫）と海上交通および港湾施設（防波堤・倉庫・台場跡・上水道水源地堰堤・砂防堰堤）に関する遺産を調査した。交通関係の遺産のなかには、江戸時代後期に遡るものもふくまれている。高磯森台場跡・金浦谷場跡などの幕末の軍事施設、18世紀から建造されていた波除石垣、さらに佐竹秋田藩の藩倉であった土崎湊御蔵などである。建築史的には、土崎湊に残る4棟の倉庫がとくに注目される。4棟のうち、2棟は棟持柱上の舟肘木で棟木をうける古風な構造をもち、材の風蝕も進んでいるので、幕末以前に遡ることは間違いない。一方、素朴なキングポスト・トラスを架けたのこりの2棟は、文書記録により明治13年の建造と知られる秋田県最古の洋小屋建築である。同じ海運系の倉庫でも、時代が下ると建築形式が大きく変化する。大正5年頃の建造と思われる船川港の旧船川倉庫・米倉は、土蔵の外壁を石張りにした力強い外観をもち、内部の小屋組には和小屋と洋小屋の折衷架構を採用している。いずれも、秋田の地域性をつよく感じさせる近代産業建築といえよう。

文化財としての近代化遺産は、「生きている」対象として保持対策に多くの困難をともなう。また近代産業構造の解体のなかで、廃絶の危機にさらされている例も少なくない。しかし、日本各地で花開いた近代化の歴史を具体的に物語る遺産としての価値は大きく、保存と活用のための早急な対応が望まれる。

調査の成果は『秋田県の近代化遺産－日本近代化遺産総合調査報告書－』（秋田県教育委員会、1992年3月）として刊行した。  
（浅川滋男）

旧土崎湊御蔵（10号倉庫）

小坂鉱山事務所

旧船川米倉断面図

## 飛鳥池遺跡出土の木簡

### 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1991年度に実施した飛鳥池遺跡の調査では、藤原宮期の堆積層と考えられる炭層及び粗炭層から総計103点（うち削屑9点）の木簡が出土した。出土した木簡の主な釁文、あるいは出土遺構については次年度に刊行予定の『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（11）』で報告するので、ここでは本遺跡の性格を考える上で注目すべき木簡を中心としてその概要を報告する。

木簡の形態的な特徴としては、第一に木簡の出土総点数に比して削屑が少ないと、第二に完形品ないしは堆積中に折損したと思われるものが多く、藤原宮跡出土木簡に顕著に見られるような徹底的な割裁を受けたものが少ないと、などを挙げることができる。

木簡の年代については、年紀を記したもののが全くないが、荷札の中には國の下に置かれる行政単位を評と記すものがある〔④・⑤・⑥・⑦〕のに対して、郡と表記するものが全くないこと、また評の下の行政単位について里とするもの〔⑥・⑦〕と五十戸と記すもの〔⑤・⑧〕とが併存すること、などの諸点から、大宝令施行（701年）以前で、概ね五十戸制から里制への変更が行われた時点を含めた時期と考えることができる。

また木簡に記された内容で、本遺跡の性格を考える上で重要な点としてつぎの諸点を挙げることができる。1)釘・針・小刀など製品と考えられるものの記載のある木簡が出土し〔①・⑬・⑭・⑯〕、またそのうち釘の雛型（様）も出土している〔⑯〕。これに対してこれらの製品を作るための素材と考えられる鉄の記載も見られる〔③〕。これらは木簡とともに出土した遺物に金属加工関係遺物や鉄製品があることと関連があると見られる。しかし一方で出土遺物に見られる漆・ガラス製造関係のものに対応する製品あるいは素材に関する記載をもつ木簡が見られない点は留意される。2)製品の供給先あるいは素材の提供者として「内工」〔⑯〕、「石川宮」〔③〕、「大伯皇子宮」「大伴」〔②〕などが見え、「内工」は官司名である可能性があるのに対して「大伯皇子」「大伴」など個人名が見られる点は、本遺跡の性格を考える上で注目される。なお「石河宮」と体部外面に墨書した7世紀末頃の土師器鍋も出土している。3)評制下の地方行政組織を通じて当地にもたらされ、消費された米等の荷札がある〔⑤・⑥・⑦〕。4)付札には工人が生産した製品に付けたものと思われる付札木簡がある〔⑨・⑩・⑪〕。

その他、本遺跡出土の木簡には、次ぎのように注目すべきものがある。1)比較的まとまって出土した伊予国の湯評関係木簡〔④・⑤〕の内包する諸問題、2)「児島マ」「□止伯マ」「鵜人マ」など、未知の部が新たに多数知られるに至った点〔⑥・⑧〕、3)「大伯皇子宮」・「石川宮」など飛鳥やその周辺地域に点在していたと思われる宮が確認されたこと、など、今後に多くの検討課題を残している。

（橋本義則）

- ① 二月廿九日詔小刀一□ 針一□ 半斤□ 182×29×3011 131×17×3 011
- ② 大伯皇子宮物 大伴□・・・一品并五十□ (145+85)×18×4 011 ⑩・十月五日立家安麻呂四  
・□ 五十三 五十 (針書)
- ③ 石川宮鐵 (89)×(18)×2 059 (130)×20×3 061 (漆箋)
- ④ 湯評伊波田人葛木マ鳥 183×19×2 011 (121)×(16)×8 081
- ⑤ 湯評大井五十戸 129×16×2 081
- ・凡人マ己夫 (122)×13×3 011 104×20×4 032
- ⑥ 加毛評柞原里人 (121)×(16)×8 081
- ・(兎鳴) □□マ□俵 (133)×21×2 032
- ・□□マ□俵 (14) [五力] □難釘五十六□ (209)×(17)×3 081
- ⑦ 吉備道中國加夜評 (109)×6 (軸の径) 061 (釘様の軸)  
・葦守里俵六□ 111×24×3 031 (145)×36 (笠の径) 9 (軸の径) 061 (釘様)
- ⑧ 五十戸□止伯マ大尔 (146)×21×2 081 •百七十
- 鵜人マ犬刀□ (16) •□□人皇□ (145)×36 (笠の径) 9 (軸の径) 061 (釘様)

## 興福寺所蔵聖教の紙背文書

歴史研究室

興福寺所蔵の聖教には、紙背文書があるものが比較的多くみられる。その主要なもの一部は、『奈良六大寺大觀』等で紹介され、奈良国立文化財研究所年報でも、1960・1970・1981・1983・1984各年報において紹介されている。

今回もそれに引き続いて、興福寺所蔵の聖教の紙背文書のうち、鎌倉時代のものについての翻刻を行うものである。

経箱第十函には、維摩会関係の論議草が9点収録され、そのうち6点に紙背文書がある。経箱第十函に収められている聖教はすべて鎌倉時代のものである。そのうち、建久四年（1193）の具注暦をもつ正治二年（1200）書写の論議草や弘安九年（1286）の具注暦をもつ第七品數尋思別用のごとく、具注暦の紙背に書かれた聖教も存在するが、文書の紙背に書かれた聖教も多い。

「論議草（成定為簡於此立二所）」（第10函2号）は、建長五年（1253）六月十日三松末葉承遍書写にかかるもので、表紙を含み15紙あるが、紙背文書は第9紙目を除きすべてにある。その紙背文書が、[1]の(1)から(14)の文書である。釈文掲載の順序は聖教の巻首からの順にしたがっているが、いずれも書状で、年付きのあるものはない。しかし、紙背書状の日付けについてみると、三月二十三日から四月四日の間に限られ、一連の書状もしくは一括の書状と考えられ、紙背書状は、いずれもが建長五年のものと考えてよかろう。さらに、これら書状の充所は承遍と明記されているものはないが、概ね承遍充てであろう。

紙背文書の多くは、本紙のみや、札紙のみで、内容的に完結するものは少なく、その内容の全容を捉えることはできないが、そのなかでも、その文言に「御訪」に関するものがいくつかみられるのが注目される。御訪は扶助的贈与慣行と規定され、それが次第に義務、負担となっていくものである。上京・下向などの際に御訪が行われていることが、他の紙背文書により知られる。その御訪の計会は概ね雑掌が行っているようであるが、事情によっては、なかなか順調には施行されなかったようである。

なお、承遍書写の聖教は第十函に、もう一点ある。それは、「因明大疏私抄」（7号）であるが、その紙背文書については、年紀のあるものを中心に数通釈文を紹介する。嘉禎四年（1238）の大藏氏の諷誦文や弘長三年（1263）のいわゆる二字書出（奈文研年報1984 p38参照）がそれであるが、それ以外にも維摩会豎者の論題に関する書状等に興味がもたれる。なおいわゆる二字書出は、「相違因（第11函5号）」の紙背文書に、仁治二年（1241）八月、九月のものが比較的まとまって残っている。

（綾村 宏）

同日酉刻記之了

請諷誦事

三宝衆僧御布施一襄

(端裏書)

建長五 承道書

右為滅罪生善除災与樂  
增長福壽善願圓滿心中

(二)「因明大疏私抄」紙背文書(抄)

(第一〇函七号)

(一)堅義者二字書出

伝燈法師位(別筆)  
宗賢

弘長三季十一月 日

嘉祐四年卯月六日大藏氏敬白

四 宣□書狀

夜前所令言上候甲

逐申  
(六) 某書狀礼紙書

五十講祈願事ハ御沙汰

たにもさ候、まして可存  
不候ぬ御筆之義成候成也、  
謹言、

候、恐惶謹言、

期後信候、恐々謹言、

六月廿五日 宣□

(端裏外題)

因明大疏私抄中卷本  
承遍

謹上 玄春御房

九月十二日 幸弘

付法印御房

(五) 某書狀

東大寺定秀得業當

維摩会堅者候、為一問□

(三) 大藏氏諷誦文

敬白

大納言得業御房御点□  
因明之題一二三問令伺申給可令

注給候哉、喜□宰相得□

題事も其御房御沙汰□

被申候、二三間被定候て、同□

□□候、無骨之子細不候者、御□

可被行候、每事期見參候、

恐々謹言、

五月三日 □

逐申

僧都御房御上洛之由承了、

此罷過之後、可參上候、

只今なにの五師とかや申  
候つる僧出来て、御辺之季  
頭ハ秋分也、我沙汰當時也

と申候つる間、心長思候つる処ニ  
坊修理之間、雖少事當時難□

今仰不審候、安居以前安居

候也、然而隨奔走候可申之狀

如件、

三月廿五日 □□

(一) 某書状

一日御參得本意候き、彼御

訪事、折節得計会事候間

□被沙汰給候也、返々為恨候、

恐々謹言、

四月四日 □経

(二) 某書状 (前欠)

條尤非本意候事候、

期見參候、恐々謹言、

三月廿六日 □□

(三) 某書状 (後欠)

條尤非本意候事候、

期見參候、恐々謹言、

三月廿六日 □□

(九) 某書状

御大當事、當春之

由承候、雖何物隨尋

得可申候也、謹言、

三月廿七日 (草名)

(十) 某書状

季頭神馬事承候了、

但當時馬術懸候、

雖何物隨尋出可申候、

如使俄闕如之間被押懸候、

建長五年六月十日中内談義了

去年依勤仕方々訪不可  
叶候、仍奔走之間、雜掌不  
能他事計略候、折節返々  
遣恨候、但如此之御經營  
不可限今度候哉、每事期

去年依勤仕方々訪不可

叶候、仍奔走之間、雜掌不

能他事計略候、折節返々

遣恨候、但如此之御經營

不可限今度候哉、每事期

(八) 某書状  
彼御訪事可相構候、  
但禁□□受□事等

計会之間、雜掌無憚候、

悉可計略之由被下知候也、

每事被沙汰之狀如件、

三月廿四日 (草名)

(十一) 某書状

委細承候了、御訪事

雜掌計会事等候

間無其謬候、重可

相尋候也、謹言、

三月廿六日 能□

条尤非本意候事候、  
期見參候、恐々謹言、

三月廿六日 □□

(奥書)

(一) 「論義草（成定為簡於此立二所）」紙  
背文書  
(第一〇函二号)

(一) 前伊賀守某書狀

(第二〇函二号)

四日ニ請申まいらせて候、相構  
二日許御下向候へかし、不然者  
とくく御辭退候へく候、東小田原

(五) 某書狀（後欠）  
申候、  
御札之旨謹拝見候了、  
其後指事不候之間不言

上候、恐恨無極候、

申候、種々可責伏候、

別会五師物、度々責伏□

いかにも□□□進候沙汰□□

と申候、少輔法橋又可致沙汰之由

京都へ御訪察申候、折節

ゆ、しき御大事候て、中々

申候、種々可責伏候、

京都へ御訪察申候、折節

(二) 某書狀

三月廿四日 前伊賀守□□

三月廿三日 法印隆□

(三) 某書狀

逐申

猶々此とふらひ不申候条、  
遣恨無極候了、大方の身

作法如形、時料之外ハ持  
する所なく候、同行両三之外

候之處、都使者不候之間空過候、  
候之處、都使者不候之間空過候、

送日候也、□□

昨今之程、可進飛脚之由相存  
候之處、都使者不候之間空過候、

東小田原八講事、何様可候哉、  
おほしめすへからず候、重□

(四) 某書狀礼紙書

三月廿三日 権律師□□

(五) 某書狀

自去十六日御住山候也、  
早以此趣申入可申

左右候也、恐々謹言、

第三之間、如此言上候、委細

逐申

猶々此とふらひ不申候条、  
遣恨無極候了、大方の身

作法如形、時料之外ハ持  
する所なく候、同行両三之外

候之處、都使者不候之間空過候、  
候之處、都使者不候之間空過候、

送日候也、□□

昨今之程、可進飛脚之由相存  
候之處、都使者不候之間空過候、

候之處、都使者不候之間空過候、

東小田原八講事、何様可候哉、  
おほしめすへからず候、重□

(六) 権律師某書狀

自去十六日御住山候也、  
早以此趣申入可申

逐申

猶々此とふらひ不申候条、  
遣恨無極候了、大方の身

作法如形、時料之外ハ持  
する所なく候、同行両三之外

候之處、都使者不候之間空過候、  
候之處、都使者不候之間空過候、

送日候也、□□

昨今之程、可進飛脚之由相存  
候之處、都使者不候之間空過候、

候之處、都使者不候之間空過候、

東小田原八講事、何様可候哉、  
おほしめすへからず候、重□

(七) 某書狀礼紙書

逐申

猶々此とふらひ不申候条、  
遣恨無極候了、大方の身

作法如形、時料之外ハ持  
する所なく候、同行両三之外

候之處、都使者不候之間空過候、  
候之處、都使者不候之間空過候、

送日候也、□□

昨今之程、可進飛脚之由相存  
候之處、都使者不候之間空過候、

候之處、都使者不候之間空過候、

東小田原八講事、何様可候哉、  
おほしめすへからず候、重□

## 平城宮式軒瓦の同範関係の調査

平城宮跡発掘調査部

考古第三調査室では、平城宮および平城京城で出土する軒瓦の同範関係について継続的に調査を実施しているが、そうした近年の調査成果のいくつかを報告する。

### 壱岐島分寺の軒丸瓦6284A

平城宮軒瓦編年第Ⅰ期の軒丸瓦である6284Aは、ほかの6284型式と同じく、第一次大極殿地域に多く分布している。1987年度から開始された壱岐島分寺の発掘調査で、これと同範とみられる軒丸瓦が出土したため、長崎県教育委員会において実物による照合を行った。その結果、細部にわたる文様配列とともに範傷が一致し、同範であることが確定した。壱岐島分寺例は、平城宮出土のものに比べて範傷が進行しており、時期的に遅れることは間違いない。また、胎土や焼成が明らかに異なるうえに、前者は接合式でありながら、瓦当裏面下半部に周堤状の高まりをもつという特徴を備える。こうした特徴は、九州の7~8世紀の軒丸瓦のいくつかで認められており、平城宮とは異なる工人が製作したことを見出している。よって範が移動したことは確実であるが、その年代を含めて、壱岐島分寺ないしその前身寺院（『延喜式』卷21玄蕃寮に「壹岐嶋直の氏寺を嶋分寺となす」とみえる）の造営と中央官衙との関わりを検討する上で重要な資料として注目される。本例は、現在までに判明した平城宮同範軒瓦としては、最も遠隔地のものである。なお、この成果を含む壱岐島分寺の発掘調査報告（長崎県芦辺町教育委員会『壱岐嶋分寺Ⅰ』1991年）が刊行されている。（小沢 裕）

壱岐島分寺 6284A (1:4)

### 大和興福寺の軒平瓦6682E

本軒平瓦は1986年の第174-7次で興福寺旧境内から出土した。今まで平城宮京を通じ唯一の発見例である。瓦当文様と曲線顎の特徴から平城宮軒瓦編年第Ⅱ期後半（天平初年~17年）の作と考えられる。文様左第一単位第二支葉の内弯部の不自然な突出箇所から、下野薬師寺と播磨溝口廃寺出土の軒平瓦と同範である可能性が出てきた（岡本東三「同範軒平瓦について」『考古学雑誌』第60巻第1号 1974年）。1988年京都国立博物館主催の特別展覧会「畿内と東国」開催期間中、興福寺例と下野薬師寺例との同範関係を確認した。岡本氏は範傷進行によって下野薬師寺から播磨溝口廃寺への範型の移動を指摘した。興福寺例は破片のため範傷進行による比較ができるないが、顎の形状が曲線顎であるのは播磨溝口廃寺に近い。これに対して下野薬師寺例は浅い段顎に仕上げている。出土堆の付近では「ならシルクロード博覧会」に伴う発掘調査

下野薬師寺  
6682E

播磨溝口廃寺  
6682E

大和興福寺  
6682E  
(1 : 4)

が奈良県立橿原考古学研究所によって実施されており、今後残存状況の良好な6682Eが発見されれば、範型の移動について解答を与えることができよう。

(佐川正敏)

#### 平城宮の軒丸瓦6284Eと6282Fa

両者は弁を線的に表現した複弁8弁蓮華文で、間弁がB系統、平坦な中房の蓮子数が1+6、外区内縁の珠文数が24、外区外縁の線鋸歯数が24、外縁の形態が傾斜縁Ⅱであるというように、中房中心蓮子の大きさの違いを除けば、諸特徴は一致する。さらに両者の文様細部の位置関係も一致するので、6284Faは6284Eの中房中心蓮子を大きく彫り直したものと考えられる。ところで6284Eは平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）に、6282Faは第Ⅱ期後半から第Ⅲ期にかけて（天平初年～天平宝字元年）それぞれ位置づけられている。6282Faはさらに弁を彫り直してFbとなり、天平宝字年間の平城宮の改作への使用が考えられている（『平城宮発掘調査報告 XIII』P.337 1991年）。つまり6284E-6282Fの範型は平城宮造営以来約半世紀に渡って使用し続けられたことになる。目下知られる奈良時代で最も息の長い範型といえよう。

(佐川正敏)

~284E

6282Fa

両者の比較

## 平城京出土の籌木

平城宮跡発掘調査部

奈良そごう建設に伴う左京三条二坊の発掘のうち、197次調査（1989年1月～3月）では、長屋王邸の北に接する二条大路上に東西溝 SD5100を検出した。この溝は737年（天平8）～739年（天平10）頃に掘ったごみ捨て用で、溝の幅は約3m、東西の長さは約130mにおよぶ。さて、土器や木簡など多量の遺物が堆積した溝を堀り進むうち、棒状品が東西60cm×南北50cmの範囲に幾重にも折り重なって見つかった。棒の長さは15cmから25cmほど、太さは5～6mmあまり。やや大きめの割り箸に似ている。棒状品の下部には笊の一部がみえる。笊の身の部分は粗い網代編み、縁は巻縁とする。網代は3～4mm幅に整えた材を1単位が2cm弱に編み、かなり隙間がある。笊の大きさは、縁が約40cm残存するのでこれよりやや大きい程度であろう。棒状品は笊の縁をおおうように散乱している。はじめは未使用の木簡かと考えたが、やや細い上に字や墨痕があるものはなく、結局籌木説が有力となった。おそらく籌木を笊に盛った状態で溝に投棄したのだろう。

籌木は用便の際に尻を拭う木のこと、糞べら、搔木、捨木とも呼ぶ。最近では、福岡市の太宰府鴻臚館遺跡や藤原京右京七条一坊の便所跡から見つかっているが、197次の調査当時は8世紀に遡る明確な例は未詳であった。珍しい事例であるので、記録（図と写真）を作成の上、笊を中心とする部分をとりあげ、保存処理した。籌木や笊はP.E.Gの20%溶液を含浸したあと凍結乾燥し、土の部分はイソシアネート系合成樹脂の5%溶液を含浸させて硬化した。

（金子裕之）



筹木の出土状況（1:10）



保存処理がすんだ筹木

## 動物遺存体の調査（8）

埋蔵文化財センター

本年度行った動物遺存体関連の主要な調査には以下のものがある。

千葉県文化財センターの行った多古町南借当遺跡の調査では、自然河川の古墳時代から中近世にかけての堆積土からウシ、ウマ、イヌ、ニホンジカ、イノシシなどの骨と、ニホンジカの中手骨と鹿角を加工した中世特有の鎧の部品、簪などが出土した。この結果、この遺跡では中世の人達が斃牛馬の処理に当たりながら、鹿角や骨の細工にも係わっていたことが明らかになった（松井章1991「南借当遺跡出土の動物遺存体」『多古町南借当遺跡』千葉県文化財センターpp.130-142）。

藤原調査部が藤原京右京7条1坊西北坪において検出した便所遺構と思われる土坑の土壤の分析を、粉川昭平氏（大阪千代田短期大学：植物分類学）、金原正明氏（天理大学：花粉学）、中野益男氏（帯広畜産大学：コプロステノール分析）、宮武頼夫氏（大阪市自然史博物館：昆虫学）らの協力を得て行ない、内容物を明かにした。その結果、各種の糞虫、消化器官を経て排泄されたコクゾウムシ、ウリ、アサ、ナス、カタクチイワシの椎骨などの存在を明かにした。さらに寄生虫の検出を幾人かに依頼した結果、金原正子氏（元病院臨床検査技師）が、土壤中に大量の回虫、鞭虫、横川吸虫、肝吸虫などの卵が含まれていることを発見し、考古学での日本で最初の寄生虫の報告となった。微細遺物の採集には、一般にはふるいを使う水洗選別法、昆虫や種子などの比重の小さい遺物を舞上がらせて採集する浮遊遺物選別（フローテーション）法などが有効で、さらに小さな花粉、寄生虫卵などについては重液分離法が必要であることを確かめた。金原氏らは平城京二条二坊坊間路西側溝にも同様の寄生虫卵が存在することを再発見し、その結果を得て、松井はその上流の樋状遺構（第202-13次、1989年度概報）を弘仁6（815）年「太政官符」の記述、「立格既畢。而近渠之家。大穿水門好絕溝流。垣基因茲類毀。道上為之湿惡。公私之煩莫不緣此。絕如此之類重加禁止。但无害公私者聽置樋引水。不得因茲流出汚穢。濕損道路。若有違犯之者。」に合致するものとし、これを平安時代の便所の別名、「樋殿」の具体例と考えた。

右図はその想像図である。道路側溝の水を、木樋によって築地の内に引き込み、おそらく上澄みのみを再び側溝に環流させる。樋殿には床があり、あふれた場合に汚れがひろがるのを防いでいたであろう。

（松井 章）



樋殿の想像図

## 遺跡の磁気探査（3）

埋蔵文化財センター

世界的にみて、遺跡探査に応用される磁気探査には二つの方法がある。三成分ある地磁気の要素を総合した、すなわちベクトル量の総和である絶対値をはかる全磁力（Total Intensity）測定と、鉛直成分の差（Gradient）を求める方式である。考古学探査では前者がまず開発され、1960年頃より世界的に採用されはじめた。わが国でも60年代後半より導入されて普及してきた。後者は、1980年代になってから開発されたもので、日本でも最近導入され急速に応用されてきている。

これらの内全磁力測定では、普通、プロトン型の磁力計2台を使用する。ノイズに影響されないための工夫で、2台を同時に作動させて各々が観測した値の差をとる。プロトン型ではセンサーを固定するために、棒を地面に突き刺すという作業が必須で測定に時間がかかるが、深い層位の遺構も特定できるというのが特徴である。

一方、垂直成分の差を求める装置ではフラックスゲート型が主体で、考古学探査専用に開発された携帯型装置では、これを携行して対象地内を移動するだけで測定が可能で、測定速度は非常に速い。しかし、プロトン型に比べると有効探査深度が浅いという欠点がある。深度としては、例えば通有の須恵器窯跡であれば、プロトン型では地下3m程度までの存在が推定できるに対して、フラックスゲート型では1.5mよりも浅いものに限られる。

ところでこれら磁気探査の方法は、わが国では欧米にみるように、あらゆる種類の遺構探査には有効でない。窯跡のように熱残留磁気を帯びた遺構を対象とした測定に、限定されているといつても過言ではない。その理由としては、わが国では水田土壤にみるように、地表に帶磁率の大きな土層が存在するため、それよりも深い位置にある遺構が示す僅かな磁気の異常が、地表面にまで反映され難いという点が考えられる。

このような状況にある磁気探査の限界を克服し、より多様な遺構を探査できることを目標として、新たな測定装置開発に取り組んでいるので、今までの成果を紹介する。

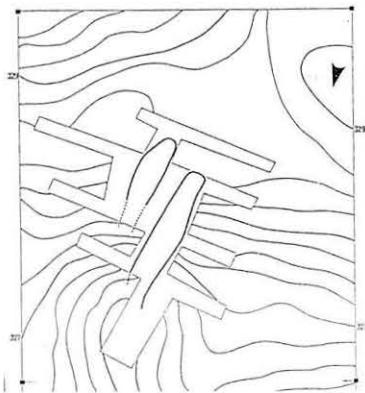
それは、地磁気の三成分それぞれを別個に測定できる装置で、携帯型フラックスゲート三軸グラジオメーターと呼ぶ。装置にはリングコア型の磁気センサーが、上下50cmを隔ててそれぞれ3個ずつの合計6個設置してある。それぞれは、地磁気の異なる成分を測定するもので、もし鉛直成分の差を求めなければ、その値のみを取り出せばよい。全磁力が知りたい場合には、三成分すべてを使用して計算すればよい。

というように、この装置では必要ならば従来求めていたような形の成果も提示できるのみならず、地磁気が本来持つ成分を独立して測定できる。はじめから成分が合成された形であったり、ある一成分のみしか求めてない不十分な地磁気測定と比較すれば、遺構を探査する上で今までにはない有効な情報を提供できることが期待できるのである。

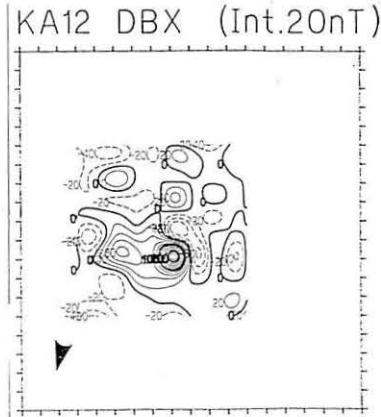
従来と異なる測定成果の一例を別に図示して紹介する。

（西村 康）

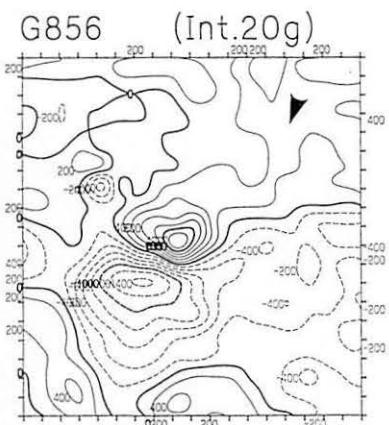
磁気探査結果の一例  
上雨屋12号窯跡  
(福島県 会津若松市所在・大戸古窯跡群)



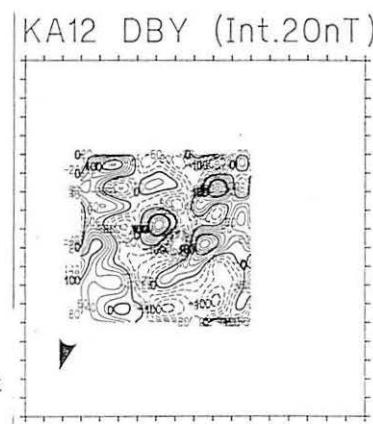
**発掘結果**  
全長6m程の須恵器窯跡が約1m離れて並存することが確認された。このように近接していると、従来の磁気探査法では2基を弁別することは困難である。



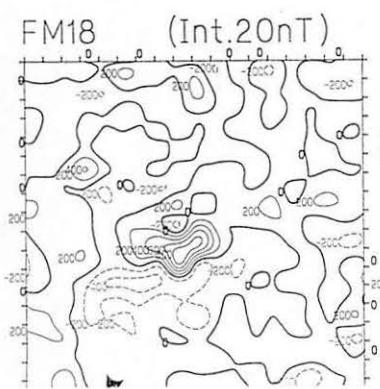
**新たな装置による探査結果  
南北方向成分**  
ブラックスゲート型三軸グラジオメーター



**従来の方法による  
磁気探査結果  
全磁力測定**  
プロトン型磁力計 G 856を2台使用した連動法測定

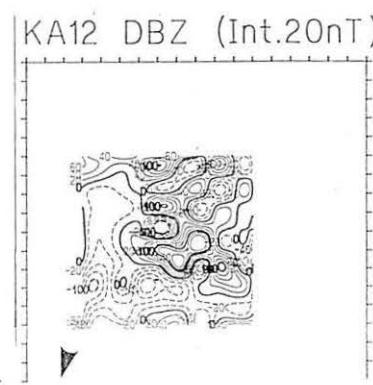


**新たな装置による  
探査結果  
東西方向成分**  
ブラックスゲート型三軸グラジオメーター



**従来の方法による  
磁気探査結果  
垂直差分測定**  
ブラックスゲート型  
FM 18 磁力計

**新たな装置による  
探査結果  
垂直方向成分の差**  
ブラックスゲート型三軸グラジオメーター



## 愛媛県松野町の近世地形模型図化

埋蔵文化財センター

愛媛県北宇和郡松野町の目黒ふるさと館に、宇和島市から松野町地内の高知県との県境に至る山岳地帯の地形模型が展示されている。この地形模型は、銀杏の木を彫刻したもので、寛文5年（1665年）吉田藩目黒村と宇和島藩次郎丸村の境界争いに決着をつけるために、幕府評定所へ提出された裁判資料である。江戸時代に作製された地形模型としては、鳥海山張枝・防長土図がしられているが、両者とも18世紀の作品である。したがって、目黒ふるさと館の地形模型は、わが国では最も古い地形模型の一つであり、江戸時代初期の測量史・地図史を彩る貴重な資料である。この地形模型のことを地元では山形とよんでいる。山形の大きさは、長い方向で266cm、短い方向で191cm、最高点での高さは20.5cmある。江戸まで運搬することを考慮して、全体を六分割し、裏側をくり貫き軽量化をはかっている。分割された部分を並べ山形を再現するとき合い口がズレないようにホゾで止めるように工夫されている。

山形の作製に関する資料として、測量の野帳・斜距離を水平距離に直し、縮尺化した計算簿・基図となる絵図を作製する前の起請文が山形と一緒に保存されてきた。起請文は3通あり、藩の役人たちのものが一通、村役の人々のものが一通、そして、測量を担当した人々（他の文献

山形の垂直写真

では町見師とよび、すでに測量の専門家がいた事を示している。) と、測量の成果にもとづいて山形を彫刻した大工たちのものが一通である。

野帳には、杭の番号・杭間の距離・方位・高低が記されており、尾根筋と谷筋に杭を打ちコンパスによるトラバー測量と、使用器械は分からぬが、何らかの水準測量が行われたことが伺える。計算簿を見ると、縮尺は百間を一寸一分 ( $1/5500$ ) にしたとあり、実際にそのようになっている。斜距離を水平距離に変換するには現在ではピタゴラスの定理を使うが、當時どの様にして求めたかは記載がないが、斜距離が水平距離に正しく変換されている。

ハッセルブルッド MKW を使って山形を縮尺約  $1/40$  で垂直撮影し、解析図化機 AC-1 で実物の  $1/2.5$  の図（等高線間隔  $2.5\text{mm}$ ）を描いた。国土地理院発行の  $1/2.5$  万の地形図と比較すると、縮尺は、約  $1/6060$  になり、計画の  $1/5500$  より  $10\%$  ほど小さく仕上がっている。尾根が幅広くなったり、谷が不自然に盆地状になっているところもあるが、尾根や谷の分布は、おおむね  $1/2.5$  万の地形図のそれらと一致する。

山形の高さは、山麓線を基準面にして決まっている。実際の山麓線は、宇和島市内で海拔  $10\text{m}$ 、高知との県境付近では  $160\text{m}$ 、宇和島市と松野町の中間では  $250\text{m}$  もある。 $240\text{m}$  も比高のある山麓線を同じレベルにしたため、高さは不正確になった。ただし、山麓からの比高であると考えればかなり正確にできていると言える。

(木全敬蔵・佃幹雄)

#### 山形の等高線図

# 飛鳥池遺跡出土遺物の材質

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥池遺跡の発掘調査によって、ガラスおよび漆工・金工等に関する工房が発見され多数の遺物が出土した。これらの遺物については、理化学的分析と保存科学的処理が求められており、順次その作業を進めていく予定である。出土遺物の中でもガラス工房関連の遺物は、原料素材、坩堝および蓋、ガラス小玉鋳型などで、古代におけるガラス製作技法を解明するうえでも貴重なデータを提供するもので、今回はその一部について行った、材質・技法の復元研究について報告しておく。

## ガラス工房関連の遺物

1. ガラスの主原料と考えられるものに鉛鉱石および石英がある。鉛鉱石は方鉛鉱で顕微鏡観察から閃亜鉛鉱および小量の黄銅鉱、黄鉄鉱を伴うものであることが判明した。石英はペグマタイト中のもので、比較的広範囲に分布しており、たやすく採集可能なものである。以上の事は、この遺跡ではカレットからではなく主原料を用いて原料から鉛ガラスの製造をおこなっていた事實を示す。(鉛鉱石および鉛ガラスの鉛同位体測定により、日本産と確認された。)
2. ガラス坩堝内壁に残存するガラスは、緑色系、赤褐色系、黄褐色系の色調でいずれも鉛ガラスである。酸化鉛 [PbO] 含有量は45~70%前後で二酸化珪素 [SiO<sub>2</sub>] 含有量は45~25%前後である。ばらつきが大きいのは坩堝壁からの混入物や風化の程度による。鉛、珪素以外に検出した元素は着色剤としての銅、鉄、マンガンで、他にアルカリおよびアルカリ土類元素がある。
3. ガラス坩堝に残存する白色物質(銀化しているものも含める)の成分は主として炭酸鉛 [PbCO<sub>3</sub>] でいずれも PbCO<sub>3</sub> 含有量は70%以上で、SiO<sub>2</sub> 含有量は25%以下である。透明なガラス本体に比べて二酸化珪素は減少し、酸化鉛の量が見かけ上増加している。
4. ガラス坩堝には、ガラスとその風化物である炭酸鉛以外に黒色粒状物質の付着するものがある。これは、硫化鉛 [PbS] (方鉛鉱) であり、黒色粒状物質の分析値は PbS が50~70%, SiO<sub>2</sub> は45~25%前後であり、このうち SiO<sub>2</sub> は石英によってもたらされたものである。以上の事実は、この黒色粒状物質は溶融前のガラス原料素材である可能性を示すものである。正倉院文書「造物所作物帳」から復元される方法では黒鉛から鉛丹 (Pb<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) を製造したのち鉛ガラスを製作するものと考えられている。一方、当遺跡から鉛丹は検出していない。鉛丹が変質して硫化鉛となった可能性は少なく、鉛丹が炭酸鉛(白色物質)になったならば石英粒も伴うはずである。また、当遺跡からは金属鉛片も出土しており、ガラス坩堝の底部に残存した可能性があるが、いずれにしても、これらの関係については今後実験的に再現する必要もある。
5. ガラス小玉の鋳型と考えられていた1つには、孔の中心部分の細孔に径約0.8mmの灰緑色のガラス片が残存していた。分析の結果、鉛ガラスではなく、ソーダ石灰系のガラスである可能性がある。いずれにしてもガラス小玉の鋳型であることが科学的に証明できた。当遺跡ではソ-

ダ石灰ガラスの製造がなされていたのかは不明であるが、少なくとも加工していたことは事実である。

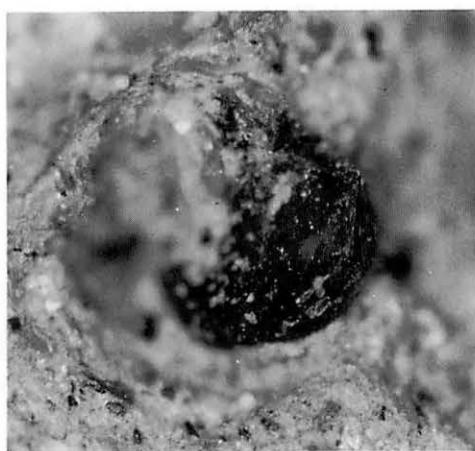
6. 赤色系ガラス中より、銅板切屑を発見した。従来から赤色系および緑色系ガラスの着色剤としては銅イオンの存在が確認されている。この銅イオンの供給物質としては文献史料などから銅鉱石である孔雀石（塩基性炭酸銅）が考えられていたが、今回の発見により屑銅板の碎片もしくは、鋳びた銅板碎片を利用した可能性も充分に考えられるようになった。

7. ガラス坩堝の胎土の鉱物組成から、坩堝が加熱された温度を推定した。これは、坩堝の製作時に受けた熱によるものか、ガラス溶解時の温度かは確定できないが、少なくとも耐火温度を知る手がかりになる。分析の結果、鉱物組成としては、石英、ムライト、クリストバライドで胎土に含まれている長石類は完全に溶融してガラス化していることが観察できた。以上のことからガラス坩堝は少なくとも1,100度以上に加熱され、またこの程度の温度には充分耐えられるように製作されたものであったと考えられる。鉛ガラスの製造にはこの程度の温度環境と長時間の高温環境が必要であったと推定する。

#### 金属製品

当遺跡から出土した金属製品は鉄、銅製品および鍍金製品であり順次分析調査を進めている。なかでも特記すべきは、銅一銀合金の遺物が見つかったことである。これは正確には化合物というより不均一な混合物と言って良く、 $100\mu\text{m}$ 径のマッピング分析では銀含有量は90~30%で1cm程度の範囲でみればおおよそ60%前後を示す。また銅含有量は微少領域の分析では7~68%で1cm程度の範囲でみればおおよそ40%前後であり、微少領域ではかなり不均一な物質である。分析値から考え得るに銀蠟の溶接棒の可能性がある。ちなみに、飛鳥寺西北方に位置し、7世紀中頃と考えられる水落遺跡出土の小銅管の銀蠟部分は銀含有量は55~70%，銅含有量は45~30%前後である。これは、古代の金工技術の解明にはきわめて重要な発見である。

(肥塚隆保・川越俊一・西口寿生)



ガラス鋳型に残存するガラス



坩堝片に残存するガラス原料

## 飛鳥地方出土石材の保存科学的調査

### 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

出土遺構や遺物を保存処理するには、その材質と風化・劣化に関する正確な情報を予め把握しておくことが重要である。今年度はこの意味から飛鳥・藤原宮跡近辺の遺跡から出土した岩石の材質と風化・劣化に関する特徴について調査を実施した。

当地域の地質は簡単なもので、領家花崗岩類を基盤としてそれを覆う沖積層より成り立っている。出土する岩石の多くも現地性の花崗岩類が最も多く、次いで火碎岩類や堆積岩類で、これらの岩石が大半を占めるものである。以下それらの概要について記載する。

花崗岩類：遺構を構築する花崗岩類は少数の例外を除くと、当地域で産出する龍門岳石英閃緑岩（角閃石黒雲母石英閃緑岩）で、ときに変斑構岩様の岩石も混ざっている。石像物や礎石をはじめ玉石に多量使用され、細粒のものから粗粒のものまで各種である。玉は円礫ないし亜円礫であるが、すべてが河川から採集されたとは考えられず、風化した閃緑岩層に残存する核部分から採集したものも相当数あるものと考えている。出土後において風化・劣化の顕著なものは、雲母類を含む中粒の石英閃緑岩で、出土直後において応急処理を要する。

また、これらの岩石は花崗岩にくらべて鉄分を多く含み、風化して地表付近で酸化すると茶褐色を呈し、その鉄分を土に沈着することがある。

火碎岩類：寺院などの建築物構築部材として使用されるものが大半である。もちろん、古墳には相当数使用されている。当地域で出土する火碎岩類は大きくみると産出地は2つで、岩質も異なる。1つは室生層群中の流紋岩質溶結凝灰岩で、他は二上層群中の流紋岩質凝灰角礫岩である。例外的には、姫路酸性岩類（飛鳥寺など）もある。

室生火山岩の溶結凝灰岩は、白色と黒色があり、白色の溶結凝灰岩が圧倒的に多く出土する。石材名として榛原石と称されるものである。この岩石は柱状ないし板状節理が発達しており、遺構から検出される大半のものは節理面から採集されたものが使用されている。また、いずれも溶結度の高いものが使用されており風化・劣化して崩壊するものはほとんど見られない。むしろ、土圧などにより割れているものが見られる。

二上層群中の凝灰角礫岩は、出土するものはそのほとんどが固結度が低く、かつ含水比が高く、風化・劣化がかなり進んでいる。出土後において早急な応急処理を要するものである。急激な乾燥はひび割れ発生の原因になるし、冬期は凍結による損傷も大きい。

堆積岩類：砂岩がもっとも多く利用されている。なかでも火山ガラス、パミス、化石を含む凝灰質砂岩で、藤原層群豊田累層中のものと推定できる。この岩石は新鮮なものは灰色を呈するが風化がすすむと淡黄土色と化す。固結度は低く、かつ含水比も高い特徴を有する。上記凝灰角礫岩同様に、急激な乾燥による大きなひび割れの発生や凍結による崩壊に特に注意が必要で、出土後の早急な応急処理を要するものである。

(肥塙隆保)

## 古代壁画の自然科学的調査と保存

埋蔵文化財センター

鳥取県西伯郡淀江町・上淀廃寺から彩色壁画の断片が多数出土し、その自然科学的な調査と保存処理方法について検討した。壁画は埋没以前に火を受けており、したがって顔料もほとんどが変色し、あるいは焼失てしまっている。分析の結果、壁画に使用された顔料の種類は、赤・黄・緑・青・黒・白の6系統で、およそ8~12種類と推定した。すなわち、鉄成分を主体にする顔料には、ベンガラのほかに赤紫色の紫土・朱土などと呼ばれる顔料があるように、主成分が同じ顔料であっても色調が微妙に異なるものがあり、呼称も違う。本壁画の赤系の顔料部分からは鉄・酸化鉄、およびごく僅かの鉛を検出しているので、ベンガラや紫土・朱土、そして鉛丹が使われた可能性があり、同系統の色調ながら微妙に異なる色の顔料が巧みに使い分けられたものと思われる。

壁画には肉眼で捉えることはできないが、ある種の顔料は火を受けて溶融し壁土にしみこんでしまったり、下絵が描かれているなどの可能性が考えられ、赤外線ビデオカメラによる観察を試みた。出土時には細面のおだやかな表情という印象の神将像であったが、赤外線ビデオカメラで新しく映し出した顔の輪郭線では顎が張っており、頬がふくらみ、逞しい呈していた(写真参照)。また、ほかの壁画断片からも隨所にいくつかの描線を新たに確認し、壁画は概して力強く、しかも精巧な線で描かれていることがわかった。

壁画断片は、長年湿った土の中に埋もれていたために過分の水分を含んでおり、それらは乾燥するにしたがい土壌や顔料の崩落が危惧され、速やかに強化処置をおこなう必要があった。なお、壁土には湿気を吸収したり放出したりする吸脱湿性があり、壁画の強化処置に際しても、この性質を損なうことなく硬化することが望ましい。今回は、こうした性質を保持したままで壁土を硬化する保存材料として、エポキシ系をベースにしたものやアルキルシリケートの縮合物などを特別に合成して使用した。さらに、必要に応じてアクリル系合成樹脂をしみこませて壁体の土粒子間の固着をはかるよう留意した。

(沢田正昭・肥塙隆保・村上 隆)

彩色壁画神将像（左）

赤外線ビデオカメラによる映像（右）

# 平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

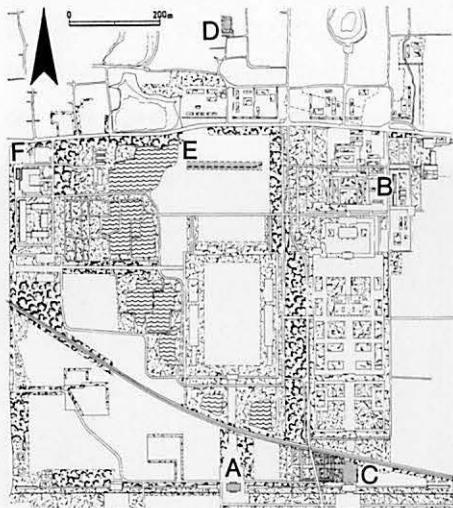
## 1. 平城宮跡の整備

1991年度に実施した宮跡整備は、朱雀門基壇復原、宮内省西北殿復原、兵部省地区整備、北面大垣地区整備、第一次大極殿地区整備などを行った。

**朱雀門基壇の復原** 当工事の3年度目で、すでにでき上っている基壇コンクリート軸体に外装の石材を取り付ける作業を行い、本体部分についてはほぼ完成した。石材は石川県小松市滝ヶ原から産出する凝灰岩切石を用い、基壇の立上り部、正背面の階段部および基壇上面の張石までを施工した。今回特に留意したのは、基壇外装とコンクリート軸体との接合面の処理で、大面積となる基壇上面から浸透する雨水をいかに誘導するかであった。種々の方法を検討した結果、幅7.5cmの羽目石裏側空隙部に、立上り約1.6mのうち下約3分の1は碎石を詰め、上3分の2には新たに開発した小バルーン状で透水性のあるスチレンボールを適度にエポキシ系の接着剤を加えながら詰め込むという方法をとった。基壇最上の葛石はかなりの重量があるため、その下には空練りモルタルを敷いたが、約1m毎に前記充填材で雨水誘導路をつくり、また最下の地覆石下には塩ビパイプを挿入して自然排水するよう配慮した。

礎石は事前の再発掘調査の結果、自然石であることが判明したのでこれにならったが、石材は岡山市犬島産の花崗岩自然石を用いた。ただ、将来建物本体を復原する際の補強方法が確定していないこともあって、軸体同様鉄骨補強の有無の両案に対応できるよう、礎石下の詰物には礎石の据え替えをしやすくするため南蛮漆喰で処理した。

今後の工事として、既設左右築地との取合せ部分および外周の整備工事が残されており、これらは来年度以降の施工となる予定である(図中A)。施工面積653.74m<sup>2</sup>、総工事費81,360千円。



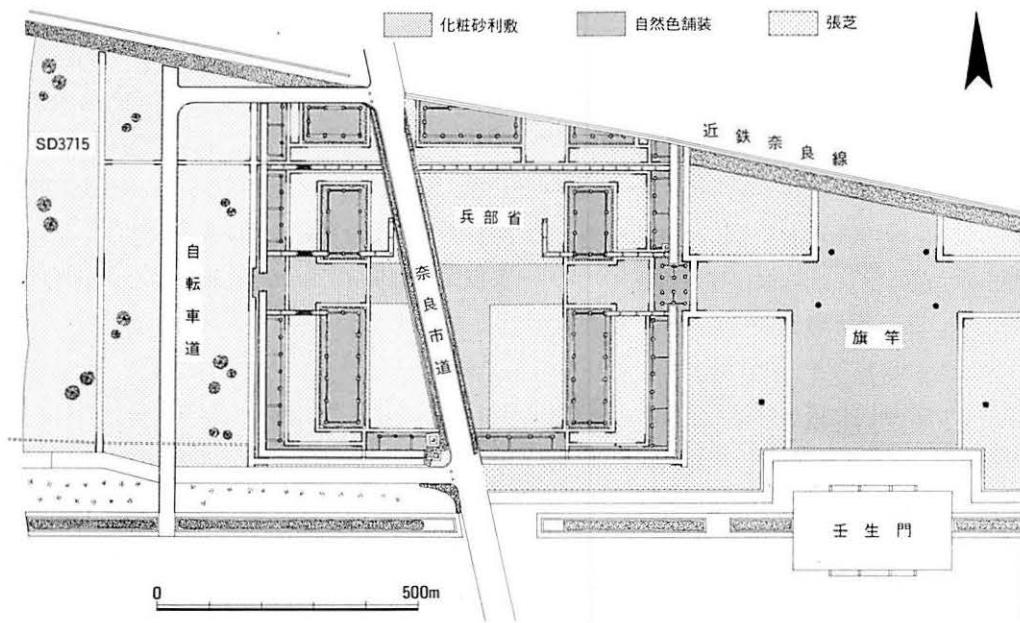
平城宮跡整備位置図

**宮内省西北殿の復原** 西南殿に続き、今年度から西北殿の復原にとりかかった。西北殿は西南殿の北側に位置し、やはり南北棟の掘立柱建物で収納庫的な建築であったと考えられる。ただ、西南殿より桁行が3間分長く12間分あり、北から2間・3間・7間と3室に分割されることが発掘調査によって確認できる。建物の様相が西南殿と酷似するところから、構造・意匠とも西南殿にならい、舟肘木・又首組とし、外周には土壁・扉口を設け、西側には明かりとりの連子窓をつけ、屋根は檜皮葺と考えた。今年度は遺構面までの排土から

はじめ、遺構の保護、基礎、軸部から軒垂木までの組立てを行い、次年度で完成する予定である（図中B）。施工面積208.86m<sup>2</sup>、総工事費116,236千円。

（細見啓三）

**兵部省の復原整備** 昨年度は奈良市道より西方域の復原整備を実施したが、本年度は引き続き兵部省の東半部と、壬生門から第二次朝堂院へ北上する宮内道路遺構の復原整備を実施した。兵部省外周を囲む築地塀と礎石建物群とを地上高1.2m、築地塀内側の片廻廊と郭内の区画塀とを地上高0.8mの高さに2段階に分けて立体的に復原した。建物や築地塀・区画塀は空洞コンクリートブロックを積み上げて壁体を造り、側面にリシンの吹付を行って白壁風仕上げとした後、上面を断面表現の一手法として土色の自然色舗装仕上げとした。建物と回廊の柱礎石は生駒山系産出の花崗岩を新たに使用し、朱塗柱（キシラデコール浸漬、オイルペンキ塗装）と礎石とを縦に貫通する小孔にステンレス棒を通してナットで締めて固定した。建物の基壇化粧は遺構に倣って花崗岩自然石の二段積とし、基壇上面と雨落溝底部を自然色舗装とした。推定南門から北方へ延びる礎敷痕跡を検出しているため、東西両門と南門とを結ぶT字型に化粧砂利を敷き詰め、その他を張芝とした。また、兵部省東方の南北道路敷では沿線の左右対称の位置に独立柱掘形を検出しており、儀式等に立てられた旗竿の痕跡と推定している。今回はこのうちの3対（計6本）を選び、正倉院に伝存する宝物や中・近世の即位儀式に関する史料等をもとに、高さ約6mの鉄製ポール（黒色ペンキ塗装）を立て、その上端部にステンレス製の鋸を取り付



兵部省復原整備平面図

けて象徴的に復原した。2か年にわたる兵部省の復原整備では、市道を走る自動車や近鉄線の車両の車窓からのみえがかりを考慮してかなり立体的な手法を用いたが、実際に区画内に人間が降り立った場合、視点高に比較して構造物（とりわけ外周築地壇）がやや高くなりすぎ、遺構の全体像を把握するうえで難点があるとの批判もある。立体表現における高さの問題は今後の検討課題である（図中C）。施工面積5,577m<sup>2</sup>、総工事費86,308千円。（渡辺康史・本中 真）

**北面大垣地区整備** この地区は平城宮北面大垣のうち、朱雀門からびる平城宮の中軸線上にあたっており、北面中門推定地として1988年に発掘調査を行った場所である。その結果、ここには北面中門は存在せず、大垣の前身をなす掘立柱壇が連続していることを確認した。平城宮の北面大垣推定地は東端の水上池尻の堤をなす部分を除いて、そのほとんどが佐紀町の人家密集地内となっており、そのために北面大垣、つまり平城宮の北辺を理解する上で大きな障害となっている。こうした周囲の状況の中にあって今回保存、整備した場所はかろうじて確保することができた部分であり、1991年6月10日に特別史跡に追加指定された。

整備対象地の面積は1,181m<sup>2</sup>であるが、周囲はすべて人家に取り囲まれている。したがって、整備ではまず第一にここに宮の北面大垣が通っていることをわかりやすく具体的に示すこと。第二には周辺の住民の方々にとっても親しめる場所となるように多目的に使える広場を確保することとした。

大垣の表示方法は当初、柱を本来の高さまで立ち上げ柱頭に笠木を取り付けるという半復原方式とでも呼ぶべき案を考えたが、人家密集地であることなどによる管理上の問題点が想定されたために、少し簡略な柱を80cmの高さまで立ち上げる従来の方法をとった。大垣の北約8mの位置にある北堀は両岸を花崗岩切石で護岸し、溝底はモルタルに玉砂利を埋め込む仕上げとした。溝の深さは危険防止を考慮し、10cmと浅くした。大垣の周囲から北堀までの塙地部分はインターロッキングブロックを敷並べた舗装とした。大垣および塙地部の整備面と南側の市道面との間にレベル差が生じるため、大垣の表示整備のできない東南部に擬石製の階段を設け見学者用出入口とし、北堀には擬木製コンクリート板（総幅3m）を敷き通路とした。堀の北側の本来は路面敷と考えられる部分に真砂土舗装の広場を確保し、また民家に接する外周部には生垣を設け目隠とした（図中D）。1,181m<sup>2</sup>、8,730円。

**第一次大極殿院地区の整備** 第一次大極殿院地区および南に接する第一次朝堂院地区の暫定的整備の基本方針は1987年の年報に記したとおりである。この方針は1978年に文化庁が策定した『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想』を前提とし、将来的な建物復原、基壇復原に至るまでの間の暫定的整備を行おうという考え方である。この基本方針に従って、第一次大極殿院南門（第Ⅱ期）南側までの整備と1989年度に終了している。本年度は第一次大極殿院中央部を東から西に流れる雜割石護岸水路およびヒューム管の暗渠水路を、次年度以降に予定している暫定的整備および将来的な本格整備に備え、少し南に移動させボックスカルバート（600×600）の恒久的暗渠（延長約170m）に改修した（図中E）。2,224m<sup>2</sup>、16,305千円。

（高瀬要一）

**大型遺物処理棟新営** 研究所では木質遺物の保存処理装置として、平城宮跡発掘調査部にPEG含浸タンクや真空凍結乾燥機等を設置していたが、近年大型（長尺）の建築部材が多数出土したことから、それらに対応した大型処理装置の導入を順次行ってきた。しかし、大型PEG含浸装置や大型真空凍結乾燥機は、既存の施設に収納できず、応急措置としてそれぞれプレハブ造の別棟に設置していたが、クレーン等の運搬装置もなく、作業空間も狭隘で、作業効率や作業の安全性など処理業務に支障をきたすことにもなっていた。そこでこれらの処理装置を集約し、作業環境の改善や設備の効率化を図るために、大型遺物処理棟の新築を行った。新築場所は第4収蔵庫の西側とした。なお、建築工事は建設省近畿地方建設局が、装置移設及び外構工事は研究所が、平成2・3年度に亘り実施した。

大型遺物処理棟は鉄骨造折版葺平屋建（システム建築）約10×28m（建築面積274.7m<sup>2</sup>）で、壁は鋼製サンドイッチパネル板を使用し、色彩は既存収蔵庫に合わせるようにした。

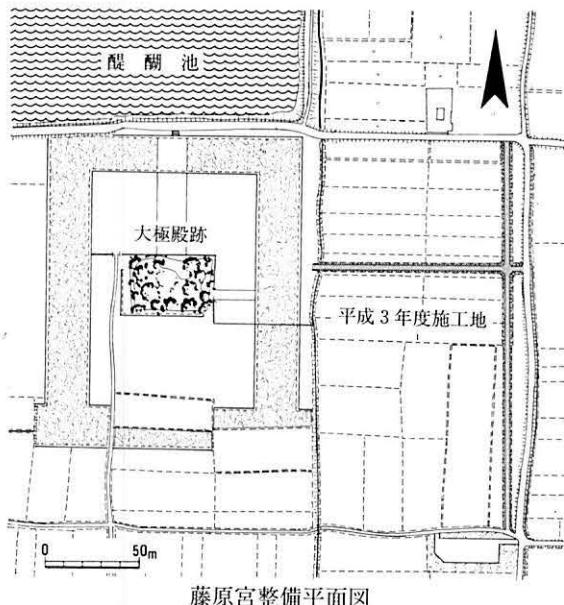
室内にはPEG含浸タンク（大型・中形・小型）及び真空凍結乾燥機（大型・小型）の移設を行い、ホイストクレーン2T吊り2基を設置し、重量物運搬・遺物入替時にも対応できるようにした。外部には遺物保存用の水槽（5×6m）と遺物搬入用スロープを設置した。総工事費は100,538千円であった（図中F）。

（阪本 勇・小園秀彦）

## 2. 藤原宮跡の整備

藤原宮大極殿院東方域に十字形の園路を設置して暫定的な整備を行った。この園路は宮跡東方集落（高殿）の住民の要望を受けて、学童の通学路整備のために実施したものである。園路の位置は、第58次調査で検出した大極殿院東方官衙の区画割に基いて設定した。すなわち、東西方向の園路は東方官衙の間を東西に通する道路遺構（SF6640）に心を合わせ、大極殿院・朝堂院東方を南北に走る市道から大極殿院に至る延長115.7mの施工範囲とした。また南北方向の園路は、内裏東外郭堀と東方官衙との間を南北に縦貫する道路遺構の東肩に園路の東法肩を合わせて計画した。施工範囲は市道小房東池尻線から1983年度に実施した案内小広場に至る延長212.7mである。園路の幅員はともに2.5mで、上面を粒調碎石敷、法面を張芝として、法裾にU形溝を設置した。施工面積は1,417m<sup>2</sup>、総工事費は12,360千円である。

（本中 真・渡辺康史）



## 飛鳥資料館の研究展示・特別展示

飛鳥資料館

**研究展示 「飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察」** 最近にあった埋蔵文化財の盗掘など文化財盗難事件に関わる遺物を展示したものである。盗難にあった遺物を展示したことは、これまでに例がない。遺物は、周到な発掘調査による出土データが揃っていてこそ、その一つ一つが歴史を復原する重要な資料となりうる。したがって、このような方法で展示することには問題があるが、遺物の重要性はそれを補ってあまりあるもので、研究資料としてこれらを役立てるために、あえてこの展示を企画した。通常、このような事件の遺物は、調査事務所や、博物館の収蔵庫の片隅におかれたままになってしまう場合が多い。

遺物は川原寺、穴太庵寺、海会寺など、近畿、東海、山陽の47遺跡、約2,000点に及び、これらのうち塑像、博仏、軒瓦、土器などの主要遺物300点あまりを展示した。

**特別展示 「飛鳥の源流」** 1985年、飛鳥保存財団と共に「日本と韓国の塑像」展を企画し、好評を博した。今回は、資料館15周年・財団20周年の記念展として、再び韓国側の協力を得て、飛鳥文化を検証する展覧会を企画したものである。

7世紀の両国の出土品と一緒に展示し、特に百済文化の飛鳥への伝播と交流が一目でわかる展示をめざした。特に、最近めざましく進展している日・韓両国の発掘調査による宮殿、寺院、古墳などの遺構・遺物の比較によって、両国の深いつながりを示した。また、扶余陵山里壁画古墳石室の実大模型、益山弥勒寺の石人像模造を作成し、飛鳥高松塚古墳、猿石と比較できるようにした。この他に便器（韓国扶余）と糞ベラ（鴻臚館）は、古代人の生活に密着した異色の展示品として観覧者の目をひいた。

国立中央博物館、ソウル大学校博物館をはじめとして、韓国各地の博物館から最新の発掘遺物を借用して展示することができたのは幸いで、  
あった。

(千田剛道)

研究展示・軒平瓦（慈光寺）

特別展示・男性用便器（扶余軍守里）

## 公開講演会発表要旨

**平城京の荷札木簡について** 荷札木簡が国・郡・郷のどの段階で作成され、それはどこでの勘査に用いられるためかという問題で、今日議論が交わされている。本報告では、荷札木簡の大部分が郡で作成され、それは国府での勘査に資するためである、とする有力な説に対して、新出の二条大路木簡を主たる材料として分析し、検討を加えた。その結果、荷札木簡作成においては国・郡・郷毎にそれぞれ共通点が見いだされ、郡の役割を過大に評価すべきではないこと、国府での勘査を示すとされる史料が十分な根拠をもつものではないこと、などからあくまでも京における納入時の勘査のために作成されたと考えるべきことを論じた。 (寺崎保広)

**弥生社会のはじまり — 木葉紋と流水紋から —** これまでの研究で、弥生人が好んで描いた紋様のうちに実は縄文社会で生みだされたものがあることが明らかにされている。その代表的な紋様が、木葉紋と流水紋である。しかもこの二つの紋様は、ともに日本列島に弥生文化が広まったごく初めに採用されているにもかかわらず、そのあり方がこの二者で大きく異なっている。二つの紋様の細部を具体的に検討して、①木葉紋のうちのあるものは流水紋より古く、西日本の前期初頭に位置すること、②縄文社会の紋様を忠実に受け入れたのは流水紋の方であったこと、③それには時間的な併行関係が深く関与していたこと、④弥生化する過程で、弥生社会自体の特殊な構造がかかわったこと、などを指摘した。 (深澤芳樹)

**ワット・プーとラオスの文化遺産** ワット・プーは、ラオス南部にあるヒンドゥー寺院で、現存する建物群は11世紀初頭の建立と考えられます。壮大な石造遺跡がバサック山の山裾から山腹に連なり、東を正面とし、上段に主堂・経蔵、中段に六つのストゥーパ、下段に二つの宮殿と聖牛殿、さらに東にはバライがあります。東西の中軸線上に参道が通り、階段と門の基壇が残っています。しかしすでに建物の屋根は失われ、一部は倒壊していて早急に保護と援助の手を待ち望んでいます。ワット・プー以外にも、北部ジャール平原の巨石文化や歴史的な王都ルアンパバーンなど、さまざまな文化遺産がありますが、ラオスにおける文化財保護は緒についたばかりといえます。幸い、このたび日本の文化財保護の状況を学ぶ機会を得ましたので、この経験をラオスの文化財保護のために役立てたいと思っております。

(ラオス情報文化省博物館考古局長 トンサ・サヤウォンカムディ 上野邦一抄)

**文化財の保存科学と国際交流** 保存科学とは自然科学的手法を応用して文化財の保存修復技術の開発とそれに必要な調査に当たる研究分野である。当研究所で最初に招聘した海外からの保存科学研究者は、バイキング船の化学処理を成功させたデンマーク国立博物館のクリスティンセン保存科学部長であった。1970年のことである。以来、当研究所と世界各国の研究門との交流事例は百件を数え、その4割が保存科学関係者であった。そのなかには、国民性や国情のちがいが保存科学技術交流以前の障害になることも多かった。しかしながら、技術と文化の国際的交流をとおしての新時代の構築は、こうしたハードルを越えようとする互いの自強にこそ託されている。 (沢田正昭)

## 中国と二つの交流

近年、文化財の分野においても、国際的な活動が盛んとなってきている。1991年度、奈良国立文化財研究所は中国と本格的な研究交流を開始した。これまでにも中国の関係期間との単発的な交流を行ってきたが、将来を見通した計画的なものはなかった。

### 1. 友好共同研究議定書

1991年6月19日、北京において奈良国立文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との間で「友好共同研究議定書」を調印した。これは9条の本文と2件の付則からなるもので、本文では両研究所の学術交流をはかるため、計画的な共同研究を実施し、研究者の交流ならびに学術情報・資料の交換をのべる。また、協定の有効期間を5カ年とし必要に応じて延長できるとする。付則には当面の研究課題を「日本古代都城と中国都城との考古学的比較研究」とすることを明記している。

共同研究は文部省科学研究補助金（国際共同研究、代表鈴木嘉吉）によって開始し、6月には鈴木嘉吉・町田章・木全敬蔵・綾村宏が中国に赴き、議定書の調印を行うとともに河北省の鄆城をはじめとする代表的な歴代の都城を踏査した。9月2日から2カ月間、考古研究所の劉振東・常青が来日し平城宮・藤原宮など日本の都城遺跡を調査し、日本考古学の現状などについての研究を行った。10月4日からの2カ月間には深澤芳樹・玉田芳英を考古研究所に派遣し、都城遺跡の実際を調査するとともに各地の関連遺跡を踏査した。1992年3月の2週間、考古研究所から副所長の徐光冀をはじめ劉觀民・王岩・段鵬琦が来日し、18日には奈良国立文化財研究所において、「日中都城研究の現状」と題する公開の研究会を開催した。

### 2. 芸術文化振興基金助成金による中国の調査

古都調査保存協力会（会長青山茂）の要請にもとづいて、中国における「伝統的文化財技術の調査研究」を実施した。これは日本ではすでに滅びさった文化財に関する保存技術を中国ないしは朝鮮半島で見いだし、実態を調査し、日本における文化財の保存技術を向上させようとするのが主目的である。今年度は伝世建築部門と埋蔵遺構部門とにわかれ、つぎのような調査を中国で行った。

1991年10月、伝世建築部門：濱島正士（国立歴史民族博物館）・浅川滋男。福建・廣東・貴州省で古建築の予備調査。埋蔵部門：牛川喜幸・町田章・川越俊一・山崎信二（以上測量・観察）、沢田正昭（保存措置）、仙幹雄（写真撮影）、先年発見された陝西省咸陽市郊外で発見された西渭橋の木造橋脚（1号橋は前漢代、2号橋は唐代）に関する調査。

1992年2月、埋蔵部門：坪井清足（大阪府文化財センター）・森郁夫（京都国立博物館）・町田章・巽淳一郎・中村慎一、江蘇省南部における南朝時代の石造遺構を中心に調査。

3月、伝世建築部門：伊原恵司（文化財建造物保存技術協会）・杉野丞（愛知工業大学）・細見啓三・島田敏男、福建省において古寺廟や民家などを調査。(町田 章)

## 保存科学の国際活動

文化財の国際交流の場が広がるなかで、当研究所の保存科学研究は海外からも評価を受け、その活動も一層活発となっている。

まず平成2・3年度で、当研究所と韓国との間で国際学術研究「日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究」を行った。研究の目的は、日韓で出土する遺物の材質調査とその保存法の開発による比較研究である。主な研究テーマは、①北海道江差沖の沈没船開陽丸、韓国的新安沖の貿易船の両者を中心に船体の保存方法の比較研究、②漆製品の材質比較調査、③金属製品の保存法、特に脱塩法の効果に関する比較研究の3点である。最終年度の平成4年1月、韓国ソウルで関係者150人の参加を得て開催した発表会では、上記テーマに加えて日本側から遺物・遺構の保存に関連する研究分野として、遺跡探査法と遺物の写真測量に関する研究成果も報告した。以上には工楽善通・伊東太作・西村 康・肥塚隆保・村上 隆・沢田正昭が参加した。

次に平成元年度から平成3年度にかけて、文化庁とアメリカ・スミソニアン研究機構との共同・国際学術研究「東アジア地域の古文化財の保存科学的研究」が行われた。当研究所も研究分担しており、①東アジア文化財その原料についての鉛同位体分析のデータベース作成、②ブロンズ病と青銅腐食のメカニズム、③古代東アジア青銅器における鍍金、④中国製・朝鮮半島製・日本製青銅器の鋳型作成・鋳型技術・冶金学的問題、⑤縄文土器の技法・組成の研究をおこなった。なお、この共同研究は3年計画で実施したもので、平成4年度からさらに新しいテーマ「科学技術を利用した文化財研究法」で共同研究を継続することになっている。この研究の分担者は佐原 真・西村 康・肥塚隆保・岩永省三・村上 隆・沢田正昭である。

また、村上研究員は国際交流基金の助成によりワシントンスミソニアン研究機構とボストン美術館の客員研究員としてアメリカ合衆国に滞在した。研究テーマは、「東西文化における古代金工技法の比較研究」である。アメリカでは、ギリシャ・ローマをはじめとし、中近東からタイや中国に至る東南アジア諸地域の古代金属の材質と製作技法に関する情報が蓄積されてきている。また、日本では馴染みの少ない中南米地域に関する研究も盛んである。今回の滞米中に多くの美術館・博物館、大学を訪れ、これらの研究に携わる研究者たちとディスカッションし、交流を深めることができたことは、大変意義深いことであった。スミソニアン研究機構では、特にフリアー美術館において、トム・チェイス保存科学部長のもと、古代中国青銅器の科学的調査を実地に行うことができた。また、滋賀県雪野山古墳出土の「辛出銘三角縁四神四獸鏡」と同型鏡とみられるフリアー美術館所蔵の日本出土鏡の調査を行えたことも今回の大きな収穫であった。(沢田正昭・肥塚隆保・村上 隆)

フリアー美術館における鏡の研究

在外研究員報告

**前文明期の社会組織と構造の研究** オーストラリア大陸にはその起源が数万年前に遡る住民（アボリジニー）が居住し、狩猟採集の生活をしていた。彼らは土器を知らず、利器は石器と木製品が主体であって、利器による時代区分で言えば、石器時代の段階にとどまる。18世紀以降の西洋文明の流入は、彼らを一挙に近代の鉄器時代に移行させた。石器から鉄器時代への変化を日本に求めると、弥生時代の初期に対比できよう。稻作社会への移行は巨大な変革を日本にもたらせ、その後の日本文化の基礎となった。この地で起きた事象を研究することは、弥生時代初期を追体験する事に等しく、また転換期の諸問題を考える上にも参考となる。今回は、変革期におけるアボリジニーの物質文化に焦点を絞って調べた。

(金子裕之)

**発掘調査先人の足跡を辿る** 文部省在外研究員として、2ヶ月間、イギリス・ネーデルランド・ドイツ・スウェーデンの順に4カ国を駆け巡った。研究目的は「発掘調査法の研究」、主たる受け入れ機関はケンブリッヂ大学。ピット・リヴァース(キリル・フォックス)とファン・ギッフェンが発掘した現地に立ち、博物館および報告書によって二人の偉大な先覚者が果たした役割を再確認するための旅であった。ソールスベリー博物館のピット・リヴァース特別室の展示が最も印象に残る。浜田耕作を通じて日本考古学にどの様な影響があったかという点に多くの示唆を与えてくれたのである。滞欧中、ここに列挙できないくらい多くの研究者・機関から懇切な援助・指導を受けた。深く感謝したい。

(山本忠尚)

博物館活動の地域社会に関する研究 今回の在外研修では、主に2つのことを目的としていた。1つはスカンジナヴィアに初めて南から人間が移住したと考えられる地域、メルモ、ゲーテベルグ、ウダハラ周辺の遺跡、遺物を現地で調べること。もう1つは、北欧の博物館と地域社会のかかわりを見聞きすることだった。後者については、北欧の少数民族ラップ人の過去と現在の生活と深くかかわった活動をしている。ヨックモックの「ラップと山の博物館」、ノルボテン県の県立博物館を訪ね、討議、資料交換を行い、さらにスコアラ県立博物館、ボーフス県立博物館で館長以下の学芸員と話し合った。また学校教育と博物館の交流という面では、ファルショッピングあるいはSkövdeなどの、町立博物館の活発な動きに興味をひかれた。(岩本圭輔)

地中海沿岸諸国における瓦の起源とその伝播に関する研究 という長いテーマで、エジプト・イタリア・ギリシア・トルコを歩きまわった。西方起源の瓦の実態を知るとともに、西周（紀元前11世紀）に始まる東アジアの瓦との比較研究を行うためである。今回、実見し得た最古の例は、希臘アルゴス市近郊のレルナ遺跡の青銅器文化（紀元前3000年）に属す建物の陸屋根にのせた厚さ1cmほどの薄いタイルである。これから、東方起源の瓦が土管を母胎とし、それを分割した曲面をもつ丸・平瓦に発展したのに対し、西方起源のそれは、タイルを母胎としたパン・スタイルの「平瓦」と、その隙間を覆う断面三角形の「丸瓦」を使う「コリント式」として発展した点に大きな違いがありそうだ、という見通しを得た。(大脇 肇)

(大腸 潔)

海外研修報告

魏から唐代を中心とする中国古代造瓦技術の研究 日本学術振興会特定国派遣（長期）により、中国で研修を行なった。主たる受け入れ機関は当研究所と都城制の共同研究協定を結んだばかりの中国社会科学院考古研究所である。この研究所のフィールドである鄆城、洛陽城、長安城、揚州城、元大都の瓦に加え、渤海龍泉府、金阿城（黒龍江省）などの瓦について、主として製作技術の観点から調査を行なった。中国の瓦の研究は現在もなお秦漢代中心であり、日本が造瓦技術を学んでいるそれ以降の時代の瓦研究は進んでいない。一般的な印象として、唐代の瓦当文様が日本の古代瓦のそれに劣る旨を中国人の研究者に告げると、摸索期の瓦は何處も力を入れて造るもので、中国でも秦漢代の瓦は美しいから研究者も多いとの返答であった。といえば日本でも、中近世瓦はようやく本格的な研究対象になり始めたばかりである。なお研究成果の一部は『日本中国考古学会会報』第2号（1992年）に発表した。（佐川正敏）

**日韓馬具の比較研究** 標記の研究テーマのもとに、1991年9月1日から30日までの日程で、日本学術振興会特定国派遣研究員として大韓民國を訪れた。韓国文化財研究所のお世話になり、韓國各地で三國時代の馬具を観察することができた。ソウルでは折しも中央博物館で「伽耶展」が開催されていたのは幸運であった。滞在期間の約半分は韓國內各地を旅行しながら遺跡、遺物を見学した。訪問地は清州、慶州、大邱、釜山、陜州、全州、扶余、公州などである。各地で博物館、文化財研究所、大学校博物館が所蔵する馬具を観察したほか、遺跡も多数見学し、研究者と意見交換できたことも収穫であった。最も興味深かったのは、伽耶地域の遺物、遺跡の地域色である。大伽耶連合の構成国を考古学的に復原できそうで、各々の国と日本との関連を追求することが可能になりつつある。古墳時代の日韓関係研究も新たな展開が期待できる。また、慶州文化財研究所が新羅地域について、都城、寺院、山城、墳墓を総合的に調査研究しているのを知り、わが調査部と思い合わせてうらやましい限りであった。9月26日には文化財管理局で「日本出土の鉄製轡」と題して発表を行った。(花谷 浩)

イタリア庭園の意匠・構造・立地に関する研究 1991年9月10日から翌年1月10日までの日程で、日本学術振興会特定国派遣研究員としてイタリアを訪問した。ICCROMにおける各種資料の収集の他、北イタリアおよびローマ、ナポリを中心として現存庭園や遺跡庭園の実地踏査を行った。作庭年代、規模、立地条件などにもよるが、イタリア庭園の多くは概ね傾斜地に造成された何段かの長方形テラスから構成され、とりわけルネサンス以降の例では整形式の植栽や園池、あるいはイタリア特有のイトスギの並木によるビスタの強調など、日本庭園に比してきわめて人工的なデザインとなっている。しかし日本庭園と同様、外部の自然景観と人工的庭園景観との視覚的結合を意図した構成が主流となっていることを、各種のヴァリエーションの中に確認することができた。また、こうした構成手法の源流や発展過程に関わる種々の事例を都市内に遺存するオープンスペース構造の中に発見することができた。 (本中 真)

## 海外活動報告

### 特別研究 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究

南アジアに多数残る仏教遺跡の保存整備に協力し、文化財保護の面での国際協力に寄与しようと始まった当事業であるが、本年度も昨年度に引き続き、仏教発祥の地インドを対象に行なった。インドでの調査はインド考古局の協力の下、石窟寺院を中心に、多数の仏教・ヒンドゥー教遺跡、博物館等を訪れ、遺跡の現状、保存整備の手法・課題等を調査した。(大脇潔・内田昭人・館野和己)

ニューデリー・デリー城の修復工事

**タイにおける史跡の保全整備に関する研究** 当研究所と東京大学工学部都市工学研究室およびタイ国チュラロンコン大学との共同研究として行われた「タイ国北部における大規模史跡の保全整備を中心とした地域計画に関する研究」の現地調査に上野と高瀬が参加した。本研究は大規模な史跡の保全整備を周辺の都市・地域を含んだ広域的な地域発展計画の中で位置づけるための計画手法を確立することを目的としている。三か年継続の調査であり第二年次である本年度の調査のうち、我々はスコータイ王朝の首都スコータイを中心としてこれに隣接する北部タイの都市遺跡、寺院遺跡の保存整備状況を把握する調査を分担した。スコータイはタイ政府が1977~88年の間にユネスコなどの援助を受けて歴史公園として復原整備した遺跡である。寺院跡を中心とする遺跡中核部の復原整備が充実している反面、王宮・居住地区・城壁・城門・堀などの遺跡がなおざりにされているのが目立った。しかし、ラテライトやレンガを構造体とする遺構の復原とそれらを区画する堀や池、周囲の芝生や植栽などによって構成された遺跡全体の景観形成は配慮が行き届いていた。また、復原整備の内容を記録した報告書の刊行はされていないようであったが、公園内にある図書館に整備前の写真が相当数保管されていることを確認し得たのは収穫であった。

(高瀬要一)

**シンポジウム「変化の時代における歴史的都市の保護」** 1991の初夏、カナダ・ケベックにおいて世界遺産として保護されている世界の歴史的都市があつまり、町並みの保護事業を紹介し、問題点を交換した。各地は保存事業を推進しているものの、観光や新規の建設との整合性を模索している。各地の事情が異なるので、必ずしも共通の理解は得にくく、具体的な解決策を共有するのも困難である。しかし、大きい原則はやはり共通であり、交流は意義深い。シンポジウムではケベック宣言を発し、交流の継続、共通の問題は共同して解決、個々の問題は各地で解決、を合意した。世界遺産都市のネットワークを確立し、日常的な交流、情報の交換をする体制を固めた。参加当時、日本は世界遺産条約を批准しておらず、私はオブザーバーで参加したが、1992年夏に日本は条約を批准した。

(上野邦一)

## 調査研究彙報

**高梨氏館跡の発掘調査と復原整備** 長野県中野市の依頼により、16世紀に造営された標記の県指定史跡に関する復原整備の立案と発掘調査の指導を行った。本年度は主郭（130×100m）の東南隅部に遺存する庭園遺構の部分的な発掘調査にとどまったため、建物遺構を含めた本格的な調査は次年度送りとした。

(細見・本中)

**薬師寺典籍文書調査** 東大資料編纂所との共同調査。第16～23, 26函の整理分類・調書作成および写真撮影を行った。うち第18, 20, 23函については調書作成を完了し、第17～19, 21函について写真撮影を終えた。各函には多量な近世文書が収められており、継続中のものも多い(91年7月)。

(綾村・佃・館野・寺崎・渡邊)

**醍醐寺文書調査** 醍醐寺文書の写真撮影を継続中であるが、今年度は第14, 15函につき継続して実施した(91年8月)。

(綾村・佃・渡邊)

**文化庁所蔵品調査** 文化庁所蔵の「和歌駄十種」および「乙木荘絵図」の写真撮影を文化庁分室にて行った(91年3月)。

(綾村・佃)

**石山寺調査** 石山寺の依頼により深密藏聖教調査に参加(91年8, 12月)。滋賀県教委の依頼により竹生島宝嚴寺文書の調査に参加(92年2月)。嵯峨美術短大の依頼により聖教調査に参加(91年9月)。

(綾村・橋本)

**奈良博所蔵金属製容器の調査** 奈良国立博物館所蔵(保管)の青銅製水瓶、鉢など12点を調査、日本のほか中国や朝鮮製品があり、時代は6～10世紀に及ぶ。次年度は主に材質分析を行なう予定。

(金子・毛利光・杉山・玉田・小池・中村)

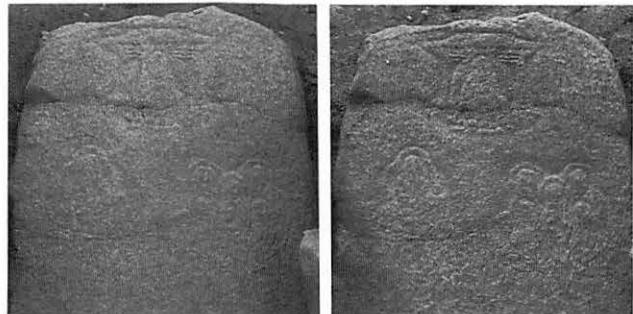
**梵鐘資料の整理・出版** 梵鐘研究の大家、坪井良平氏が、長年にわたって収集した資料を整理し、出版を予定している。今年度は、調書の副本を作るとともに、版下作成のために、実測図・拓本を複写した。

(杉山)

**低湿地遺跡の研究** 英国エクセター大学で開催された先史学会の内容については、昨年の年報で報告した。各国共に低湿地遺跡の調査においては有機質遺物、特に木材の取り上げ、保存処理技術の向上が最大の問題であった。発表要旨を英文で発表した。

(松井)

**埋蔵文化財写真技術の研究** 平成2年度から、埋蔵文化財センターの研修において写真課程が開始されたことにもちなみ、これまでに開発・蓄積し、あるいは新たに研究した技術の公表に努めている。  
('埋文写真研究' vol.2)



(佃・井上・牛嶋) 自然光撮影(左)とストロボを用いた日中シンクロ撮影(右)

# 奈良国立文化財研究所要綱

## I 事業概要

### 1 研究普及事業

#### 公開講演会

- (1) 1991年6月1日 第68回公開講演会  
 「平城京の荷札木簡について」 寺崎 保広  
 「彌生社会のはじまりー木葉紋と  
 流水紋からー」 深沢 芳樹
- (2) 1991年11月16日 第69回公開講演会  
 「文化財の保存科学と国際交流」 沢田 正昭  
 「ラオスにおける文化遺産とワット・ブー」  
 トンサ・サヤヴァンカムディ

#### 現地説明会

- (1) 1991年6月1日 平城宮跡第222次  
 (式部省跡) 小池 伸彦
- (2) 1991年6月15日 雷丘北方遺跡第1次 山本 忠尚
- (3) 1991年9月7日 平城宮跡第224次

(壬生門北)

森 公章

(4) 1991年10月19日 石神遺跡第10次

大脇 潔

(5) 1991年11月2日 坂田寺遺跡第7次

西口 寿生

(6) 1991年11月30日 平城宮跡第213次

(第二次朝堂院東第四堂) 佐川 正敏

(7) 1992年2月29日 雷丘北方遺跡第2次

安田龍太郎

(8) 1992年3月7日 平城宮跡第231次

(左京三条一坊七坪) 杉山 洋

#### 平城宮跡資料館・遺構展示館

見学者数

区分	資料館	遺構展示館	計
1991年	72,226	76,257	148,483
累計	1,172,391	1,501,435	2,673,826

資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

### 2 1991年文部省科学研究費補助金による研究

種別	研究課題	研究代表者	交付額
総合研究(A)	遺跡発掘の機会化に伴う測定および掘削機械の開発研究	鈴木嘉吉	4,500千円
一般研究(A)	データベースの開発による近世社寺建築研究の総括	松本修自	1,000
〃	寝殿造の総合的研究	牛川喜幸	2,400
一般研究(B)	石器製作経過復原と製作追試実験研究	松沢亜生	500
一般研究(C)	平城宮・京出土須恵器の分類产地同定	巽淳一郎	400
〃	古代地方官衙における曹司の研究—国衙・官衙を中心として—	山中敏史	500
〃	古代宮都における内裏の基礎的研究	橋本義則	1,000
〃	日本古代の木製農耕具の復原的研究	黒崎直	1,300
〃	漆の貯蔵・運搬方法に関する基礎的研究	川越俊一	1,000
〃	2、3世紀における中国鏡の踏返しと所謂宋代彷彿鏡の研究	立木修	800
〃	百萬塔の考古学的研究	金子裕之	900
奨励研究(A)	正倉院文書による奈良時代の写経所研究	渡辺晃宏	900
〃	鎌倉時代の軒瓦の地域的比較研究	佐川正敏	1,000
〃	古庭園の景観保全施策に関する研究	本中真	900

試験研究(B)	北方ユーラシアにおける高倉の系譜—東北アジアを中心に—コンピュータグラフィクスによる埋蔵文化財情報の管理システムの開発	浅川滋男 工楽善通	900 1,600
航空写真情報データベース構築におけるデータ入力方法の開発研究	伊東大作	1,200	
フラックスゲートを用いた新しい磁気探査装置—三軸グラジオメーターの開発	西村康	10,800	
国際学術研究 日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究	鈴木嘉吉	10,000	
日韓における考古遺物の材質的検討と保存方法の開発研究	沢田正昭	5,000	
研究成果公開促進費 埋蔵文化財文献情報データ・ベース	伊東大作	6,930	
計	21件		53,530

総合研究(A)(新規)	1件
一般研究(A)(継続)	2件
(B)(継続)	1件
一般研究(C)(新規)	5件
(C)(継続)	2件
奨励研究(A)(新規)	4件
試験研究(B)(新規)	1件
(B)(継続)	2件
研究成果公開促進費(新規)	1件
国際学術研究(新規)	1件
(継続)	1件
計	21件

### 3 飛鳥資料館の運営

#### 展示

第一展示室 常設展示

第二展示室

春期特別展示「飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察」

1991.4.27～5.26 30日間

秋期特別展示「飛鳥の源流」

1991.10.5～11.24 51日間

#### 特別講演会

1991年10月5日

「最近の百済王宮址の発掘」 尹武炳

1991年11月2日

「百済と飛鳥」 猪熊兼勝

#### 普及

インフォメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている。また、特別展示の刊行物として「飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察」(A4版63頁)及び「飛鳥の源流」(A4版52頁)を刊行した。

入館者数(1991.4.1～1992.3.31 開館日数314日)

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	41,793	9,803			
高・大生	7,841	17,472			
小・中生	9,757	41,381			
計	59,391	68,656	128,047	10,001	138,048

#### 陳列品購入

朝鮮古代石像建築仏教関係資料写真

高松塚壁画画像解析のビデオテープ

#### 4 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修 埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

(1) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺跡探査課程)

1991年5月8日～5月18日(参加者10名)

(2) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(環境考古課程)

1991年5月28日～6月19日(参加者23名)

(3) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修

- (一般課程)
- 1991年7月2日～8月9日 (参加者32名)
- (4) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修  
(文化財写真課程)  
1991年8月20日～9月7日 (参加者21名)
- (5) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修  
(遺跡測量課程)  
1991年9月18日～10月17日 (参加者15名)
- (6) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修  
(保存科学基礎課程)  
1991年10月22日～11月1日 (参加者22名)
- (7) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修  
(保存科学応用課程)  
1991年11月6日～11月20日 (参加者11名)
- (8) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修  
(水田遺跡調査課程)
- 1991年11月26日～12月7日 (参加者31名)
- (9) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修  
(漆器調査課程)  
1991年12月17日～12月20日 (参加者28名)
- (10) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修  
(繩文時代遺跡調査課程)  
1992年1月8日～1月21日 (参加者32名)
- (11) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修  
(埋蔵文化財基礎課程)  
1992年1月29日～2月6日 (参加者29名)
- (12) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修  
(城郭調査課程)  
1992年2月13日～2月18日 (参加者40名)
- (13) 平成3年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修  
(有機質遺物応急処理課程)  
1992年2月25日～2月29日 (参加者16名)

研修員一覧表

氏名	所属	受入れ期間	受入れ部局	研究・研修内容
国 内				
石川 隆郎	三重県埋蔵文化財センター調査1課 主任	1991.7.1～1991.9.30	平城宮跡発掘調査部	発掘調査研修
浜口 元	同 上	1991.8.1～1991.10.31	藤原宮跡発掘調査部	同 上
国 外				
金 淳 起	大韓民国湖巣美術館保存科学研究室	1991.10.14～1991.11.13	埋文	保存科学研究
リチャード・ケンブ	英国ヨーク市考古学トラスト上級調査員	1992.3.22～1992.3.29	同 上	考古学研究
S.P.ムッカルジー	インド考古局主任研究員	1992.3.4～1992.3.21	同 上	仏教遺跡研究
K.P.ブナーチャ	同 上	同 上	同 上	同 上
姜 進 展	中華人民共和国故宮博物院学芸員	1992.2.28～1992.8.24	同 上	保存科学研究

#### 発掘調査・保存・整備・探査指導

(北海道) 手宮洞窟、静川遺跡、(青森県) 高野川(2)遺跡、(岩手県) 盛岡城跡、志波城跡、柳之御所跡、(宮城県) 多賀城跡、(秋田県) 波宇志別神社神楽殿、秋田城、払田棚跡、(山形県) 西沼田遺跡、上杉家墓所、(福島県) 慧日寺跡、会津松平氏、大戸古窯跡群、薬師堂石仏、根岸遺跡、(茨城県) 三村山清冷院極楽寺跡及び尼寺入廐寺跡、(栃木県) 法界寺跡、(東京都) 品川台場、

(神奈川県) 旧太田家住宅、三殿台考古館住居跡、(新潟県) 八幡林遺跡、(石川県) 須曾蝦夷穴古墳、(福井県) 野々宮廃寺跡、養浩館(旧御泉水屋敷)庭園、(長野県) 高梨氏館跡、松本城跡、(岐阜県) 尾崎城跡、野古墳群、(静岡県) 久野城跡、賤機山古墳、横須賀城跡、大知波峠廃寺跡、勝間田城跡、巴川遺跡出土丸木舟、(愛知県) 青塚古墳、三河国府跡、東畠廃寺跡、赤塚山古窯跡、(三重県) ヒタキ遺跡、城之越遺跡、赤木城・田

平子峠刑場跡、繩生廃寺跡、伊賀国府推定地、(滋賀県)安土城跡、木村古墳群、大岩山古墳群、栗津湖底遺跡、唐橋遺跡、兵主神社遺構、水口城跡、(京都府)円山古墳、藏ヶ崎遺跡、長岡京跡、恭仁宮跡、瀬後谷遺跡、大覺寺御所跡大沢池、内里八丁遺跡、宇治平等院庭園、(大阪府)狭山ダム、住友銅吹所跡、難波宮跡、大庭寺窯跡、(兵庫県)赤穂城跡、鶴庄莊園遺跡、西条廃寺跡、飾東2号古墳、小犬丸遺跡、石垣山遺跡、播磨国分尼寺跡、玉津田中遺跡、長尾宅原遺跡、成相寺境内地遺跡、篠山城跡、西安田長野遺跡、袴狹遺跡、剛山古墳等、佃遺跡、箕谷古墳群、(奈良県)南紀寺遺跡、杉山古墳、於美阿志神社石塔婆、(鳥取県)梶山古墳、南谷大山遺跡、上淀廃寺跡、東桂見遺跡、鳥取城跡、(鳥取県)荒神谷遺跡、天寺廃寺跡、松江城、(岡山县)馬屋遺跡、備中松山城跡、美作国府跡、(広島県)三ツ城古墳、広島城跡、吉川氏城館跡、冠遺跡群、草戸千軒町遺跡、(山口県)綾羅木郷遺跡、萩城跡・萩城城下町、神鎮山古墳、大内氏遺跡、長登銅山跡、三田尻塩田記念公園釜屋、周防国府跡、岩国藩主吉川家墓所、(香川県)讃岐国分寺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田岡、十一面觀音立像、(愛媛県)来住廃寺跡、古照遺跡、(福岡県)上の原古窯跡、太宰府史跡、鴻臚館跡、板付遺跡、(佐賀県)茶園原遺跡、名護屋城跡・陣跡、築山経塚、吉野ケ里遺跡、基肄城跡、大黒町遺跡、肥前国府跡、(長崎県)海中遺跡、畑ノ原窯跡、(大分県)庄ノ原遺跡、虚空蔵寺瓦窯跡、普光寺磨崖仏、(宮崎県)国衙・郡衙・古寺跡、蓮ヶ池横穴群、(鹿児島県)龍徳院墓地、西丸尾遺跡、清水磨崖仏、(沖縄県)浦添城跡、北谷城跡、湧田古窯跡、今帰仁城跡

#### 埋蔵文化財ニュース刊行

第72号 1989年度埋蔵文化財統計資料

第73号 埋蔵文化財写真業務実態調査の結果

第74号 1990年度埋蔵文化財統計資料

#### 5 その他

##### 委員会等

第18回飛鳥資料館運営協議会

1991年5月14日 於 飛鳥資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1991年6月13・14日 於 平城宮跡資料館講堂

#### 外国出張

松井 章 先史学における「低湿地遺跡革命」に関する会議に出席及びケンブリッジ大学において琵琶湖における発掘の講義及び文献調査のため、イギリス国へ出張

1991年4月4日～1991年4月16日

村上 隆 東西文化における古代金工技法の比較研究のため、アメリカ合衆国へ出張

1991年4月6日～1991年10月5日

佐川正敏 中国社会科学院考古研究所における研究活動のため、中華人民共和国へ出張

1991年5月15日～1991年9月1日

鈴木嘉吉、町田 章、綾村 宏、木全敬蔵 日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究のため、中華人民共和国へ出張

1991年6月18日～1991年6月30日

上野邦一 變化時代における歴史的都市の保護に関するシンポジウムに出席のため、カナダ国へ出張

1991年6月28日～1991年7月6日

田中 琢、沢田正昭、肥塚隆保 シベリア・アルタイ地区パジリク文化王墓の発掘調査における指導・助言のため、ソビエト連邦へ出張

1991年7月1日～1991年8月2日

金子裕之 前文明期の社会組織と構造の研究のため、オーストラリアへ出張

1991年7月20日～1991年9月19日

山本忠尚 シベリア・アルタイ地区パジリク文化王墓の発掘調査における指導・助言のためソビエト連邦へ出張

1991年8月9日～1991年8月30日

工楽善通、沢田正昭、伊東太作 日韓共同研究による、考古遺物についての材質的検討分析資料の収集及び保存処理の技術についての比較研究のため、大韓民国へ出張

1991年8月13日～1991年8月24日

西村 康 考古科学会議に出席・発表及び資料収集のため、イギリス国へ出張

1991年8月31日～1991年9月15日

花谷 浩 日韓馬具の比較研究のテーマのもと、韓国内の馬具その他の研究のため、大韓民国へ出張

1991年9月1日～1991年9月30日

本中 真 イタリア庭園の意匠・構造と立地環境

に関する研究のため、イタリア国へ出張  
1991年9月10日～1992年1月10日

山本忠尚 発掘調査法の研究のため、イギリス、オランダ、ドイツ、スウェーデン国へ出張  
1991年9月24日～1991年11月18日

玉田芳英、深澤芳樹 中国社会科学院考古研究所との共同発掘調査及び共同研究のため、中華人民共和国へ出張  
1991年10月4日～1991年12月2日

町田 章、牛川喜幸、山崎信二、川越俊一、沢田正昭、佃 幹雄 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張  
1991年10月5日～1991年10月25日

岩本圭輔 博物館活動と地域社会に関する研究のため、スウェーデン、デンマーク、イギリス国へ出張  
1991年10月10日～1991年12月10日

浅川滋男 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張  
1991年10月11日～1991年10月31日

工楽善通 福岡県教育委員会が1993年に開催予定している「アジア文明交流展」の展示物の予備調査のため、大韓民国へ出張  
1991年10月23日～1991年10月30日

細見啓三 韓国と日本における遺跡調査及び整備の比較研究のため、大韓民国へ出張  
1991年11月11日～1991年11月17日

上野邦一、高瀬要一 タイ国北部における大規模史跡の保存整備を中心とした地域計画に関する研究のため、タイ国へ出張  
1991年12月24日～1992年1月18日

大脇 潔、館野和己、内田昭人 インド仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究のため、インド国へ出張  
1992年1月8日～1992年1月23日

西村 康、沢田正昭 スミソニアン研究機構との研究打ち合わせ及び資料収集のため、アメリカ合衆国へ出張  
1992年1月10日～1992年1月18日

工楽善通、西村 康、沢田正昭、伊東太作、肥塙 隆保、村上 隆 日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究に関する研究打ち合わせ及び研究成果討論会出席のため、大韓民国へ出張

1992年1月22日～1992年1月25日  
町田 章、巽淳一郎、中村慎一 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張  
1992年2月1日～1992年2月10日  
肥塙 隆保 アメリカにおける文化財資料の保存科学的研究及び視察のため、アメリカ合衆国へ出張  
1992年3月2日～1992年5月2日  
上野邦一 アンコール遺跡の保存修復に関する科学的・技術的調査及び研究のため、カンボジア国へ出張  
1992年3月7日～1992年3月21日  
大脇 潔 地中海沿岸諸国における瓦の起源とその伝播に関する研究のため、エジプト、イタリア、ギリシャ、トルコ国へ出張  
1992年3月14日～1992年5月14日  
細見啓三、島田敏男 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張  
1992年3月16日～1992年3月26日  
西村 康 東アジア地域の古文化財の保存科学的研究のため、アメリカ合衆国へ出張  
1992年3月18日～1992年3月31日

#### 協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが、1991年度の状況は下記のとおりである。

区分	面 積	金 額
1991年度	3,342.14	271,569,976
国有地合計	334,258.03	7104,391,359

#### II 図書及び資料

図書 128,982冊 (1992.3.31)

区分	種 別	購 入	寄 贈	計
1991年度	和漢書	1,035	4,611	5,646
	洋 書	96	102	198
累 計	和漢書	50,139	71,437	121,576
	洋 書	5,896	1,510	7,406

写真 464,678点 (1991年度末)

### III 研究成果刊行物

#### 1 1991年度刊行物

名 称		
史 料	第33冊	山内清男考古資料3
	第34冊	山内清男考古資料4
	第35冊	山内清男考古資料5
図 錄	第24冊	飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察
	第25冊	飛鳥の源流
報告書等	1990年度平城宮跡発掘調査概報	
	飛鳥・藤原宮発掘調査概報21	
	平城宮発掘調査出土木簡概報24	
	飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報10	

#### 2 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師運慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢II
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究—
1962	第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶
	第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察
	第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金龜舍利塔」に関する研究
	第15冊 平城宮発掘調査報告II 官衙地域の調査
1963	第16冊 平城宮発掘調査報告III 内裏地域の調査
1965	第17冊 平城宮発掘調査報告IV 官衙地域の調査
	第18冊 小堀遠州の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊 名物裂の成立

1971	第21冊 研究論集I
1973	第22冊 研究論集II
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査
	第24冊 高山一町並調査報告—
1975	第25冊 平城京左京三条二坊
	第26冊 平城宮発掘調査報告VII
	第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告I
	第28冊 研究論集III
	第29冊 木曾奈良井一町並調査報告—
1976	第30冊 五条一町並調査の記録—
1977	第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告II
	第32冊 研究論集IV
	第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告
	第34冊 平城宮発掘調査報告IX
1978	第35冊 研究論集V
	第36冊 平城宮整備調査報告I
1979	第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告III
	第38冊 研究論集VI
1980	第39冊 平城宮発掘調査報告X
1981	第40冊 平城宮発掘調査報告XI
1984	第41冊 研究論集VII
	第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
	第43冊 日本における近世民家（農家）の系統的発展
1985	第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告
1986	第45冊 薬師寺発掘調査報告
1988	第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書
1988	第47冊 研究論集VIII
1990	第48冊 年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—
	第49冊 研究論集IX
	第50冊 平城宮跡発掘調査報告書 XIII

奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿弥陀仏作善集（複製）
1955	第2冊 西大寺叡尊伝記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 寺誌編1
1964	第4冊 俊乗坊重源史料集成
1966	第5冊 平城宮木簡1 図版
1967	第6冊 仁和寺史料 寺誌編2
1969	第5冊 平城宮木簡1 解説（別冊）
1970	第7冊 唐招提寺史料1

1974	第8冊 平城宮木簡2 図版・解説	1980	第7冊 日本古代の鷦尾
	第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I	1981	第8冊 山田寺展
1975	第10冊 日本美術院彫刻等修理記録II	1982	第9冊 高松塚拾年
1976	第11冊 日本美術院彫刻等修理記録III	1983	第10冊 渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺—
1977	第12冊 藤原宮木簡1 図版・解説		第11冊 飛鳥の水時計
	第13冊 日本美術院彫刻等修理記録IV		第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—
1978	第14冊 日本美術院彫刻等修理記録V	1984	第13冊 藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—
	第15冊 東大寺文書目録第1巻	1985	第14冊 日本と韓国の塑像
1979	第16冊 日本美術院彫刻等修理記録VI	1986	第15冊 飛鳥寺
	第17冊 平城宮木簡3 図版・解説	1987	第16冊 飛鳥の石造物
	第18冊 藤原宮木簡2 図版・解説	1988	第17冊 萬葉乃衣食住
	第19冊 東大寺文書目録第2巻	1989	第18冊 壬申の乱
1980	第20冊 日本美術院彫刻等修理記録VII	1988	第19冊 古墳を科学する
	第21冊 東大寺文書目録第3巻		第20冊 聖徳太子の世界
1981	第22冊 七大寺巡礼私記	1989	第21冊 仏舍利埋納
	第23冊 東大寺文書目録第4巻		第22冊 法隆寺金堂壁画飛天
1982	第24冊 東大寺文書目録第5巻	1990	第23冊 日本書記を掘る
	第25冊 平城宮出土墨書き器集成I		
1983	第26冊 東大寺文書目録第6巻		
1984	第27冊 木器集成図録—近畿古代編—		
1985	第28冊 平城宮木簡4 図版・解説		
	第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻		
1988	第30冊 山内清男考古資料1 真福寺貝塚資料他		
	第31冊 平城宮出土墨書き器集成 II		
1989	第32冊 山内清男考古資料2		

#### 奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編1 解説
1974	第2冊 瓦編2 解説
1975	第3冊 瓦編3
1976	第4冊 瓦編4
	第5冊 瓦編5
1978	第6冊 瓦編6
1979	第7冊 瓦編7
1980	第8冊 瓦編8
1983	第9冊 瓦編9

#### 飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976	第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇
1977	第3冊 日本古代の墓誌
1978	第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇
	第5冊 古代の誕生仏
1979	第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—

#### IV 定 員

区分	指定職	行政職(一)	行政職(二)	研究職	計
1991年度	1	22	2	61	86
1992年度	1	22	2	61	86

#### V 予 算 (1991年度)

人 件 費	646,719千円
運 営 費	861,770
事 業 管 理	6,026
一 般 研 究	57,107
特 別 研 究	61,428
発 掘 調 査	512,909
宮 跡 整 備 管 理	69,967
飛 鳥 資 料 館 運 営	52,513
埋 蔵 文 化 財 センター 運 営	49,803
新 庁 舎 維 持 管 理 等 経 費	27,655
飛 鳥 藤 原 宮 跡 発 掘 調 査 部	24,362
施 設 新 営 に 伴 う 経 費	
施 設 費	406,373
施 設 整 備 費	67,252
平 城 宮 跡 等 整 備 費	324,553
各 所 修 繕 費	14,568
計	1,914,862

## VI 施設

### 土地

奈良国立文化財研究所所管	47,890m <sup>2</sup>
本庁舎	8,860m <sup>2</sup>
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515m <sup>2</sup>
飛鳥資料館	17,092m <sup>2</sup>
郡山宿舎(2)	80m <sup>2</sup>
飛鳥資料館宿舎	1,343m <sup>2</sup>
文化庁所管(関係分)	1,421,668m <sup>2</sup>
平城宮跡地区	1,082,585m <sup>2</sup>
藤原宮跡地区	334,042m <sup>2</sup>
飛鳥稻淵宮殿跡地区	5,041m <sup>2</sup>

### 建物

#### 1. 庁舎 28,035m<sup>2</sup>

区分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥資料館	藤原宮跡	計	m <sup>2</sup>						
							m <sup>2</sup>						
事務室	568	122	197	90		977							
研究・整理室	1,419	1,642	1,205	77		4,069							
資料・図書室	1,021		383	36		1,440							
会議室	338		129	42		509							
講堂		384	210	89		683							
展示室		845	254	648		1,747							
写真室	79	256	149	64		548							
遺構展示棟		1,408				1,408							
車庫	84	968	352	94		1,498							
倉庫・収蔵庫	123	4,728	2,041	480		7,372							
研修棟	1,416					1,416							
その他	1,673	1,818	1,506	1,061	36	6,094							
計	6,721	12,171	6,426	2,681	36	28,035							

#### 2. 宿舎等 486m<sup>2</sup>

重要文化財旧米谷家住宅	213m <sup>2</sup>
郡山宿舎(2)	48m <sup>2</sup>
飛鳥資料館宿舎	225m <sup>2</sup>

### 主要工事

(1) 平城宮跡地等整備費	千円
平城宮跡朱雀門基壇復原工事	81,360
平城宮跡宮内省西北殿復原工事	116,236
平城宮跡兵部省地区復原整備工事	86,314
平城宮跡北面大垣地区整備工事	8,724
平城宮跡第1次大極殿地区地形造成工事	16,305
平城宮跡大型遺物倉庫周辺外構整備工事	2,091

藤原宮跡東方官衙地区苑路造成工事 13,112

#### (2) 官庁営繕費

奈文研大型遺物処理棟建築工事(平成3年度分) 55,826

奈文研大型遺物処理棟設備工事 11,423

#### (3) その他(各所修繕・庁費)

飛鳥資料館給水設備改修工事 1,648

本庁舎非常照明用蓄電池取替工事 2,781

第3収蔵庫非破壊分析実験室空調設備改修工事 1,782

## VII 人事移動 (1991.4.1~1992.3.31)

4月1日 庶務部庶務課庶務係長に昇任

美濃越 進

庶務部会計課経理係主任に昇任

林 正一郎

埋蔵文化財センター教務室長に昇任

臼井 国明

飛鳥資料館庶務室庶務主任に昇任

中西 健夫

庶務部会計課専門職員に転任

櫻井 雅樹

平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に

転任 中村 慎一

文部技官(平城宮跡発掘調査部考古第三調査室)に採用 岸本 直文

事務補佐員(庶務部庶務課)に採用

溝上 裕子

事務補佐員(庶務部会計課)に採用

米田 淳子

研究補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)に採用 伊藤 武

研究補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)に採用 村田 裕一

文化庁建造物課主任文化財調査官に転任 宮本長二郎

和歌山大学学生部厚生課長に転任 登り 悅哉

大阪大学庶務部人事課専門職員に転任 大堀 宏

奈良女子大学会計課用度係長に転任 新井 耕治

大阪大学工作センター事務掛会計主任 岡本 安司

国立民族学博物館情報管理施設情報システム課に転任 今中 弘行  
 4月16日 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 森本はぎ子

4月29日 御逝去 吉村 司朗

4月30日 辞職 吉田 和子  
 辞職 西川 寿勝

7月1日 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 杉山 洋  
 飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 岩永 省三

7月10日 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 小林 玉美  
 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 林 和子

7月31日 辞職 河村 京子  
 辞職 細井 雅子

10月1日 埋蔵文化財センター情報資料室に配置換 森本 普

1月1日 文部技官（平城宮跡発掘調査部考古第一調査室）に採用 白杵 熱  
 文部技官（平城宮跡発掘調査部遺構調査室）に採用 藤田 盟児

## VII 組織規程

### 文部省組織令（抜粋）

昭和59年6月28日 政令第227号

#### 第2章 文化庁

##### 第3節 施設等機関 （施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。  
 （中略）

##### 国立文化財研究所 （国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

### 文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日 文部省令第2号

#### 第5章 文化庁の施設等機関

##### 第4節 国立文化財研究所

###### 第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

###### 第2款 奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

###### 一 庶務課

###### 二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。  
 一 職員の人事に関する事務を処理すること。  
 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関する事務。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保存のための警備に関する事務。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。  
 一 予算に関する事務を処理すること。

二 経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処

理すること。

四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を  
処理すること。

五 庁内の取締りに関すること。

第126条 削除

(建造物研究室等の事務)

第127条 建造物研究室においては、建造物及び  
伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並び  
にその結果の公表を行う。

2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに  
歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその  
結果の公表を行う。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査  
室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調  
査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に関し、次  
項から第6項までに定める事務を処理するほか、  
その発掘を行う。

3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第  
三調査室においては、別に定めるところにより  
分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及  
び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び  
調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び  
修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれ  
らの結果の公表を行う。

6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び  
調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれ  
らの結果の公表を行う。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務)

第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、考古第一  
調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料  
調査室を置く。

2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地  
域における宮跡その他の遺跡に関し、次項から  
第5項までに定める事務を処理するほか、その  
発掘を行う。

3 考古第一調査室及び考古第二調査室において  
は、別に定めるところにより分担して、遺物  
(木簡を除く。) の保存整理及び調査研究並びに  
これらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び

調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに  
関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行  
う。

5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び  
調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれ  
らの結果の公表を行う。

(飛鳥資料館)

第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴  
史的意義及び文化財に関し、国民の理解を深め  
るため、この地域に関する考古資料、歴史資料  
その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に  
供し、あわせてこれらに関する調査研究及び  
事業を行う。

(飛鳥資料館の館長)

第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理する。

(飛鳥資料館の二室及び事務)

第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置  
く。

2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計  
等に関する事務を処理する。

3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。  
一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建  
造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資  
料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の  
作成、調査研究及び解説を行うこと。

二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料  
の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研  
究を行うこと。

三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及  
び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

(埋蔵文化財センター)

第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の  
事務をつかさどる。

一 埋蔵文化財に関し、調査研究及びその結果  
の公表を行うこと。

二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地  
方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の  
関係者に対して、専門的、技術的な研修を行  
うこと。

三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地  
方公共団体の機関その他関係の機関及び団体  
等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び  
助言を行うこと。

四 埋蔵文化財に関する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。

(埋蔵文化財センターの長)

第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。

2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

(埋蔵文化財センターの内部組織)

第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。

(教務室の事務)

第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

(研究指導部の六室及び事務)

第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

(情報資料室の事務)

第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

(客員研究員)

第139条 奈良国立文化財研究所に客員研究員を

置くことができる。

- 2 客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。
- 3 客員研究員は、非常勤とする。

改正	昭和43年 6月15日	文部省令第20号
	昭和45年 4月17日	文部省令第11号
	昭和48年 4月12日	文部省令第6号
	昭和49年 4月11日	文部省令第10号
	昭和50年 4月 2日	文部省令第13号
	昭和51年 5月10日	文部省令第16号
	昭和52年 4月18日	文部省令第10号
	昭和53年 4月 5日	文部省令第19号
	昭和53年 9月 9日	文部省令第33号
	昭和55年 4月 5日	文部省令第14号
	昭和55年 6月25日	文部省令第23号
	昭和58年10月 1日	文部省令第25号
	昭和59年 6月30日	文部省令第37号
	昭和63年 4月 8日	文部省令第12号

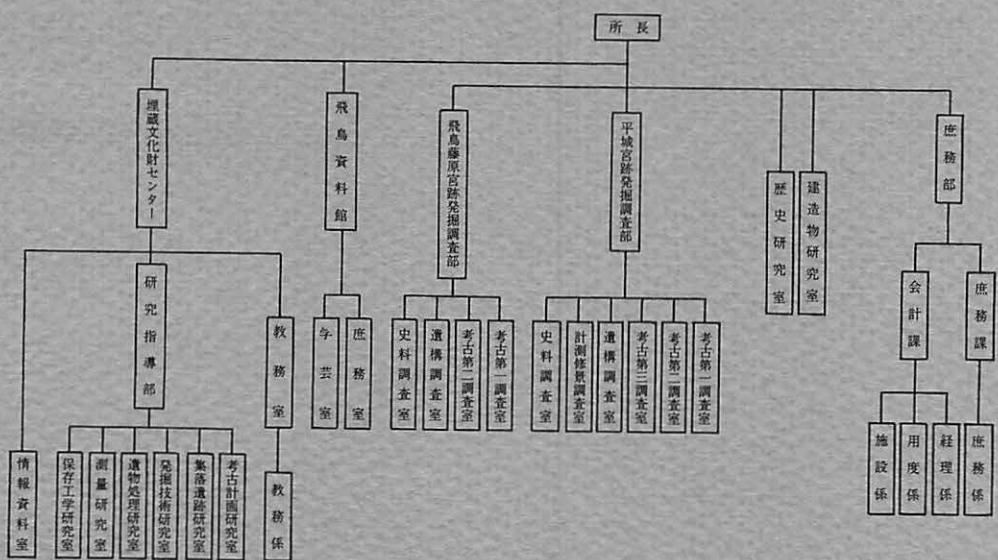
職員 (1992年7月1日現在)

所属	氏名	官職	担当
	鈴木 嘉吉	文部技官所長	
庶務課	小菅 康男	文部事務官部長	
	馬場祐次朗	文部事務官課長	
	宮谷 浩	文部事務官課長補佐	
	西田 健三	文部事務官専門職員長	平城事務
	美濃越 進	文部事務官庶務係長	
	桑原 隆佳	文部事務官庶務係長	庶務人事備務
	岡田 博允	文部事務官警務長	庶務人事備務
	港 悅子	事務補佐員	庶務人事備務
	大西 和子	事務補佐員	庶務人事備務
	福本 良子	事務補佐員	庶務人事備務
会計課	新宮 恵子	事務補佐員	庶務人事備務
	巽 月子	事務補佐員	庶務人事備務
	本中 宣代	事務補佐員	圖書資料開
	中川かよ子	事務補佐員	圖書資料開
	中垣 瞳美	事務補佐員	圖書資料開
	石川千恵子	研究補佐員	圖書資料開
	松岡 進	文部事務官課長	施設
	小野 祐治	文部事務官課長補佐	藤原事務
	渡辺 康史	文部技官課長補佐	藤原事務
	阪本 勇	文部技官専門職員長	藤原事務
部課	櫻井 雅樹	文部事務官専門職員長	藤原事務
	年梅 徹	文部事務官経理長	藤原事務
	林 正一郎	文部事務官経理主	藤原事務
	宍戸 雅子	事務補佐員	藤原事務
	森本はぎ子	事務補佐員	藤原事務
	小林 玉美	事務補佐員	藤原事務
	小林 雅文	文部事務官用度係長	藤原事務
	松本 正典	文部事務官用度係長	藤原事務
	飯田 信男	文部技官用度係長	藤原事務
	林 和子	事務補佐員	藤原事務
建造物研究室	上村 敬子	事務補佐員	藤原事務
	阪本 勇	文部技官施設係長(兼任)	藤原事務
	小園 秀彦	文部技官施設係長(兼任)	藤原事務
	上垣内茂樹	文部技官施設係長(兼任)	藤原事務
	永井 和代	事務補佐員	藤原事務
歴史研究室	米田 淳子	事務補佐員	藤原事務
	細見 啓三	文部技官室長	建築
	山岸 常人	文部技官(併任)	建築
	小野 健吉	文部技官(併任)	遺跡
	島田 敏男	文部技官(併任)	庭園

所属	氏名	官職	担当
考古第一調査室	町田 章	文部技官部長	古古古古
	金子 裕之	文部技官室長	考古考考
	小池 伸彦	文部技官	考古考考
	中村 慎一	文部技官	考古考考
	白杵 黙	文部技官	考古考考
	毛利光俊彦	文部技官室長	古古古古
	玉田 芳英	文部技官(併任)	考古考考
	巽 淳一郎	文部技官(併任)	考古考考
	杉山 洋	文部技官(併任)	考古考考
	山崎 信二	文部技官室長	古古古古
考古第二調査室	小澤 肢毅	文部技官	考古考考
	岸本 直文	文部技官(併任)	考古考考
	佐川 正敏	文部技官(併任)	考古考考
	上野 邦一	文部技官室長	古古古古
	藤田 盟児	文部技官(併任)	考古考考
	松本 修自	文部技官(併任)	考古考考
	浅川 滋男	文部技官(併任)	考古考考
	高瀬 要一	文部技官室長	古古古古
	内田 和伸	文部技官(併任)	考古考考
	小野 健吉	文部技官(併任)	考古考考
考古第三調査室	町田 章	文部技官室長(事務取扱)	古史史史
	森 公章	文部技官	古史史史
	渡邊 晃宏	文部技官(併任)	古史史史
	館野 和己	文部技官(併任)	古史史史
	寺崎 保広	文部技官(併任)	古史史史
	巽 淳一郎	文部技官主任研究官	古史史史
	松本 修自	文部技官主任研究官	古史史史
	野和己	文部技官主任研究官	古史史史
	寺崎 保広	文部技官主任研究官	古史史史
	佐川 正敏	文部技官主任研究官	古史史史
考古第四調査室	杉山 洋	文部技官主任研究官	古史史史
	小野 健吉	文部技官主任研究官	古史史史
	浅川 滋男	文部技官主任研究官	古史史史
	西田 健三	文部事務官事務総括(兼任)	古史史史
	岡田 博允	文部事務官(兼任)	古史史史
	佃 幹雄	文部技官専門職員長	古史史史
	井上 直夫	文部技官専門職員長	古史史史
	牛島 茂	文部技官専門職員長	古史史史
	牛川 喜幸	文部技官部長	古史史史
	黒崎 直樹	文部技官室長	古史史史
飛鳥考古第一調査室	澤谷 浩	文部技官(併任)	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
	井川 喜幸	文部技官部長	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
	井川 喜幸	文部技官部長	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
	井上 直夫	文部技官(併任)	古古古真
飛鳥考古第二調査室	大脇 潔	文部技官室長	古古古古
	西口 寿生	文部技官(併任)	古古古古
	肥塚 隆保	文部技官(併任)	古古古古
	岩永 省三	文部技官(併任)	古古古古
	大脇 潔	文部技官室長	古古古古
	西口 寿生	文部技官(併任)	古古古古
	肥塚 隆保	文部技官(併任)	古古古古
	岩永 省三	文部技官(併任)	古古古古
	大脇 潔	文部技官室長	古古古古
	西口 寿生	文部技官(併任)	古古古古

所属	氏名	官職	担当
遺構調査室	山本 忠尚	文部技官 室長	考古 古建築
	島田 敏男	文部技官	建築
	山岸 常人	文部技官(併任)	建築
	本中 真	文部技官(併任)	遺跡
	川越 俊一	文部技官 室長	考古 古古史
	安田龍太郎	文部技官(併任)	考古
	橋本 義則	文部技官(併任)	歴史
	宮 跡 発掘調査部	文部技官 主任研究官	考古 古学
	肥塙 隆保	文部技官 主任研究官	保存
	西口 寿生	文部技官 主任研究室	科学 古古史
考古部	山岸 常人	文部技官 主任研究官	建築
	本中 真	文部技官 主任研究官	園
	深澤 芳樹	文部技官 主任研究官	考古
	橋本 義則	文部技官 主任研究官	古史
	岩永 省三	文部技官 主任研究官	古古務
	花谷 浩	文部技官 主任研究官	事務
	櫻井 雅樹	文部事務官 事務総括(兼任)	務
	吉岡佐和子	事務補佐員	務
	平山 重利	技能補佐員	守
	宮川 伴子	研究補佐員	備
飛鳥務資料室芸芸室	伊藤 武	研究補佐員	務
	村田 和弘	研究補佐員	務
	鈴木 嘉吉	文部技官 館長(事務取扱)	古
	家村 康男	文部事務官 室長	古
	中西 建夫	文部事務官 庶務主任	古
	乾 春雄	技能補佐員	築
	藤本 清	警務補佐員	古
	福井 敏子	業務補佐員	古
	森井恵三子	業務補佐員	保存
	米川まち子	業務補佐員	科学
工楽普通室	工楽 普通	文部技官 室長	古
	岩本 圭輔	文部技官 主任研究官	古
	千田 剛道	文部技技官 主任研究官	古
	大谷 照子	事務補佐員	務
	大谷 照子	事務補佐員	古
	大谷 照子	事務補佐員	古
	大谷 照子	事務補佐員	古
	大谷 照子	事務補佐員	古
	大谷 照子	事務補佐員	古
	大谷 照子	事務補佐員	古

所属	氏名	官職	担当
理教務室	佐原 真	文部技官 センター長	事務
	白井 国明	文部事務官 室長	事務
	川嵩 保夫	文部事務官 教務係長	事務
	岩永 恵子	事務補佐員	事務
	牛嶋 茂	文部技官(併任)	事務
	猪熊 兼勝	文部技官 部長	事務
	松沢 亜生	文部技官 室長	考古
	立木 修	文部技官(併任)	考古
	山中 敏史	文部技官 室長	考古
	上原 真人	文部技官(併任)	考古
考古部	西村 康	文部技官 室長	考古
	松井 章	文部技官(併任)	考古
	沢田 正昭	文部技官 室長	保存科学
	村上 隆	文部技官(併任)	保存科学
	木全 敬藏	文部技官 室長	測量
	光谷 拓実	文部技官(併任)	遺跡庭園
	松井 章	文部技官(併任)	考古
	猪熊 兼勝	文部技官 室長(事務取扱)	考古
	内田 昭人	文部技官(併任)	古築
	光谷 拓実	文部技官 主任研究官	遺跡庭園
情報資料室	上原 真人	文部技官 主任研究官	考古
	内田 昭人	文部技官 主任研究官	古築
	立木 修	文部技官 主任研究官	古
	松井 章	文部技官 主任研究官	古
	村上 隆	文部技官 主任研究官	保存科学
	伊東 太作	文部技官 室長	測量
	森本 晋	文部技官	考古
	伊東 太作	文部技官 室長	考古
	森本 晋	文部技官	古



# ANNUAL BULLETIN OF THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE 1992

## Table of Contents

	Page
Preface .....	1
Excavation of the Asuka area .....	2
Excavation of the Fujiwara Palace and Capital sites .....	11
Excavation of the Nara Palace and Capital sites .....	18
Investigations into historic architectures in Kobe city (part 2) .....	38
Investigations into the heritage of modernization in Akita Pref. ....	40
Wooden tablets excavated in Asuka and Fujiwara palace site .....	42
Documents on the reverse of Kofukuji buddhist sutra .....	44
Recently found decorated roof tiles produced by same mold with that of the Nara Palace .....	48
Excavated toilet tools from the Nara Palace .....	50
Investigations into zoological remains at archaeological sites (part 8) .....	51
Method of magnetic survey at archaeological sites (part 3) .....	52
Photogrammetric verification of a premodern topographic model of Matsuno town, Ehime Pref. ....	54
Material analysis of items found from Asuka-ike site .....	56
Scientific investigation into stone of the Asuka Area .....	58
Scientific investigation into the mural painting found from Kamiyodo temple site, Tottori Pref., and its conservation .....	59
Conservation display of the Nara and the Fujiwara Palace site .....	60
Special exhibitions at the Asuka Historical Museum .....	64
Public lectures 1992 .....	65
Recent two cooperation with Chinese institutions .....	66
International activities in the field of conservation science .....	67
Brief reports on research tours abroad .....	68
Brief reports on studies abroad .....	69
Other activities abroad .....	70
Specific researches and studies .....	71
Organisation and the summary of activities of the Institute .....	72

Published by  
Nara National Cultural Properties Research Institute  
Nara, 1992